

武装

NO 7



共産主義武装行動委員会機関誌

武 装

第
七
号

共
産
主
義
武
装
行
動
委
員
會

武装七号発刊に際して

.....五

第一部 ソビエト運動と学園闘争の任務

工場占拠闘争の時代における学園闘争の任務 八
 全ての革命的労働者学生を糾合しソビエト革命に向けた巨大な統一戦線を構築せよ 一五
 秋期学園闘争をもって労学底辺委運動の一大潮流化へ突き進め 二一
 学園を根こそぎ組織し労学底辺委運動の全国的潮流を 二六
 真の全人民的反帝闘争 三二

第二部 真の全人民的反帝政治闘争の構築を

ボリシェヴィキの反戦闘争から何を学ぶべきか 三三
 アジア階級闘争の現局面 | 中国・インドシナ・インド亜大陸 | 三七
 近接する学園を出撃拠点と化し軍事輸送阻止の街頭制圧戦を 四八
 神大を拠点にし相模原闘争を貫徹せよ 五二
 インドシナ革命の現段階 | インドシナ人民の切り拓いた地平と今後の課題 | 五四

第三部 あらたな労学結合を創り出し底辺委運動の一大前進を

朝日新聞臨時労働者、首切り合理化粉碎 | 自動機械導入阻止に立ち上る | 六二
 職業病闘争支援を通して真の労学結合をめざす 六五

第四部 各戦線における闘争

君は人民戦争を見たか | 武藤・和田独裁に再び鉄槌下る | 七〇
 右翼機会主義者の戦線逃亡を許さず、更なる前進にむけた革命的統一戦線を構築せよ 七一
 右翼暴力職員の壁を恒常的に突き崩し、立正大を南部労学底辺委運動の拠点とせよ 七四
 武藤・和田追放をめざし、クラス・サークルに大衆闘争委員会を組織せよ 七七

第五部 特別寄稿

首都圏行動戦線連合結成基調報告（結成準備会 七三年六月） 八三
 蜂起戦争派の破産と日本革命の権力問題 八七

武装七号発刊に際して

全都・全国の同志兄弟!!全国各地で闘っている先進的兄弟友人に七〇年代、二年有余の闘いの成果として、又、七〇年代革命的権力闘争の切り開いてきた地平を明らかにし、闘いの「一糧」として頂くために、武装七号を送る。

周知のように、七〇年安保実質化攻撃―七〇年安保闘争の收拾と新たな支配階級の攻撃を着手―を、学園ロックアウンシュピッツ粉碎―学園人民戦争で迎え撃っていた我共産主義武装行動委員会は、その成果と教訓・革命的権力闘争の展望を、基本的に「武装六号」の中で明らかにした。我共武行の唯一無二の指導部―共産主義者党は第二回党大会テーマで正しくも、後退戦におけるしんがり軍として我々の実践を位置づけ革命的権力闘争の当面する総路線を明確に提起した。

われわれは、「武装六号」で確定された運動と組織建設を、この二年有余の闘いを通してより一層豊かにしただろう。

本号の学園闘争に関する論文は、七一年以降の学生戦線の闘いの軸を明確にし、同時に革命的権力闘争の内表形成への闘いへと発展させるべき政治主張となっている。

学生戦線は、武装六号運動総括を基に、学園反乱の基本戦略をロックアウンシュピッツ粉碎の学園人民戦争の創造的適用と発展に置きその基本戦略の下に我共武行は、統一戦線戦術・大衆組織戦術を大胆且柔軟に駆使することを追及した。

これは、個別反乱の永続化の追及と反乱戦線の拡大という目標のために不可欠な、反乱統一戦線への大衆（組織）の糾合による学園反乱の掘り起こしの作業の着手ということであった。

又、より多くの学生戦線を結集するため、情況の異なる各戦線での闘いを指導し、統一性を押し進める指導部組織の政治的質をより一層豊かにするものであった。

本号の活々とした各学園報告を通して、それを背後から支えたわが共武行の基本路線の正しさを読み取ってもらいたいと考える。

学生戦線を軸にした共武行の任務は、「統一戦線」による学園の掘り起こしだけではない。共産主義者党機関紙「前衛」でも明らかにように、党の指導の下に推進された工場闘争―労働者行動委運動の着実な前進に果たした役割りである。工場労働者運動への参加、労学底辺委運動に果たした地区宣伝行動隊への先駆的役割などがあげられるだろう。これも、労学共闘の恒常的組織化の追求として本号に収録されている。

学生戦線の政治論文は、共産主義者党の当面する任務―工場細胞を基礎にし強固な中央指導部を頂く党の建設と、労働者行動委運動の全国化・工場、職場闘争の潮流化―に合流する根拠として学園分析に基づく学園反乱闘争の展望を切り開いているだろう。

とりわけ、筑波法案成立と筑波大学設立を強行した日本帝国主義支配階級、国家権力による中教審路線の実体化は格差付け選別教育の推進と学園管理支配強化を全国的に押し拡げるものであり、それは旧来の学園分析、学生の階級規定を洗い直し、新たな分析を通して、ソビエト運動への結合の革命的意義と、そうした運動へ七〇年代学生運動が大衆闘争として展望しうることを明らかにしている。政治闘争に関わる論文では、ベトナム―インドシナ人民戦争の現

状分析を中心に、各国階級闘争の革命的意義と日本革命の主體的任務に引きつけてプロレタリア国際主義の実践を明確にしていくことを追及している。とりわけ、日本革命における反帝闘争の位置に關して、「共產主義者党テーゼ」は、二つの政治力学の一方を形成していることを明らかにしている。「日本帝國主義は、世界危機にいちやく先駆的に世界革命の主要な震源となったアジアに位置し」「それ故、アジアに開始され、日米安保を一環とするアメリカのアジア侵略体制の一角を焼きつくしつつ燃え広がる革命に無関心ではありえず」「自衛隊を帝國主義軍隊として強化し、アジア反革命として登場しようとする攻撃およびその矛盾動揺と労働者階級人民の反帝闘争による反撃の対決……この階級的攻防が今一つの危機の主要な政治力学となる」と。

「反帝闘争もまた、労働者階級を主力とし、市民的政治闘争と組合的經濟闘争の分離を止揚する革命的権力闘争として、工場を舞台とし、工場からあふれだす形でたかかねば勝利の展望をわがものとしえない……」と「労働者階級の職場闘争力を根底から回復させる反合工場闘争の発展によって決まる」ことを踏まえ、「反帝闘争の全人民的展開」への道の重要な作業であつたろう。(日本革命の戰略問題、日本帝國主義の危機とその政治力学)

われわれは、この反帝闘争の収録論文で、その戰略的展望をおさえると同時に、神奈川県大学の相模原米軍戦車搬出入阻止闘争の取り組みの報告及全体的な相模原闘争に表現された現段階における反帝闘争の総括と教訓を明らかにし、反帝闘争への本格的着手の前段としたのである。

全都全国の同志兄弟!!

われわれは、二年有余、**「抑圧と収奪」と修羅場と化した大学に**

における反乱闘争の恒常的展開とその波及、更に反合反戦制工場闘争との合流をかちとる闘いはもとより、これらを実体的基礎として反帝闘争への取り組みとその全人民的闘いの構築への第一歩を今秋期開始した。

蜂起戦争派批判は、その直接的作業であり、行動戦線連合結成と基調報告はときの声である。

われわれは、この首都圏行動戦線連合結成と反帝闘争の全人民的展開の追及を工場闘争の潮流化形成—行動委連合の全国化—という現下のソビエト権力闘争の緊急な任務に答えるべき学生戦線の全国化への重要な闘いとしてその力量を強めていくだろう。

新左翼諸君が、かつて売り物にした反帝闘争すら、最早独力で推進できないばかりか、社・共を中心とする人民戦線勢力の補足物に甘んじ展望を喪失している現在、**「全人民的展開」の道を唯一切り開くことができるわれわれの双肩に一切の階級攻防の、前進か敗北か、**かかっているからである。

わが共武行は共產主義者党の政治的展望の豊かさに支えられ、統一戦線を工作し拡大し、かならずやかかる任務を最先頭に立って貫徹する決意である。

全都全国の闘う仲間達!!

革命的権力闘争の大道につこう。

そして、わが共武行と伴にその光榮ある先兵の任務をひきうけようではないか!!

第一部

ソビエト運動と学園闘争の任務

工場占拠闘争の時代における学園闘争の任務

1. 工場占拠闘争の時代の開幕

すべての革命的学友・戦士諸君!!

四・一一統一地方選挙の結果は、戦後の一歴史時代が終えんし、日本階級闘争が革命の胎動を開始している事、にもかかわらず、新旧両左翼指導部の果す犯罪的役割の故に、プロレタリアートが革命的権力闘争に組織されるのではなく、擬制の展望を求めて投票行為に動員されている事実を確認させるものであった。

開票の集計が明らかにした自民・社会両党の如実な後退は、戦後

世界体制の危機の深化が政府・支配者階級をしてこれまでの「諸特殊利害集団の利益操作」——利益誘導を通して自民党に投票を結集する政策の物質的基盤を喪失させたと同時に、労働者階級を労働組合という一種のブルジョア特殊利害集団に組織し、それを背景にブルジョアジーと組合的・議会的取引を行っていくらかのおこぼれにありつこうとする社会党・総評型の結集をも破綻せしめたという事実の議会的反映であった。世界資本主義の危機は、特殊利害集団相互の利害対立の調整によって資本家支配を安定させる社会的機構を崩壊に追いやったのである。

すべての革命的学友・戦士諸君!!

世界資本主義の危機は、資本家的支配体制の危機に転化しており階級闘争を体制の枠内で処理する組合的・議会的取引き体制の破綻は、プロレタリアートの大規模な流動化をひき起こし、彼らを体制

内の労働組合闘争とは全く異質な革命的権力闘争に組織する前提条件をつくりだしている。工場の武装占拠を基礎とするプロレタリア権力闘争の全社会的な開花が可能となる時代は、諸君の眼前に到来しているのだ!!

革命的学友・戦士諸君!!

こうした工場占拠闘争の時代、革命的権力闘争の時代への突入は何も今に始まったことではない。世界的には六八年三月のドル金換の停止と六八年五月のフランス五月革命をもって、日本においても六八年と六九年全国学園占拠闘争、地区占拠闘争の爆発の高揚によって工場占拠闘争の時代の幕は、切って落されていたのであるにもかかわらず、学園・地区占拠闘争の公認の指導部の地位にいた新左翼諸派はこうした闘争を国家権力支配階級の抑圧攻撃に対する実力抗議の意志表示闘争にすり変え、その工場占拠闘争への転化を阻害することに全力を尽した。そしてこれが学園占拠闘争の敗北、更には七〇年安保闘争の敗北を決定的にしたのである。

革命的学友・戦士諸君!!

戦後世界体制の破綻は、公害・物価・住宅問題等の矛盾を激化しプロレタリアート・人民大衆の内部に現状打破のエネルギーを蓄積させ始めている。

そして組合的闘争を見限った彼らは一方においては、「犠牲の人民大衆への転嫁」攻撃に対決する自然発生的な反抗——市民的抵抗闘争に組織され、他方においては「不満の体制内的解決」を要求する市民的諸要求闘争に擬制の展望を見出そうとしている。

共産党の躍進の秘密は、後者の市民的諸要求を投票に組織し、合わせてそれ自身としては展望も独自の展開力をもちえない前者の市民的抵抗闘争派も巻きこんだ事であった。公認左翼としての「社共」

の共闘による「進歩」のイメージに都民党の看板と学者の担ぎ出しによって「中立」のイメージをダブらせ、市民的諸要求闘争の主流派として自ら演出することに代々木は成功したのである。

統一地方選挙を通して果たした日共の階級の役割りは、現体制に対する人民大衆の不満を市民的諸要求をめぐる投票市場争奪戦にすりかえ、社会党・総評の組合左翼に代って体制の安全弁として機能した点にある。「秦野当選阻止」、「美濃部批判的支持」を掲げて選挙運動に熱中した新左翼諸君の果たした役割りもその犯罪性においてこれと同罪であろう。彼らは、反スタという名の第二代々木に転落したので。

公害にしろ、物価、住宅問題にしろ、その解決は、現体制の下では不可能であり、せいぜいよくいって部分的な手直しの域を出るものではない。まさに、工場の武装占拠を基礎としたプロレタリア権力による全社会的な規模での社会革命による以外にないのである。だからこそ、市民的抵抗闘争は、工場占拠闘争の登場をもって初めて展望を与えられ、プロレタリア権力闘争の補足の一翼としての位置を持ちうるのである。

全ての革命的学友・戦士諸君!!

工場占拠闘争の時代が開幕し、プロレタリア権力闘争の大胆な推進が問われているにもかかわらず新・旧両左翼指導部の無能故にプロレタリアート、人民の闘争エネルギーが投票行為に集約されている事態こそ、工場占拠闘争の現実的展開を妨げている最大の障害物である。

「一切の闘争を投票に組織せよ!!」を合言葉にしている連中を階級闘争の舞台から放逐し、「一切の闘争を工場占拠闘争に組織せよ!!」

2. 六七年羽田から六八年成田に至る

街頭実力闘争および工場占拠闘争

六七年秋の羽田闘争からはじまる反戦・反安保・反政府の街頭実力闘争は、佐世保・王子闘争を経る過程で広汎な労・学・市民大衆を巻き込み、権力闘争の開始を準備していったという点で積極的な意味をもっていた事実をわれわれは、評価しなければならぬ。

しかしながら、これら諸闘争は、ブルジョアジーの階級支配の原点であると同時に、プロレタリア権力の基盤たる職場・生産点を基礎にした闘いではなかった事、すなわち、真の意味での権力闘争には今だ転化してはいなかったという限界から強化された権力の弾圧体制の前に著しい困難に直面する事となり、ついに六八年三里塚闘争を以って一頓挫を強制されたのである。

街頭における武装闘争はそれ自身としての展開力の限界を暴露されたが、全国学園武装占拠闘争の大規模な爆発を準備する、いわば権力闘争の前哨戦としての側面をも合わせていた。そして東大・日大を頂点とする全国的な学園占拠闘争の発展は、六八年一〇・八、一〇・二二新宿都市反乱闘争に結実するにいたったのである。この学園占拠闘争、地区占拠闘争の圧倒的高揚に対する新左翼諸派の対応はどうであったであろうか。彼らはそれが権力闘争に占める位置を理解しえず、自然発生的なそれへの乗り移り、街頭実力闘争の危機、新左翼の危機を回避する方便としてのみ関わったのである。

まる権力闘争の推進が問われているのである。

3. 安保実質化攻撃としての入管、成田攻勢

相当後退したとはいえ、六九年に入ってから階級闘争の基軸は今だ学園占拠闘争にあったのであり、帝国主義国家権力は、その前面の庄殺と学園支配秩序の回復の問題を回避しては一切の政策の貫徹を展望しえず、七〇年安保闘争の敗北と街頭実力闘争の破産との最終的確認たる六九年十一月決戦敗北まで成田空港建設等の攻撃は今だ全面化するに至らず本格的決着も延期されてきた。なぜならば、①首都の反乱を回避して機動隊を三里塚に集中できないこと、②占拠闘争の弾圧による大衆反乱の基盤の粉砕ぬきには、部隊の量の大小が戦局を左右する平坦地での正面戦は困難であるからである。

そうした視点を踏まえるならば、現在の入管・三里塚問題は、六九年十一月決戦に勝利したブルジョアジーが着手した安保実質化攻撃の一環に他ならない事、従って都市における反乱の、更には学園・地区占拠闘争の敗北の必然的帰結として三月の成田代執行攻撃があった事、すなわち、現下の成田・入管闘争の困難は、六八・六九年に至る学園占拠闘争の敗北と地区占拠闘争の未貫徹に起因するものとしてとらえなければならぬ事が明らかとなるだろう。

階級闘争の主軸たるべく都市反乱、学園・工場占拠闘争の挫折の結果、本来的には副軸であるはずの農村における闘いがこうした事

る。

こうして自らの危機を外的に救済された新左翼の存在、占拠闘争への無自覚的、便乗的関与は占拠闘争の発展を阻害し、ワイ曲する意味で決定的な役割を果たした。学園・地区占拠闘争を全国的な工場占拠闘争に発展せしめる事が問われていたにもかかわらず、彼らは学園占拠闘争を「教育闘争」一般として観念し、いうところの「全人民的階級闘争」への結合発展を全国的工場占拠闘争への発展として追求するのではなく、スローガンの手直しによる主観的なレツテルのはりかえと中央権力闘争なる街頭主義への後退にすりかえたのである。

六八年新宿地区占拠闘争から全国的労働者反乱を展望する視点の完全な欠如から、都市の人口密集点、戦略上の要所から離れた、しかも敵権力が万全の布陣をもって構えている中央官庁街へ裸の突撃を敢行した全共闘部隊は、機動隊に完璧なまでに粉砕され、以降の権力による街頭制圧を許してしまった。更に加えて六八年一・一八一九の新左翼の単純籠城、カンパニア的防衛路線は、七〇年安保闘争の敗北を早く決定的にしてしまったのである。

権力闘争の時代を切り開く上で一定の役割を果たした新左翼の街頭主義は、学園占拠闘争の開始をもって現実権力闘争の先端が開かれるやいなや、その桎梏、障害物に転化してしまつた。階級闘争の一時期に急進派を代表した彼らの破産とその後の市民主義的カンパニア闘争への後退は、彼らの急進性がまさに急進主義そのものでしかなかった事、戦後型階級闘争の急進版に他ならなかった事を暴露した。

彼らを含む一切の既成諸潮流の無力性と犯罪性が明々白々となつた今こそ、新たな指導部による工場反乱、工場占拠闘争をもって実際に無自覚な新左翼によって御都合主義的に主軸に擬制されているこれが階級闘争の現局面における転倒の第一である。続いて転倒の第二としては農民の

闘争の主軸としての位置をしめ、自称「共産主義者」たる新左翼の闘争がその補完物として全くの添え物の存在にとどまっている事実を指摘せねばなるまい。農民の自然発生的ではあるがひたむきな闘いは、すべての人民に激しい共感と国家権力への怒りの感情をよびおこす。しかしながら三里塚闘争それ自体としては、空港建設を阻止するだけの展開力をもちえていない。誰の目にも明らかなるこの冷厳な事実を例のように黙視し、支援や共闘に名をかりて党派の維持拡大を目的として現地動員を行っている処に新左翼諸派の犯罪性があるのだ。

われわれは、安保実質化攻撃の一環に対する反撃としての三里塚闘争の限界を取沙汰してお茶をにごすつもりは毛頭ない。それでは現実的に空港建設の攻撃を粉砕し、現地農民と革命的に連帯しつつ権力闘争の展望を切り開く道は何か。その一つとして現に萌芽的に登場している建設作業そのものに対する攻撃的バルチザン闘争が考えられるであろう。しかしながらこうした闘いは、三七〇〇名という機動隊の大量動員と現地の地理的条件の故に部分的、散発的な形態にとどまらざるをえなかった。そしてまたそれは、バルチザン闘争の本質的な限界でもあった。

そこでもう一度根本に立ち返って問題をとらえ返す必要があるだろう。すなわち、何故に権力が三七〇〇名もの機動隊を現地に投入できたのか。又何故に新左翼が軍事的に不利な三里塚を主戦場に設定せざるをえないはめに追い込まれたのかという問題である。われわれは、先に空港建設の強行は、七〇年安保実質化攻撃に他

ならない事を見た。都市密集点、工場地帯での反乱の敗北が権力の農村への集中を許し、新左翼をして農村を主戦場にする事を強制せしめたのである。とするならば成田空港粉砕も又、現地闘争ではなく、再度都市密集点、工場地帯における反乱を爆発させ、機動隊を人口の密集地帯に引き付けし、人民の渦の中に彼らをひきづり込み、包囲・分断・せん滅する闘いにこそむしろ展望を見出す方針の戦略的正当性が明らかとなるであろう。

われわれは、ここでははっきりと断言する。空港建設を粉砕する為に三里塚に行く必要はないのであり、三里塚闘争即現地闘争という発想は、あまりにも素朴な単純対応主義であると。

工場占拠闘争、工場人民戦争、工場周辺地区制圧闘争の爆発こそ一切の安保実質化、国内抑圧攻撃を粉砕し、プロレタリア権力闘争の巨大な戦線構築の第一歩となるであろう。一切の闘争を工場占拠闘争に組織せよ!!

4. 六八〇六九年における学園占拠闘争と

工場占拠闘争

中大学費値上げ阻止闘争を突破口とし、日大・東大を軸とした六八〇六九年全国学園占拠闘争を敗北に追いやって原因は何か。それは、占拠闘争が「学園」という「部分」においてしか実現されず、プロレタリアートによる工場占拠闘争に転化しえなかつたという問題に一切帰着する。なぜなら占拠闘争は、ブルジョア支配秩序に対する真向からの挑戦を意味するが故に国家権力との対決を不可避と

べての革命的労働者・学生にいかにしてこの戒厳体制に対決し、それを突破しつつ工場占拠闘争を実現してプロレタリア権力闘争を組織するか、という問題が問われているのである。

勿論こうした闘いは、学園占拠闘争の爆発から工場占拠闘争への波及を展望しえた六八年〇六九年当時の発展過程を再現しようとする試みによっては切り開く事はできないだろう。何故なら、強化された帝国主義国家権力は、全学占拠はるか、それ以前の部分占拠の段階で占拠闘争を個別撃破してしまからである。

このことは、更に次の事を意味する。すなわち、全ての革命的学友にとって学園闘争をそれ自体として闘う事はもはや意味をなさなくなっており、地区の職場・生産点を中軸に据えた、あるいは射程に据えた工場、地区占拠闘争への具体的陣型構築作業の一環としてのみ展望をもちうるという事である。

従って各学園の革命的学友の任務は、自ら主体的かつ積極的に地区Ⅱ工場の労働者の闘争との革命的結合を計ること、すなわち、工場へのピラ入れやオルグ活動の日常普及の組織や可能な限りの同志の就職Ⅱ職場への潜入を通して工場内部に秘密地下行動委員会を組織する事にまで押し広げなければならない。常に全階級戦線、とりわけ労働戦線を基軸にしながら自己の学園闘争を位置付け、自己の任務を設定していくという真に普遍的な視点が要求されているのである。

5. 学園戒厳体制を突破し、やむを得ず

工場占拠闘争の陣型を構築せよ!!

し、それが部分的、極地的反乱にとどまる限り、中央集権的に組織されたブルジョア国家権力の集中的攻撃に対抗しえず、敗北を強制されるのは時間の問題だからであり、同時に又、プロレタリアートによる生産点の制圧・占拠に波及しない限り、占拠闘争は、プロレタリア権力闘争として発展・展開しうる内的根拠を獲得しえないからである。従って、学園占拠闘争を担っていた部隊の努力の一切は工場占拠闘争との結合を克ち取るべく集中されねばならなかった。

「最後の勝利Ⅱ革命に至る過程は、敗北の過程である。」という言葉い古された一般論は当時の階級情勢に即して「革命の勝利を切り開く為に、地区占拠闘争を媒介として学園占拠闘争を工場占拠闘争に転化させる」という積極的表現に訂正されるべきであった。

ところが、エセ革命家集団Ⅱ新左翼は、眼前にくり広げられる革命前夜の状況に狼狽し、ブルジョアジーの危機意識の反映に他ならない大弾圧体制に恐怖して革命的敗北主義という名の玉砕カンパニアショーⅡ闘争収拾路線に逃げ込んだのである。先の一般論は、こうした彼らの日和見主義と無能をインペイし、自らをなぐさめる為に大々的の使用に供された。

六八〇六九年階級闘争の全展望は「地区占拠闘争を媒介として学園占拠闘争を工場占拠闘争に転化せしめるかいなか」という一点にかかっていた。従ってその挫折は単なる学園闘争の敗北を意味するにはとどまりえず、プロレタリア権力闘争の一頓座(Ⅱ七〇年安保闘争の敗北)とそれに続くブルジョアジーの更なる追撃戦の開始をも意味していた。事実、帝国主義国家権力は、ロックアウト・アウシュビッツ攻撃を主武器として学園占拠闘争を一層、街頭の制圧、職場支配の強化という一連の安保実質化攻撃に着手したのである。これこそ、学園、街頭、職場の戒厳体制に他ならない。従って、す

帝国主義国家権力は、街頭実力闘争、学園占拠闘争の撃破、粉砕を強行する過程で職場、学園闘争の大衆的反乱、占拠闘争への発展の阻止を目的とした体制をつくりあげた。それこそ、ロックアウト

・アウシュビッツ体制Ⅱ学園・職場戒厳体制に他ならない。安保実質化攻撃を支える敵の基本戦術たるこのむき出しの権力支配に対する対決と粉砕を回避して権力闘争を語る事はできない。革命的学友にとってはさしあたり、自らが所属する学園においてこれを突破する闘いを行う事が要求されており、その質を通して初めて工場占拠闘争への目的意識的関与が可能となるのである。学園戒厳体制こそ、現存する学園ブルジョア体制そのものであり、それへの対決は、自らの学生という存在そのものへの対決を意味するからである。

権力闘争に真に主体的かつ自覚的に参加しようとするならば、もはや学生という身分を前提にし、そこから問題を出発せよとする態度は許されないのであり、いわゆる「学生運動論」は、根底的に止揚されなければならない。「急進的學生にとどまる」ことでは決定的に不十分であり、学生という立場の否定的追求から始まる「自己否定」の論理もその転倒した発想が問題にされなければならない。工場占拠闘争・権力闘争の地平にたち、学園戒厳体制突破の闘いに決起して学生としての自己を権力闘争の主体として革命せよ!!、「自己否定」を否定して自己革命へ!!」がわれわれの合言葉にしなければならないのだ。

新左翼諸派が一貫して屈服乃至はそれへの対決を回避してきたロックアウトアウシュビッツ攻撃を東海大、法政大、明学大の革命的学友は、その本質的弱点を熟知しているが故に粉砕し突破してきた(青年共産同盟機関紙Ⅱ武装六号第一論文Ⅱ行動委員会運動総括参

照)三月一七日の明学大ロックアウト、検問体制粉碎闘争は計画された戦術に基づく遊撃戦で官憲を部分的にせん滅し、その本体を学園人民戦争をもって大衆的に撃退して当局及び教職員を革命的にドウ喝し、分解して検問の中止と正門及び東門のバリケード、検問所の撤去を克ちとった。戦線を逃亡した一部諸君の「事態はかえって悪化する。」というケチつけを意図した願望とは裏腹に、敵の弱点を計算してち密に計画された戦術を駆使して戒厳体制を突破するといふ、ロックアウト・ウシユビッツ体制粉碎の戦術の正当性はあますところなく立証されたのである。

われわれは、確かに独力でも権力の戒厳体制を突破しうる戦術を掌中にしている。しかしながら、それだけで満足するような個別性にわれわれが甘んじているわけではない。権力闘争の視点を踏まえ、今後の闘争の方向は、地区周辺の工場や、他の学園における戒厳体制突破の闘いを自ら主体的に組織していく事、すなわち工場占拠闘争の布陣を構築すべき労学共闘・労学行動委員会運動の展開にある事が明らかとなるであろう。

教室突入、授業粉碎闘争をもって学園支配秩序を粉碎し、ロックアウト・アウシユビッツ攻撃をひき出せ!!

遊撃戦と群衆戦の結合||学園人民戦争をもってロックアウト・アウシユビッツ体制を粉碎せよ!!

学園、戒厳体制を突破する質をもって工場占拠闘争の実現にむけた巨大な陣型を構築せよ!!

あらゆる学園、職場に大衆行動委を組織せよ!!地区労学行動委運動の展開をもって地区拠点工場を包囲、攻めのぼる布陣を構築せよ!!

入管二里塚等の一切の闘争を工場占拠闘争に向けた学園、職場反

乱として組織せよ!!

ブルジョアジーの攻撃に屈服し、工場占拠闘争に向けた学園・職場反乱を放棄している一切の左翼諸潮流を階級闘争の戦線から放逐せよ!!

プロレタリア権力闘争の尖兵||共産主義武装行動委員会を拡大強化せよ!!

これが工場占拠闘争の時代における学園闘争の方針である。全ての革命的学友、戦士諸君!!

工場占拠闘争の陣型構築に向けた巨大な進撃を開始しようではないか!! (七一年一月)

全ての革命的労働者学生を

糾合しソビエト革命に向けた

巨大な統一戦線を構築せよ!!

1.機は熟している!!

前衛に結集する

全ての革命的同志諸君!!

工場占拠―二重権力―武装蜂起―世界革命戦争のソビエト革命戦略のもとに全組織をあげて開始された工場工作運動の前進と拡大は更なる飛躍―運動を社会的潮流に押しあげる任務―に答えぬく事をわれわれに要求している。

即ちそれは、①戦後世界体制の崩壊の 速度的進行が日本の階級情勢をして全社会的な規模と工場、職場の深部に至る深さをもって流動せしめている事実、②新・旧両左翼の路線がその無展望を露呈しつつあり、③既成左翼への批判を通して漠然と新左翼諸派に吸収されていた諸グループが独立化し、本格的工場・職場闘争に取り組

もうとする動きが表面化している事実の確認を踏まえて、④われわれにとつて自己を革命指導部としてきたえあげ、彼らを糾合しつつわれわれの運動を社会的な勢力として登場させていく事こそ焦眉の課題であるとするものであった。

本年一月の党員協議会以降一環して続けられてきた工場占拠闘争の陣型構築に向けた工場・職場闘争の組織化は、一方にあってはわれわれの内容に注目した諸グループとの接触をもたらし、他方では職場における新左翼をも含めた諸集団との接点を拡大しつつある。

全ての同志諸君!!

われわれの組織的実践の積み重ねこそ統一戦線戦術と党派闘争戦術、更には大衆組織戦術の駆使を通して、われわれの革命的闘争を社会的運動潮流に形成する任務をすぐれて現実的な文字通り焦眉の課題として実践的対決をわれわれにせまる最大の要因をつくりだし

たのである。

この焦眉の課題に答えられるかいなかは全労働者・人民に対してプロレタリア・ソビエト革命の最大号令を発する地位にわれわれが到達しうるかいなかを決定する第一の関門となるだろう。闘争と組織の外に向けての発展は内に対してはわれわれの前衛党としての質を改めて問い直させる契機となっている。

2. 自己と他を区別する

とうとうから出発せよ!!

『前衛』結成以来の組織総括が、全組織的にとらえかえされたのが昨年夏の第一次「党」革命であった。その最初の決算報告が「前衛」四六号の福原論文であったであろう。そこでは「七〇年安保闘争の敗北とは新左翼という名の反政府実力闘争左翼に対するわれわれ『前衛』の敗北以外の何ものでもない」とされ「その根本原因根本責任は、わが『前衛』中央委員会の実践上の日和見主義と組織上の無責任体制にあった」として党の革命を提起し、「その為の第一歩としてわが中央委員会を職場・学園・地区の戦闘組織を基礎にした前衛の前衛として確立し、そこから一切の革命的空白句と実践的日和見主義と組織的無責任体制をたたき出す事」を提唱した。この主張の基底にあるものこそ、「共産主義党とは」「革命的直接行動の党」「戦闘行動の前衛」としてのみ「プロレタリア階級の革命的前衛」であるとする「前衛党論」であった。

すべての同志諸君!!

第一次革命の直接産物こそ革命的直接行動の前衛の行動委員会版としての、共産主義武装行動委員会であった。

的な体質にともすれば落ち入りがちな側面をも有していた。大衆運動主義と組織日和見主義という傾向がそれである。

全ての同志諸君!!

大衆運動主義と組織日和見主義の発生は、実は、第一次「党革命」の不充分性に由来しているのである。「党を戦闘行動の前衛とする規定」は、確かに組織内の実践的日和見主義を一掃する上で多大な功績を果した。けれども、党と大衆の区別を不明瞭にするこの規定は、大衆運動主義的傾向や組織日和見主義的傾向を助長する事があった。その発生を未然に防ぐ歯止めたりえない。なぜならそれは、自らが先頭に立つ事によって大衆を牽引するという任務にのみ活動家の関心を向かわしめ、大衆を組織するという肝心の任務の遂行を等閑に付せしめるという限界を免れえないからである。

同志諸君!!

党を革命闘争の戦闘組織一般と鋭く区別する内容、まさに党を党たらしめる最大の条件こそ「プロレタリアートを革命に組織する」という任務なのである。大衆との区別を曖昧にし、組織化という最高の任務を二の次にする傾向は、われわれの闘争の成果を組織的に集約する上での桎梏となっていた。

4. 統一戦線戦術と大衆組織戦術

潮流化運動を担おうとする全ての同志諸君!!

自らを他と区別するにたる内容を獲得する事こそ、統一戦線戦術と大衆組織戦術を駆使する為の最大の前提条件であった。しかしな

共武行は結成以来ロックアウト・アウシュビッツ体制粉砕闘争、新左翼党派闘争の断固たる遂行を通して不敗のロックアウト・検問体制粉砕闘争戦略とそれを担う主体としての自己の成長を獲得してきた。(青年共産同盟機関紙、武装六号参照)まさにこれこそ、帝国主義国家権力の支配維持・強化策動の環にロックアウト・アウシュビッツ攻撃を突破・粉砕し、プロレタリア権力闘争を推進する為の不可欠な前提条件であり、カンパニアの抗議集会やデモでお茶をにごすか、アリの玉砕に突入闘争を行うかして、闘いの終末を確認する新左翼の闘争の無力ぶりをあますところなく暴露し、権力闘争の唯一無二の牽引部隊としてわれわれを新左翼諸派と明確に区別しつつ、自らの絶対的優位性を確認する過程でもあった。

革命的同志諸君!!

大衆組織戦術や統一戦線戦術というこの一見中広主義を感じさせる戦術こそ、それを駆使しうる主体として自らを他と明確に区別する行為を最も多く要求する!!自らを他と区別することなしにこれらの戦術を採用するならば、自己を大衆や統一戦線一般に埋没、溶解させて党派性を解体する結果を招く事になるであろう。

3. 光栄ある孤立主義を止揚せよ!!

全ての革命的同志諸君!!

昨年九月以来の共武行の闘いは、先にも確認した如くわれわれの路線と、実践力の他に対する絶対的優位性を確立する過程であり、われわれが社会的勢力にのし上がる為の主体的条件を形成する過程でもあった。しかしながらそれは、光栄ある孤立として一種の閉鎖

がら区別する事は、それを最大の武器として再度他党派や大衆に闘わる行動を欠くならば、まさにその前提条件である事の意味を失うであろう。それでは区別した上での連関は、どのようにして行なわれるべきであろうか。まず最初に確認されねばならないのはこれがまさに「戦術」であってプロレタリア階級闘争の二面性やその矛盾などという原則一般から短絡的に導き出そうとする事は、方法的にも実践的にも誤りであるという事実である。戦術である以上、統一戦線戦術及び大衆組織戦術は、その時点その局面に応じて適用する対象や目的を異にするものであり、いつでもどこでも常に適用しうるなどという個定化されたスタイルを用えない事は当然至極といわねばならない。個々の戦術を原則問題から直接に導き出しうるものであるならば、戦略や情勢分析―政治配置の確定などは無意味となるかせいぜい付け足しになってしまいうのである。

5. 誰を解体し、誰を糾合するか

革命的同志諸君!!

統一戦線戦術や大衆組織戦術を確定する為にはまず第一に、戦略を基準に敵権力、左翼諸潮流、大衆の各層の基本的動向を確定しこれらの政治的位置を確定しなければならぬ。(政治配置の分析)続いて第二に敵権力に対する攻撃を組織しながら解体する対象と糾合する対象を決定しなければならぬ。(戦略の戦術化)

諸政治勢力の政治的位置を確定する事は、彼らが組合主義者であるとか、その急進版であるとかを云々する事と同義ではない。むしろ

るそこに分析の目的を限定する事は、彼らの立前をうのみにする事になり、意識内容それ自体を問題にする革マル的観念主義への転落を意味するであろう。われわれが問題にしななければならないのは、彼らの行動がどのような意味をもっているのか、あるいは、われわれの戦略計画の実践化を通してどのような意味をもたせうるかである。

6. 統一戦線戦術と大衆組織戦術 の具体的適用例

例を示そう。

六九年十一月決戦においてわれわれは新左翼諸派の羽田現地闘争路線の没戦略性を批判し、新宿都市反乱↓都市密集点での人民戦争による敵権力の寸断、マヒ↓工場占拠ゼネストという戦略を提起した。彼らの路線は、党派軍団による裸の突撃↓政策阻止であり、それ自身からは学ぶべき点は一つもない。しかしながらわれわれの戦略に従って彼らを再度位置付けたらどうなるか。彼らの絶望的な現地決戦の呼号は、万余の機動隊を羽田周辺にぎぎ付けたし、われわれの第一の攻撃地点、新宿の防衛体制を決定的に手うすにした。その結果、われわれの路線に呼応したべ平連の先進的部隊の登場もあって都市人民戦争の第一の条件である群衆の流動化とその組織化が克ち取られ押せば引き、引けば押すという一見不定型な大衆による陽動作戦にまんまとひっかかった敵権力は、防衛線を次第に延長し、ついには大衆の包囲の中で随所に小部隊が孤立するという配置が形成されたのである。一代の痛恨事は、そうした群衆戦と呼

応して分断され敵をせん滅すべき「正規部隊」の組織化をなしえなかったという点であった。分散した敵を各個に撃破し、新宿地区の警備体制をマヒする事ができたならば、羽田と中央官庁街に重点的に配備された敵の布陣は一気に崩れ混乱と再編を余儀なくされたであろう。おっとり刀でかけつける増援部隊を迎え打ち、粉碎していたならば、十一月闘争の局面は全く違った展開をみせたに相違ない。統一戦線の問題をこのように整理する方法の長所は次のとおりである。まず第一に、敵権力の粉碎に向けた攻撃的かつ包括的な形で統一戦線戦術を決定できる事、第二に六九年十一月決戦の二重の敗北の意味が単に実践的に日和ったとか街頭主義者たちと党派闘争をやらなかつたという指摘一般にとどまらず、群衆戦・遊撃戦・正規戦の三重層の結合としての都市人民戦争を完成させる為の最後の条件―正規部隊の未完成として優れて主体的実践的に把え得る事。(共武行の戦歴は、われわれの部隊の質が今や分断された機動隊をせん滅するに足る資質を獲得するにいたった事をはっきりと示している。)第三に、他党派の無自覚な自然発生的闘争をわれわれの戦略の実践的展開の過程に位置付け、包摂する事により彼らの党派性を解体しつつ、統一戦線の基軸を現地闘争と党派軍団の突撃から都市人民戦争↓工場占拠ゼネストの戦略に転化・移行させ、新たな再編を展望することができると、これである。これこそ活動家集団―新左翼諸派より一步高い次元から階級闘争に関わる「党」の取るべき態度であるだろう。

以上は、六九年秋段階の政治配置を前提にした戦術総括であり、新左翼諸派の政治的位置も変化しているからこれをもって現在の統一戦線戦術の基本的性格を決定する事ができない事は自明である。もう一つ例をあげよう。

本年三月のロツクアウト・検問体制粉碎学園人民戦争によって明学大当局及び高輪警察署は、切り札を封じられて全くの無展望に陥った。授業粉碎、教授人民裁判闘争の連続的展開と高場に狼狽し、機動隊を出動させても群衆戦の威力の前になすところなく引上げざるをえなくなるからである。

一方、戦線逃亡者、叛旗、青解は、久しく大衆の前に姿を現わすことすらできなかつた。われわれの領導する学内流動制圧戦と機動隊撃退戦は、広汎な活動家と大衆を結集してブルジョアジーの学園支配体制を恒常的なマヒに追いこんでいった。

にもかかわらず、われわれは、行動上糾合しえている活動家や大衆を組織的に獲得することに成功したとはいえなかつた。その理由は、第一に、大衆闘争の進展にのみ目を奪われて組織化する余裕を持ちえなかつた事、第二に、彼らを直接に党派に結集しようとするあせりがあったことにある。

われわれは、彼らの政治的發展段階に応じて流動制圧戦、学園人民戦争の戦略上の位置づけと役割りを与え、彼ら各々が可能とする行動を彼らの現在の到達水準に応じて多様に提起する必要がある。その上で彼らが自然発生的に或いは、われわれの指導のもとに行なうた行動がわれわれの高度な闘争と相互補完関係にあること―大衆の闘いの戦略的意義―を理解させねばならなかつた。そうするならば、共武行を頂点とする学内諸集団の重層的統一戦線をわれわれの戦略を基軸に構成することができたであろう。

こうした作業のもたつきは、叛旗・青解のわれわれとの正面切った対決を回避しつつ、陰にまわって右からの批判を行い、一部活動家の日和見主義的意識に免罪符を与えて隠微なフラクを形成しようとする保身術を許すことになつた。

しかしながら一・二四大衆団交以来われわれの党派闘争戦術は一変した。民主的ポーズをとる取り巻き教授を人質として差し出しつつ、何らの言質を与えないまま時間切れによる捕りヨの釈放をねらうという当局の団交乗切り戦術に乗せられて追及の打ち切りを宣言し、抗議デモによる集約をはかろうとした叛旗・青解の戦線逃亡をわれわれは実力で阻止した。その下で、人質の教授共は、大学の首脳部の執行権力独裁を隠蔽する無花果のハッパにすぎない事を敵の術中に陥った叛旗・青解を反面教師として利用しながら大衆的に暴露したのである。

全ての同志諸君!!

青・叛の弱者連合をあざけりながら、なおかつ積極的な介入、解体闘争を不充分にしてきたわれわれのこの転換は、何を意味するのだろうか。それは、光榮ある孤立主義から学内全政治勢力に対する切込みという統一戦線の形成―まさに主流派としての党派闘争―にわれわれが乗出した事を意味するものであったのだ。

7. 潮流化運動を組織する主体に 自らを飛躍せしめよ!!

革命的同志・戦士諸君!!

現下の階級情勢の分析の基本は巻頭論文で明確に示されている。われわれの統一戦線と組織戦術の方向は明々白々である!!新左翼のくびきを離れ、生産点にへばりついて闘争を組織しようとする闘争している先進的労働者、活動家こそ第一に結集すべき対象なのだ。職場支配秩序と民同・同盟支配の間隙をついて反抗を開始している労働者こそ組織する対象なのだ。そして組合主義者及びその補完物―

新左翼が解体すべき標的である。
敵の学園、職場支配の弱点を発見し、革命的労働者・学生の強固な戦闘をもって攻撃を集中せよ。あらゆる間隙について多様な攻撃をくり広げ敵を奔走、疲弊せしめよ。

同志諸君!!

先進的労働者、諸集団との結合は、われわれの党としての資質に冷酷な審判を下す歴史の法廷ともなるだろう。戦術の原則をあれこれと論議する事ではなく、それを駆使しうる主体を確立する事が死活問題なのだ。階級情勢総体を踏まえつつ、各学園、職場の政治配置をよみとり、統一戦線と大衆組織戦術を駆使しプロレタリア革命に向けた巨大な戦線を構築せよ!!

共産主義武装行動委員会党委員会

(七一年二月)

秋期学園闘争をもって

労学底辺委運動の

一大潮流化へ突き進め!!

潮流化運動の開始の中で諸産業、諸戦線の意味をたちいって確認しなければならぬ。

① いうまでもなく、日本帝国主義の心臓部は、鉄鋼、自動車、電気、化学、機械等の民間重化学工業である。と同時に、それは最も強固な労務管理体制の中で、労働者を支配し搾取する牙城でもある。ここでの工場工作は、日本帝国主義の心臓部転覆に向けて準備する必要として前衛六七号の自動車戦線報告に示されるように、(1)産業分析―資本の動向と諸産業との関連―(2)労働戦線の動向の確定を通じた党的な地域に基盤をもった産業別フラクション活動である。又、工場内の活動も、労働体系―生産工程を労務管理体制を通して普段に合理化する支配の中で長期にわたらざるをえない。

② 中小企業戦線では、系列中小企業と独立中小企業に区別される系列中小は、拠点大企業への工作配置計画の一部として、大企業攻

工場労働者を軸とするソビエト運動の潮流化形成という現局面の任務を鮮明にする為に日本帝国主義の産業配置の戦略的意味を確認しなければならない。それはわれわれの工場占拠・労働者武装―二重権力―武装蜂起の戦略骨子の陣型が同時に優れて帝国主義自身の経済構造に見合った、従って支配階級にとっての環である民間重化学工業―大企業を地区的拠点とする中小企業、国鉄全通等の公労協

戦線、学生戦線に代表される包囲の陣型論であった。

そして、われわれは、一年有余の実践の中でこの教訓を加味し、

1. 工場占拠闘争の包囲の陣型の戦略的内実

略の不可欠な要素を構成する。親会社の引き締めと合理化の矛盾をまっさきに食らうのは、より弱い地位の系列中小企業であり、闘争の火の手は、こうした系列中小企業の反乱から掘り起こされ、燃え移る。

このように大企業の拠点工作配置は同時に系列中小企業の工作配置との地域的、産別的統一計画の下に遂行されなければならぬ。独立中小企業は、電気・機械等多かれ少なかれ大企業の下請企業として存在しており、過酷な生存系列化のための競争の中で系列中小企業より一層弱体である。そして労働条件の劣悪、労働強化、低賃金、使い捨ては、自然発生的抵抗を日常化させており、労務管理はある所でも極めて不十分であり同族経営や管理者の手腕に任せるという具合である。

このことは、独立中小企業の闘いがすぐにも運動化する条件を与えており、職場闘争の教訓が示すように労働者に密着した要求課題を軸に、職制課長等をマヒさせ、行動委を含む諸グループの全企業制的制圧を可能にするばかりか同時に行動委員会運動の生きた教訓と戦術の無限な供給源である。

③運輸通信の全国機関としての国鉄・全通等の公労協戦線は総評・民同下の一定の民主主義的存在と、それへの国鉄マル生攻撃、全通における慣行剝奪等労務管理強化と組合破壊攻撃の強化の中で、労働者階級の流動化と職場内での反抗は日常的になり始めている。労働運動の右翼的再編の進行の中で最後の組合主義労働運動の特色であり、組合破壊のみならず労働者の締めつけによる労務管理体制の各職場における攻勢は、旧来からの労働者階級全体に与える影響力からしても、労働運動の新しい潮流の突破口を切り開く地位を有している。とりわけ、全通戦線はその職種からして、地区体制に密

着しており、戦後の四七年六月の全通松江臨時大会を出発点にした一年有余に亘る地域人民闘争と全通の役割が示すように(その職場闘争は、たてまえ上地労委に提訴しつつも、地方別に要求をまとめ地域共闘をつくり、地方行政に対する闘争を組織する動力たりえた)地区的組織の強力な推進力としての地位をもっている。特に集配課の労働者は、配達を通して地区の地理的状况を熟知しており、工場闘争の発見、情報収集、コネつけ連絡等々、情勢と労働者の政治的質に応じて地区工作活動の積極的役割をもつものである。

まさに全国単一企業であり、かつ地域に密着しているという全通は、われわれの工作の一定の前進にあって、全国的制圧一潮流化の骨格となりうる地位を与えられている。従って全通・公労協戦線の制圧と、工場工作者創出の根拠地の拡大発展は、自身の闘争を貫徹し、かつ地区工作活動を可能にするという事から底辺委員会運動・行動委員会運動の潮流化の重要な戦線である。

2. 底辺委運動と学園反乱

ソビエト運動の潮流化の根本問題は、地区底辺委一行動委連合の発展によってのみ可能となる。

七一年一月党员協議会以降、工場占拠一重権力一武装蜂起、ソビエト権力の樹立の権力闘争の本格的な着手に党体制の再編をも含め総力を挙げて推進してきたわれわれは、工場工作活動と幾つかの工場闘争の教訓を経て、党建設を媒介とした地区底辺委一行動委連合の建設をかちとってきた。

地区毎に戦略配置し自動車・電気機械等の拠点大工場とその包囲の陣型計画の下に、工場工作者と学園反乱闘争を担う共武行を含むて実現されなければならない。

『底辺委運動にあっては、この意味で地域組織を軸にし、産別組織をも積極的に利用したゼネスト的混乱の創出と蜂起一権力の計画をうちたてられなければならない。たとえば首都圏のみでも、南部・川崎内陸地域の電気、三多摩の自動車、臨海の造船、石油といった主要産業の攻略に応じた、周辺職場工場闘争の結合と、官公労による全国縦断的闘争の計画との結合によってはじめて地域闘争を全国闘争へと発展させる事もでき、底辺委運動の主要課題は、こうした地域に基礎を置き、蜂起の基礎としての全国ゼネスト的混乱の形成を大衆的規模での権力闘争として押し進める事にある。』(地域人民闘争の教訓と底辺委運動「前衛」七〇号)その戦略的任務を更に、潮流化として実現する為に、(イ)工作者は統一戦線を駆使する主体として行動委員会建設を通して実体的力量を形成し、(ロ)それを底辺委運動として地区における統一戦線の誘導、工場工作の作風工場闘争の新たな戦術内容として、教訓化し、飛躍させる。(ハ)工場占拠闘争の包囲の陣型の戦略的内実のみならず、全通戦線、公労協戦線の攻略体制を学生戦線との固い結合によって運動化し、底辺委計画のもとに地区宣伝活動を、より強化する事。(ニ)工場の反乱の職場に転化し工場工作者創出の根拠地の位置にある学生戦線の指導と工作を強め学園反乱戦線を波及させる事である。

わけても、底辺委宣伝行動隊として、即組織しうる学生戦線は、潮流化、運動過程の中で、更に独自の指導部と底辺委宣伝行動隊として出発する学生戦線の波及(全国的波及)と新たな学生運動の潮流を形成しなければならぬであろう。それは単に日本革命への目的意識性の上からばかりでなく、われわれのロック・アウシュビッツ粉砕の基本戦略が示すように先進的

学生の活動家を内的に結合させる底辺委を組織し、底辺委の計画の下に、工作者による工場闘争、労働者行動委運動が開始されたのである。

われわれが、目的意識的に権力闘争一ソビエト運動として工場闘争を開始する時、同時にそれは、地区の拠点大工場を軸とする工場ゼネストの戦略的展望と計画を実現する地区組織としての底辺委運動として労働者、学生を内的計画や状況報告を相互に討論し確定する一に統合して展開する以外にはない。こうする事によって、地区戦略一工場占拠闘争の布陣を具体化し同時に工作者による行動委運動を計画的に遂行しうるのである。学園反乱闘争を担う共産主義武装行動委を含む各大学行動委員会の革命的学友は、工作者の工作状況に即して工場ピラマキ活動等の地区宣伝活動を担い、底辺委の地区宣伝隊としての役割を担ってきたのである。

又、共産主義武装行動委員会を指導する学生戦線は工場闘争の本格化の中で学費攻撃を初めとする様々な合理化と処分弾圧の中で、不断に流動する学生大衆を、ロックアウシュビッツ体制として全共同運動の敗北過程を通して形成された学園支配弾圧体制粉砕の基本戦略のもとに、闘争を計画し統一戦線を工作し、学園反乱の戦略的布陣の実現に向かって工場工作者を送り出す、強力な根拠地に転化しているのである。

こうした未だ微力とはいえ、権力闘争を担う党と底辺委運動の推進は、党建設の具体的任務として、規約作成と中央指導部の建設とその下における党の政策の定式化ばかりではなく、産業別企業の戦略的位置付けと分類によって工場闘争の基本戦略を定式化するとともに、一歩進んだ戦略綱領の具体化一政策化に着手するという任務を要請しており、それは党指導による行動委連合の結成と結びつ

学友たちにとっても、学生運動の展望が、ソビエト運動として労働者階級との真の結合を通す事以外に勝利への道はないからである。

3. 統一戦線戦術を駆使し

学園反乱を拡大せよ！

ソビエト運動、底辺委運動の潮流化の一翼を担う新たな学生運動の潮流化は急務の課題である。

それは以下の理由による。

①確かに、権力闘争は、労働者階級を本隊とし工場を主戦場としている。だが、権力闘争を準備する反乱は、その戦術高地の周辺からのほりつめ発展する。同時にそうしたよりブルジョア支配の弱い戦線での反乱のくりかえしは、勝利する権力闘争への戦術主体の建設を無限に保障する根拠地となる。②又、学生運動のクライマックスとしての全共闘運動の主体的敗北（主体側として全共闘運動を通して労働者階級との革命的結合をその展望とするのではなく、学生権力、解放大学、自己否定、等に見られるような、学生独自でその展望を切り開けると錯覚する主体の限界）という伝統と、③以降の敵権力、支配階級の攻撃と弾圧の質から、④更に学生運動を反戦政治闘争として展開している新左翼運動は、ベトナム・インドシナ解放革命戦争の、勝利的推進という事態を前にして、その運動の硬直化によって結集力と高揚を欠くあり様である。

米軍相模保給所からのベトナムへの戦車輸送阻止をめぐる闘いを革新市長の票かせぎと社会党の順法阻止の奇策による地域住民の結集に乗じて現地の実力阻止という左翼的補完物として登場し、かっ

こうした情況の相異なる三つの大学でのわれわれの運動（基本戦略の方針化と統一戦線技術の駆使）の教訓は、①恒常的反乱に転化しているソビエト運動の根拠地。②国家権力のみならず、暴力支配（教職員、右翼体育会）というアウシュビッツ大学での民主化闘争による広汎な学友の結集による反乱の堀り起こしをとおして中核組織の建設と定着によって、根拠地化をめざす（立正大、日大、東海大等）。③新左翼系セクトの存在する大学や、又自治会のある大学で、なりふりかまわずストライキを打ちたがる諸君が存在し、平時は民主主義的で潜在的にはアウシュビッツ化（体育系が当局によって組織されたり、教職員が担ったり、ガードマンが雇われたりする）する大学（大正大、上智大、青学等）に大別されるが多少の情況の違いはあれ、全国の学園に相通するものである。

こうした統一戦線戦術の駆使を含む学生戦線における基本戦略の確定と実践的貫徹にこそ、われわれが新たな学生戦線の潮流を組織する主体的条件に他ならないだろう。

われわれは当面共産主義武装行動委員会を新たな学生戦線の潮流の指導部としてうち固め、われわれと共にその任務を担う大衆的機関を統合し、行動戦線として組織し、広汎な統一戦線と全国的な学生戦線を建設していかねばならない。

その為にもわれわれは、学園反乱の内的堀り起こしを学生戦線工作の第一任務としなければならぬ。われわれは流動制圧戦の基本戦術である教授追及、授業粉砕だけではなく、更に広汎な学生をクラス闘争委、サークル闘争委に組織する為に、クラス討論を教授追及討論へ組織したり、大衆団交を人民裁判に転化し利用したりする統一戦線戦術の創造と駆使を身につけなければならぬ。

又、広汎な学生に理解しうる政治的矛盾、諸要求等あらゆる学生

ての政治配置にこのこ甘んじるといふ厚かましきでは、何をかやわんやである。それは旧態然とした新左翼による学生運動の新しい味のないさまざまな展開に他ならない。これらの理由は、新しい運動の形成の条件を形成していることに他ならない。

周知の様に、われわれが、この間追及してきた底辺委運動の一環としてのロックアウシュビッツ粉砕闘争は、二年間の闘いを経て、その基本戦略を確立（「武装」六号）し、更に各戦線、底辺委運動の教訓を通し、学生（戦線）の役割を規定（前衛六六号）し、統一戦線戦術の駆使（前衛六三三号）によってより一層具体化した。

それは、底辺委運動の推進力となっているそれぞれ情況を異にする明治学院大学、大正大、立正大の闘いの教訓が具体的に示している。

明治学院大学では、ロックアウシュビッツ粉砕の学園人民戦争を通して工作隊と諸グループの革命的学友によって恒常的反乱が創出されており、サークルへの工作を通して、クラス末端への組織強化と、前期闘争一・二四ガードマン検問後期試験粉砕、学園人民戦争を教訓とする学費闘争の責任追及の追撃戦一更なる発展の中で打ち固めるであろう。（前衛六六号）立正大では、大崎警察、暴力教職員、体育会右翼暴力支配の三位一体とする学園支配体制の中で再び学館解放を課題とする文団連運動を組織し、広汎な学友との統一戦線を通し中核組織を建設し反乱の堀り起こしを闘い抜いている。（「前衛」六九号）

大正大では昨年一月からの自治会弾圧と学費攻撃を通して、行動委の独自行動と革マル系自治会によるスト実との統一戦線を通して、広汎な学生を流動化させ結集させるとともにスト実の限界と破産をのりこえ、行動委の強化をつくりだした。（前衛六八号）

の自発性を促すスローガンを掲げなければならぬ。

又、われわれの組織性の、人民戦争の原則が示すように、集中しては独自行動（大衆闘争の発展に応じた）と展開し、大衆と共に敵に打撃を与え、味方の影響力を拡大し、分散しては、工作し大衆を組織しようという集中と分散の原則を通し、組織する暴力闘争共同体の作風を発揮し、クラス末端からサークル内部まで及び組織化を保障しなければならぬ。

こうした「学園の内的堀り起こし」は、学園人民戦争における大衆戦の条件を創るのみならず、工場工作者の放出、底辺委運動への学生の動員というソビエト運動の潮流化を担う学生戦線の基本的任務に他ならない。

学園を根こそぎ組織し

労学底辺委運動の全国的潮流を！

次の点にある。

第一に、執行部独裁による管理運営である。学長・副学長（五人置く）制として、執行部に権限が集中している。

教授会の自治、学部自治が解体され教授は、運営・人事の諸決定から排除され、大学との単なる雇用契約関係を保つことになる。

この学部の自治の解体と執行部の自治への推移は、すでに全共闘以降今日まで学園の管理運営の中で実体化していることを事後承認し制度化することである。

警察力の導入、ロックアウトを弾圧の常套手段とする七〇年代学園闘争の特徴をみれば、学部自治や管理運営能力を欠く限界をもち、そこから執行部運営に移行していることがはっきりする。

第二に、産学共同路線を明確にしていること。

1、教育研究部門

1. 筑波大学の設置

全共闘運動によるブルジョア支配のマヒと、現行教育—大学制度の限界を感じとった支配階級は、学園の警察力による鎮圧を成果にして大学改革案を急速に確定した。

「現行大学の多くは、社会の大きな転換期に直面して、社会的・文化的・環境の変化に適応しえなくなっている」ことや、「大学の公共的制度としての性格を指摘し、象牙の塔から開かれた大学へ」を公けの改革理由に「筑波大学」の全体的計画が明らかにされた。無論その一要因は、教育秩序への学生の反抗に対する国家権力の管理、統制に他ならぬ。

筑波大学の全体計画の概要（毎日新聞二月九日付夕刊）の特徴は

大学院の目的を、高度な職業人の技術者の要請、及び社会人の再教育とすることや、特別プロジェクト研究組織を、特定の学系（注、研究組織—現行の学部学科別組織は廃止される。）のみでは遂行しにくい研究計画をする為の、流動的研究組織として設置すること。

人材供給及び研究の企業からの委託を促進する組織となっている。

2、学部学科が廃止され、学群（教育組織）と学系（研究組織）が分離されていること。

研究と教育が分離することによって、学群の内容が広域となり、一般教養と専門の区別がとりはらわれている。従って一般教養及び理論研究科目の地位が低下し、社会がすぐ使える技術的実務的科目が選択され、安く実務教育を促進することになる。更に広がる学群の細分化された組織として「学類」を置き、「学生を管理するため」の（毎日新聞）手段としている。

3、参与会が学外者によって構成されること。学長に助言する参与会は、企業及び国家の学校運営の介入を保障する。

第三に国家による統制を制度化していること。

参与会の任命が文部大臣によること、副学長制の人選が、「対象は学内外を問わない」（文部責）とあるように、文部官僚の天下りポストになることを可能にしている。

以上、みたらうに「筑波大学」計画は、中教審答申路線をその具体的な運営と機能の組織のうちに実体化している。

第四に、筑波大方式を他大学に波及させることを主眼としている。それは「筑波大法案」として提出されるうちの「学校教育法」の一部改正がその手段である。「大学には学部を置くことを慣例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するために有益かつ適切である場合は、監督官庁の定める設置基準に従って学部以外

の教育、研究上の基本となる組織を置くことができる。」と「学群」「学系」組織の設置が他の大学でもできることがその一例である。

2. 大学の現状と社会的地位

1、大学のマスプロ化

学生数一八〇万（高専、短大を含む）に対し、同世代の四人に一人が高校から大学に進学する。

これを支えているのは一、日本の資本主義が急速に高度化したこと、二、大学入学資格者の増大である。

一、の点に関して言及すれば

a 精神労働と肉体労働の分離を社会的分業として、複雑多岐にわたって確立していること。

b 従って管理及び流通部門が肥大化する。それは当然にも管理層の重層化とピラミッド型に示される底辺—末端管理層が肥大化することを意味する。

c 大量の工業技術者を必要とすること。

d 産業社会—学歴社会に適応した、社会人作り、及び企業の委託研究を大学は分業的役割として強制される。

二、に関しては義務教育期間の延長・高校進学急増によって支えられていた。

2、大学の危機

こうしたマスプロ化への道は、資本の潜在的要請はあっても、決して当初から計画的におしすすめられたものではなかった。大学経営者が個別的、場当りに対応してきたにすぎない。

私学の増加は大量に技術者を育成するために理工系の拡張とその資金対策としての文科系の水増し入学と借金政策を基本としていた

のである。従って、六四年末から六五年初めの金融引き締めで、その借金政策は破綻し、私学危機を表面化させた。

大学は、政府に国庫補助の増加を訴える一方、六五年慶応・六六年早稲田・六七年明治と学費値上げを強行していった。しかも定員数の増加によってのりきろうとする手口は、マスプロ化に拍車をかけた。その後もインフレーションは促進され、学費値上げ闘争の七〇年安保への高揚と発展することを恐れた大学当局の値上げの据置きは赤字を累積させた。このことは、今日の大規模値上げの主要な原因となっている。

しかも学生数の増加によって、借金の返済や施設の拡張をはかることで場当たりの経営をやりぬいてきた大学は、マスプロ化の矛盾・マスプロ授業を、施設の貧困を生み、教育効率の著しい低下をもたらした。従って文科系・理工系共に、産業界の要請を満たすに至らない代物であった。

大学のマスプロ化による矛盾とその不満は、政治・社会・大学の矛盾にたいする闘争の温床となり、ブルジョア支配の一角を常に不安定にさせていた。

こうしたことの原因は、大学の管理運営が場当たりの対応であったり、個別的な大学当局の手腕に任されていたことにある。

これは勤務評定、教科書審査を通して、小中高等学校を行政下に組み入れた文部省が大学への介入を不十分に続けていたことを意味する。

それは私学危機の顕在化から全共闘運動の登場まで、大学人が作りだした「真理と理性の府」・学問研究の自由・国家権力からの独立・等の大学自治幻想を許してきたのである。

3. 国家権力による政策の確定化

今日プロレタリアの特殊な一部分であるという一規定は誤りである。それは実際学生は、工場（製造業）に就職しても事務系や（末端）管理者に配置される。確かに一面では、プロレタリアと隣合わせの社会的地位、（大部分の職務内容は一段高いが、賃金・生活面ではプロレタリア並であること）に送り出される。又、ブチブル・インテリゲンチヤー等の規定も誤りであり、ごく一部の学生に限られるであろう。

では、学生の規定はどうなるのか。

① 学生の傾向的把握

a、学生は近い将来社会へ供給されるが、それ自身としては未分化の存在である。それは大学という選別過程によって、方向を宿命付けられているが、一見社会への関わりを自由に選択しうる存在であるという幻想をもつ。

b、学生は今日大学の社会との関係で要請される役割に制約されている。

c、それは、大学の現状と社会的地位、¹でふれたことから

イ、エリートコース（高級官僚及び経営者）

ロ、多量の末端管理者、流通営業部門の末端管理層

ハ、高級技術者

ニ、研究者等の社会層への分化

それは一部のエリートと、大半はプロレタリアに隣接した（プロレタリア並の生活を余儀なくされるが、管理者として社会的地位がプロレタリアの一步上層となっていること。）下級管理者であり、更にセールスマン等勤労人民に転化している。

c、従って大半の学生は特殊技能や、教育の取得に組み込むことより、学歴を得ることを目的とする。

六〇年代、産学共同は工学系を中心に「研究の委託」と「企業からの出資」を交換する形ですすめられた。

だがその過程は、「大学の自治」の侵害を口実に、その既得権にしがみつこうとする教職員（学生も教職員らと若干の対立を含みながら大学の自治の擁護の立場から反対した。）によって各大学の事情に即して個別的に推進された。

大学及び国家権力は、全共闘の反乱形態の中に既存秩序とブルジョアの支配の転覆をみてとり必死の反撃を開始した。

大学は教授会自治から、学長・学部長を中心とする執行部独裁へと移行し、警察力の導入とロックアウトによって、血の圧殺を強行した。

大学はロックアウトによる闘争弾圧体制を、闘争の局面に見合った形で背後にかくしつづ、日共・民青、早稲田の革マル、法政の中核等の新左翼から右翼まで使い、認可した学生団体への包摂を通して、間接的に学生を分断支配することを現実化している。

それはいつでも学生弾圧にロックアウトを切り札とした分断支配に他ならない。

国家権力・文部省は、こうした大学の転換を現状認識として研究、教育（教授と学生）に対する管理運営のモデル大学を筑波大学計画として推進し、全大学をその方式の下に統括しようとしているのである。

3. 学生的位置

これまで学生の規定は原理的に産業予備軍として、プロレタリアの一部であるとか、又レーニン以来の、ブチブルでありかつ政治的に敏感に反応する特殊性をもっていると、一面的に規定されてきた。

d、¹ということは四年後が目的であるところから、その過程は惰性の連続と味気ないものとなり、時間的余裕（暇）をもて余すこと、大量に密集していること

② 学生の現状不満

a、①のbでふれたことから大半の学生が、より上層の社会的地位への慾求をとざされる（勿論高校から受験闘争を通して、一定の将来への格差付けはおこなわれている）

b、マスプロ教育の欠陥として当然、劣悪な勉学条件に対する不満を、授業はつまらない、等、感覚的に受取ったりする。

c、こうしたことに対する大学当局及び国の回答は、味気ない授業の強制を出席日数のチェック、年間単位取得規定等の措置として強制するだけである。

d、インフレや学費値上げによる学生からの収奪は、更に学生生活の不満と、彼らをアルバイト兼業者という形でプロレタリアにひきよせる。

e、選別に直面して不断に動揺するが、ある程度の知識の蓄積によって、社会的全体的な視点を獲得する基礎があること。

f、従って、経済的収奪・政治的抑圧攻撃に対する反政府・反帝国主義・反大学の闘争を学生運動という社会的潮流として達成させる根拠になっているのである。

4. 革命的展望

以上みてきたように、教育・大学に対する学生の闘争は大学の矛盾を内側から告発する。

それは大学が、試験による単位の取得とその積み重ねによる学歴の獲得を目的とした学生の選別過程であることを社会的に暴露する。

しかも大学が、そうした矛盾した存在として決定付けられているのは、資本主義的生産の精神労働と肉体労働の分離に基づくものにほかならない。

従って、大学の矛盾の克服は、肉体労働と精神労働の分離を必然化する資本制生産の止揚に求められなければならない。

これは生産と教育・研究の結合として、ソビエト・コンミュニオンへの社会革命による以外にない。だから、学生の闘争を通して最初から労学結合を追求する底辺委・行動委へ組織する革命的意義がうかがいあがってくる。

・当面の方針・

二の二、「大学の危機」及び、三「学生の現在の地位」で明らかにした事実は、圧倒的な学生が大学の現状に不満をもっていることを示している。

この点にわれわれが、根こそぎ学生を組織し管理強化・収奪攻撃に、大衆的に反撃する根拠がある。それは統一戦線を創造的に駆使し広汎な学生をクラス末端からまとめて組織化することに他ならぬ。

この学生の根こそぎ組織化こそ運動の強さと持続力を保障する第一の前提である。

しかもこうした大衆的反乱の根拠は決して大学当局・文部省の改革によってとり除くことはできない。大学が産学共同を推進したからといって、マスプロ化の矛盾や学生の不満・格差付け・選別教育の拡大が解消するわけではない。

逆に国家及び大学が、学生の反抗を管理強化・大学秩序への強制という形で押さえることではない。それは新しい火種として、更に学生の抵抗と反乱を拡大することになる。

こればかりではない。

それは今日、われわれの闘いが学生の闘いの前進に立ちふさがるロクアウト・警察力の導入を学園人民戦争で打ち砕くことができることを示している。

これが、大学闘争におけるわれわれの勝利的前進を可能とさせる第二の理由である。

「人民戦争」を可能にする第一の条件は、人民戦争を展開しようとする部分が依拠する人民大衆の存在を必要とする。「ことは誰でも認めるものである。

われわれは第一の前提を通してその革命的発展を保障する第二の理由を確認した。この「第一の前提」と「第二の理由」を統一的に展開しえることこそ、大学闘争を反乱・権力闘争として恒常的に支えることにほかならない。

こうした闘争過程を、「矛盾の克服」をめざすソビエト革命を担う労学共闘として打ちたてなければならぬ。それは学生の闘いが反乱形態として発展しても、教育秩序の一次的マヒをひきおこすにすぎないという限界を突破し、ソビエト・コンミュニオンへの社会革命の一環になることに他ならない。それはソビエト革命の側からいしかえれば、学生の闘いがソビエト革命への前哨線としてあることしかもソビエト革命勝利への豊かな沃地であるということである。

第二部

真の全人民的反帝政治闘争の構築を

反帝政治闘争を

真に全人民的な闘いとして

展開するために

「何故に政治闘争を闘うのか」新左翼諸君は、(全人民的課題を掲げた政治闘争によって経済闘争の自然発生の限界を乗越える)という「何をなすべきか」の受け売りを繰返すことによって、この問への回答を提出したつもりになっている。

ここで再度問が発せられる。「果して諸君の運動は全人民的闘争たりえているのか」と。セクト別に細分化された上に学生を中心とするシヨボクシテ集会和街頭デモは、全人民的闘争などとお世辞にもいえた代物ではない。課題が全人民的であれば、それだけで闘争が全人民的になる、というのは、「平和憲法があるから日本は平和だ」とするのと同じ類の悪い冗談である。

それでは、何故に現在のところ全人民的政治闘争が発しないのだろうか。その解答は、日本革命の主力軍—労働者階級の戦闘力が、朝鮮戦争以降の合理化攻撃の波状的急遂の過程で、職場—生産点において解体・骨抜きにされたという事実に求められなければならぬ。その結果、労働者階級本隊の強固な運動を基軸に他の被抑圧人民を糾合する政治構造が喪失せしめられることとなったのである。

従って、彼らの根源的な階級闘争力の復活と強化を職場闘争を通して組織しない限り、街頭政治闘争もまた一部はみ出し左翼の急進行動の枠を突破することができないだろう。しかるに、資本と結託している同盟は論外としても、社共にはこうした闘いを組織する意

志も能力も全く欠け「革新政権」に一切の展望を託し議会における「振制の対抗軸」の形成に浮身をやつしている。既成左翼の批判から出発した新左翼諸派もまた、日本革命の基本方向を定めえず、諸課題の羅列的並べたてと乗移りに終始しているにすぎない。

ここでわれわれは、政治闘争を何故闘うか、即ち「反帝闘争の戦略的意義」について解答しなければならぬ。それは第一に、危機の第二段階にあって敵階級の全社会的政治攻撃が不断に引起されるをえないこと、これは支配体制の不断の再編が支配階級に強制されることを意味し、それに対する反撃は、政府危機の統発を通しての権力マヒを可能にすること、第二に中央集権的に組織されたブルジョア権力は、個別的な反乱に対して「私的暴力」を補足としつつ集中砲火をあびせることによって封殺する体制をとっているが故に職場—工場闘争を権力闘争として発展させる場合、生産過程の外にある中央集権的権力に全労働者階級・人民の闘いを集中し、マヒさせることが必要となるが、全社会的政治課題がその媒介たりうることを獲得し(主力軍であることを自覚する)、一切の被抑圧人民を糾合する強固な主体となることができること、にある。

従って、現下の反帝政治闘争は次のように闘われねばならない。第一に(当面は学生を中軸としつつも)、各戦線において大衆の徹底的な組織化を図り、第二に、反帝闘争を通して敵権力を暴露すると同時に「押さば引け、引かば押せ」の組織的攻防戦の訓練を大衆に施すこと(政治闘争は政治的に闘われねばならない)、第三にこれによって社会的影響力を深めつつ、工場闘争を基軸にした闘いの統一戦線を形成し、政治配置の再編を推めること、以上である。

樋村乃介

ボリシェヴィキの反戦闘争から何を学ぶべきか

1. 第二インター左派とレーニンの論争

第一次世界大戦の開始は、国際共産主義運動の分裂と対立を決定的なものにした。第二インターのお偉方ほとんど全てを吸収してふくれあがった社会排外主義者の陣営とレーニンの闘争は、広く世に知られているが帝国主義戦争に反対するという点ではレーニンと同じ陣営を形成していた第二インター左派とレーニンの論争はその意義をとかく看過されがちであった。

レーニンと第二インター左派の対立の最大の争点は、「帝国主義戦争において自国政府の敗北を追求すべきか否か」というまさに革命の根本に関わる問題であった。レーニンは「帝国主義戦争における自国政府の敗北について」(一九一五年)の中で、第二インター

左派のロシアにおける代表的闘士—トロツキーの左翼的粉飾がこらされた空文句を真向から批判している。

当時はまだ、観念左翼としての原則主義の立場から脱け出せないでいたトロツキーは、「ロシアの敗北を希望することは」「社会愛国主義の方法論に対する、なにもものからも呼びおこさず、なにもものによっても是認されない譲歩であって、そしてこの社会愛国主義は戦争と戦争をうみだした諸条件とにたいする革命的闘争をやめて、そのかわりに最小限の悪の線に沿い与えられた条件のもとで、はなはだ勝手気ままな態度をとっている」(「ナシエ・スローヴオ」第一〇五号)としてボリシェヴィキを批判した。

『帝国主義における自国政府の敗北について』でレーニンが指摘しているように、トロツキーは、「ロシアの敗北を希望することはドイツの勝利を希望することを意味する」と理解してしまつたらし

い。敗北のスローガンを拒否するトロツキーのこうした立場は、必然的に「勝利でもなし、敗北でもなし」(『イズヴェスチヤ』第二号)というセムコフスキーの「帝国主義戦争のブルジョアの休戦の要求」と同じ結論に帰着する。

けれども、「戦争は、世界資本主義の半世紀にわたる発展によってその無数の糸や結びつきによって生みだされたもの」(『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務』)であり「資本主義の下では、しかも特にその帝国主義段階においては、戦争は不可避である」(『ロシア社会民主労働党の在外支部協議会』)。従って「資本家の政府に向かって、帝国主義的であることをやめろという幻想をうえつけるような、許しえない『要求』を出す」(『四月テーゼ』)ことは「革命ぬきの平和」(『ブルジョア政府の下での講和』)を要求することであり、体制の存続を擁護するものに他ならなかった。

レーニンは、「トロツキーのいう『戦争に対する革命的闘争』はもし、これを戦時中においても、自国政府に対して革命的に行動する意に解しないならば、かの第二インターナショナルの英雄どもがはなはだお得意とするからっぽな無内容を叫びである」(『帝国主義戦争における自国政府の敗北について』)としてトロツキーらの「反戦・平和」スローガンの没階級の性格を暴露し、反戦闘争の革命戦略上の地位を明らかにしたのである。

2. 自国政府の敗北の戦略的意義

更に問題を深化させよう。レーニンは、「各国において、帝国主義戦争を行なっている自国政府との闘争は、革命的煽動の結果起こりうる自国の敗北を前に停止されてはならない」(『帝国主義戦争

実践的証明としての二月革命は、ブルジョア権力を無力化させ、プロレタリア権力の萌芽形態たるソビエトをロシア各地に成立させたこれこそ、ブルジョア支配体制の危機の内容である、この革命的危機は、内乱による決着を歴史的必然として要請していた。まさにロシアプロレタリアートは、社会主義革命の真只中に位置し、ブルジョア権力打倒(プロレタリア独裁樹立)の間に接近していたのである。

3. 二重権力について

革命的危機にあって、ロシアの階級闘争は、即ち、ロシアのプロレタリアートとブルジョア階級の階級関係は、「二重権力」として社会的に外化された形態をとって表現されていた。「二重権力」の革命的止揚にむけてプロレタリアートを如何に組織していくのかこの時期のボルシェビキに課せられた課題はこれでありその回答としてレーニンが提起した戦略スローガンこそ「臨時政府への一切の拒否!!全権力をソビエトへ!!」であった。

ロシア共産党は、この戦略を武器に見事歴史の期待に応えた。しかしながら、レーニン以後の国際共産主義運動の指導部は、そこからなんら有効な教訓をひき出しえず、いたずらに帝国主義の延命を許すことに甘んじてきた。

「二重権力段階」をロシア革命の特殊性に解消したこと、これがレーニン主義の精華の最高が発現たる二月一〇月革命期を歴史的に教訓化しえなかつた最大の原因である。

「二重権力段階」をレーニンは、次のように説明している。「『ロシアにおける現在の時機の特異性』は、革命の最初の段階から第二の段階への過渡の局面ということにある」(『戦術に關す

における自国政府の敗北について』)と主張している。その意味するところは、「戦時における革命は国内戦であって、政府の戦争を国内戦争へ転化させることは、一方では、政府の軍事的失敗(敗北)によって容易にされるものであり他方では、敗北そのものに助力することなしには事実上このような転化をめざすことは不可能である」(同)。「言葉の上でなしに本当に『市民的平和』を放棄し、階級闘争を承認する唯一の政策は、自国政府と自国のブルジョア階級を打倒するため、プロレタリアートがこれらの政府やブルジョア階級の窮境を利用する政策である」(同)。「自国の政府が軍事的に失敗すればそれにもなつて政府を打倒することはたやすくなる点を見のがすわけにはいかない」(『社会主義と戦争』)。「イギリスドイツ、ロシアの一部の社会主義者たちが真剣に戦争反対の煽動をやったことは、それぞれの国の政府の『軍事的戦闘力を弱めた』ことは、うたがう余地のないところである」(同)ということである

すなわち、「自国帝国主義の敗北」は、ブルジョア権力発動の最後の保障である、「帝国主義軍隊の解体を通して支配体制の混乱、マヒをひき起こし、それにもなつて国内の再生産過程の大混乱(崩壊)の危機を現出せしめるのであり、こうしたブルジョア体制の危機の創出にかかつて反戦闘争が革命的意味をもちうるのである」。

反戦闘争の戦略的意義(過渡的戦術としての意義とは、まさに自国政府の敗北、又は軍隊内部での反戦闘争の組織化による帝国主義軍隊の内部崩壊を通じて支配体制の危機を創出することに他ならない。そして又こうした状況がプロレタリア権力の萌芽たる「ソビエト」あるいは「レーテ」等の成立の基盤であり、前提となることを戦後革命のすべてが証明している。「反戦闘争を通じて自国帝国主義の敗北へ、自国帝国主義の危機を内乱に転化せよ」という戦略の

る手紙」(「現実には権力がブルジョア階級の手に移ったということと同時に、また本場の政府と並んで、プロレタリアートと農民の革命的民主主義独裁をあらわす副次的な政府が存在していることをも示している。この後の方々でも政府は、自ら権力をブルジョア階級に譲り渡してしまひ自らブルジョア政府に自分をしばりつけている」(同)。「ロシアではプロレタリアートの数が不足していること、プロレタリアートの自覚と組織性が不足していること、これが同じメダルの他の半面である」(『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務』)。

一九一七年八月九月執筆された『国家と革命』において、革命の重要な転機をなす、この「二重権力」が総括されていないことは、二重権力を後進国ロシアに特有な形態としてレーニンが把えたところ起因するといっている。

その結果、『国家と革命』では、ブルジョア国家を中心とする国家一般の批判と、プロレタリア権力としてのコミニオン型「国家」のイメージは、語られているが、その間をつなぐものは、「プロレタリア権力をもってブルジョア国家に置き換えるという置き換えの論理」であり、肝心の「革命(プロレタリアートの権力手段によるブルジョア権力の打倒)プロレタリア独裁樹立」の問題は、どこかにいってしまっている。『国家と革命』という表題にもかかわらず、「革命」の方は、具体的には何一つ語られていない。まさに看板にいつわりあり、である。

4. 戦後世界体制の崩壊期における

権力危機は何によって可能か

われわれが解決すべき問題は、これだけにとどまらない。反戦闘

争を通じて革命の条件をつくりだすというレーニンが一九一七年において採用した戦略は、いわゆる戦後革命の段階に妥当する路線ではあるが、それをそっくりそのまま戦後世界体制の崩壊期に適用することは、できないからである。

コミンテルン破産の最大の原因は、第一次世界大戦後の戦後危機のブルジョアの克服（これ自身、コミンテルンの指導の限界に基づくものであるが）の結果成立した相対的安定期の崩壊に伴う危機に対応する方針を欠いたところにあった。コミンテルンが正しい解答を提出しえなかったこの難問に、ずばり正解を与えたものこそ、一九一八年五月のフランス・プロレタリアートの闘争であった。一千万労働者のゼネストは、世界でも有数の執行権力独裁体制を確立していたフランス帝国主義を根底から動揺させ、危機に追い込んだ。

決起した当のフランス・プロレタリアートをはじめ、全世界の共産主義者党を自称するグループの誰もが見抜けなかったフランス五月革命の提起した本質問題を早く、しかも正確に把握し戦後体制の危機を革命に転化する戦略にまで定式化したのはわが「前衛」を除いて他には存在しなかった。工場占拠ゼネスト↓二重権力↓武装蜂起↓プロレタリア独裁樹立の戦略がそれである。

トロツキーは、「ゼネストはいかなる改良的スローガンを掲げようと政治闘争である。何故ならブルジョアジーは、生産過程における支配の全国的喪失だけでなく、政治過程の支配をも喪失せざるをえないからである。」（フランスはどこへ行く）という画期的な指摘をおこなっている。ゼネストの意義は、ブルジョアジーの政治的、経済的支配の全国的マヒをもたらしどころにあり、しかもそれが工場占拠ゼネストとして行なわれる場合には、蜂起の前提として不可欠な「ソビエト」の物質的条件を直接に準備する闘争になりうるの

である。

一千万労働者の決起に至る六八年フランス階級闘争の口火を切ったのは、三・二二運動に代表されるベトナム反戦運動であった。単なる街頭政治闘争にとどまる限りではシリ貧状態に陥るほかはなかったそれを一大叛乱の導火線と結びつけたものがパリ大学ナンテール分校の教室占拠闘争であり、それがフランスの教育体制に不満を持つ学生大衆の要求と結合することを可能ならしめたことによつてあのカルチエ・ラタン闘争を担う大規模な大衆動員の基盤をつくりだしたのである。そして、カルチエ・ラタンのバリケードをささぐり夜を徹して闘われた国家保安隊との攻防戦が、権力の反人民的性格と同時に、その無力性を暴露し、フランス・プロレタリアートの総決起への突破口を切り拓いた。

こうした事実は何を物語るか、それは、街頭政治闘争は、学園都市密集点、工場での占拠闘争に結合することによつて権力闘争としての発展の契機を与えられること、更に積極的にいえば、占拠闘争との結合、及びそれへの発展を目的とする限りでのみこうした闘争、革命戦略上の意義を獲得しうること、これである。

ロシア革命にあってボルシェヴィキが牽引した反戦闘争も、ブルジョア支配体制のマヒを通してソビエトを成立させる前提条件を創出することによつて蜂起を現実の日程にのぼらせる闘争となることのできたのである。

新左翼諸君の「沖繩は、われわれの戦略の環である。何故なら沖繩は、日本帝国主義の戦略の環であるからだ。」とする主張は、戦略に対する理解の貧困振りを示めている。彼らには、ブルジョア体制のマヒを追求しつつ、プロレタリアートの逆権力を構築していくという視点がまったく欠けているのだ。「権力による権力の打倒」とい

う革命の本質の把握に欠ける彼らが十年一日のごとき街頭カンパニアをあきもせずに繰り返すか、あるいはまた、ソビエトなき蜂起

の誘惑にかられて刹那的一揆を夢想するかの二つの道しか知らず、その間を動揺しつつけるのもここに原因があるといえるだろう。

アジア階級闘争の現局面

—中国、インドシナ、インド亜大陸—

(一)インドシナ解放革命戦争

1. 中ソ論争とベトナム戦争

ソ連製ミサイルのキューバ搬入→アメリカによる海上封鎖と核攻撃ドゥ喝→ソ連の屈服という結末をたどったいわゆる「キューバ危機」(六一年)は平和共存の下での経済的競争の提唱とベルリン封鎖、U2機墜落問題に象徴される軍事的ドゥ喝を使い分けつつ米帝に対する優位を確保したかにみえたフルシチョフ外交の決定的破産

を確認するものであった。キューバ革命を米帝の軍事的干渉から防衛するために持ち込まれた筈のミサイルがケネディの瀬戸際作戦を前にして全く用をなさなかった事実が判明したとき、社会主義圏の防衛を金看板としていたソ連の軍事体制のカンパニア的性格が余すところなく暴露されてしまったのである。

フルシチョフは、「世界の平和のためにミサイルを撤去した」という格好で事態を取繕ろうとすると同時に、世界平和の守護者としての立場を演出することによる巻き返しをはかろうとした。けれども、ソ連の弱腰を批判し、その行動の矛盾を鋭く指摘していくさがる中国の存在は、そうした御都合主義的收拾策に対する一大障壁となり行手に立ちふさがった。そこでフルシチョフは中国に世界平

和の破壊者としてのレッテルをはりつけ、それを非難することによって自己の平和主義者としての立場を世界に印象づけようとする手段に訴えたのである。このようなソ連の自己保身の対応は、中国の批判を更にエスカレートさせ中ソの論争は、激化の一途をたどることになった。

ベトナム解放闘争は、中ソ対立の激化を背景として進展していった。米ソ取引き体制を外交の前面に押し出すに至ったフルシチョフは、ベトナム解放闘争支援には消極的であり、それを押さようとする試みたのであるが、ベトナム人民の不屈の闘争はカイライ軍を圧倒しつつ根拠地の拡大を続け、日和見主義者ソ連をかえって孤立させる結果をもたらした。これは、国内における農業政策の破綻と共にフルシチョフ失脚の重大な要因となった。

フルシチョフの後をうけたコスイギン、ブレジネフはここで若干の軌道の修正を行い、軍事介入の度合を深める米帝及びベトナム人民支持をソ連に対する党派性としていた中国に対抗する意味からもベトナムへの軍事援助を増大させる政策をとった。

2. 北ベトナムの内部論争

一九五四年のディエンビエンフー陥落によるフランスの撤退以前から介入を開始していた米帝は、カイライ政権の危機を目の前にして六四年のトンキン湾事件デッチあげ、六五年の海兵隊ダナン上陸を突破口にする北爆、米軍大量投入を柱にした本格的介入に踏みきった。ベトナムに送り込まれた米軍は六七年から六八年にかけて遂に五〇万人を越えた。解放戦線側が大隊（五百名）単位でセン滅されたという報道が再三伝えられたのは、この時期である。こうした事態は、ソ連による国際的妥協圧力を引き出し、北ベトナム指導部

攻勢に先立つ一連の「実験」が米帝を油断させると同時に、北ベトナム内部の論争の性格の分析を誤らせたという効果も見落してはならないだろう。

米帝の陸・海・空の軍事力の打破を可能にする戦略の存在に気付かなかったという点では、人民戦争の先輩たる中国も同様であった。チュオン・チン等を通じて方針に対する影響力を行使していた中国にとって北ベトナム指導部がテト攻勢に踏みきったこと事態、国際党派闘争における挫折を意味したし、六八年一月三〇日から始まる一勢攻撃の政治的・軍事的な意味を理解することも困難であった。三週間の沈黙の後、ケサンにおける解放戦線の軍事的優位が動かし難い事実であることが明らかになるに及んでやっと「支援声明」を発表するという醜態をさらしたのである。

北ベトナム内部での論争は、長期抵抗路線を掲げて尻をたたくだけで、現実的方針を提起しえない中国に追隨するか、それとももうした中国を圧力として使いつつソ連から援助を引き出し、一大攻勢に打って出、政治交渉を通して有利な条件をつくり出すかをめぐって行なわれていたのである。ザップ、ジュアン等は、単なる親ソ派ではなかった。その事実も、米中・米ソ接近に対する北ベトナムの態度及び、中ソを手玉にとって行われた本年三月からの一大攻勢がはっきりと示している。テト攻勢の意義を正確に把握することに中国が失敗したという事は、「米帝は張り子の虎である」という強調をもってソ連の妥協路線を弾劾してきた当の中国自身、米帝の軍事力を過大に評価していたという事実を暴露している。ザップは毛沢東をのり越えた。ベトナム人民の英雄的闘いは、人民戦争の教程に新たな一ページを書き加えたのである。さらに中国がベトナム解放闘争を真に総括してその遅れをとりもどしたか？すなわち後進国解

内部における深刻な論争をひきおこした。当時のマスコミの分類によれば、それは北ベトナム国会常任委員長チュオン・チンに代表される親中派と、レ・ジュアン第一書記、ポー・グエン・ザップ国防相らのいわゆる親ソ派の対立とみられていた。論争の基軸は、米帝の本格的介入の壁をどう突破するかであり、親ソ派は政治交渉による收拾に傾き、親中派はそれに反対して長期抵抗路線を主張したとされていた。

マスコミの報道による限り、軍事的行き詰まりの中での交渉も、史上最強といわれた米帝の軍事力を粉砕する具体的、現実的方針を欠いた長期抵抗路線も、局面を開閉する方針たりえないように思われていた。

しかしながら論争の性格は、そうしたマスコミの思惑より数段高度の次元のものであった。いわゆる親ソ派の一員とみなされていたザップ国防相は、教度に亘る大隊規模での被セン滅戦を通して、①五二万の米軍といっても、その大半は補給・兵站部隊であり、実際の戦闘部隊は一〇万そこそこであること、②米帝の空爆も強力な対空砲火措置を敵に接近して築いた場合、効果を著しく減ずることができること、という二つの教訓を引き出していった。誰の目からも解放戦線の、致命的敗北と受け取られていた先の被セン滅戦線は、実は米帝の手のうちを読むために計画された壮大といおうか、壮烈といおうかブルジョア軍事の常識をはるかに越えた一大実験であったのである。

ここからザップは、同時多発攻撃による米帝の拠点への金づけ、孤立した陣地に対する塹壕による接近戦と対空砲火陣地による米空軍の無力化という戦略を導出した。その実践への適用こそ、ケサン攻防を頂点とする六八年初頭のテト攻勢にほかならなかった。テト放闘争を具体的な方針の提起を通して支援する位置を回復しえたかいなかにについては疑問の残るところである。この点については後に詳しく述べるとして、テト攻勢を契機に、中国の国際階級闘争におけるヘゲモニーが失われている事実を指摘するにここではとどめたい。

3. カンボジア侵略

ディエンビエンフーがベトナム独立同盟戦線（パトミン）とラオス愛国戦線（パト・ラオ）との緊密な連携の上で攻略された事実が物語るように、ベトナム解放闘争は全インドシナ解放闘争とは最初から密接不可分な関係にあった。とりわけ、史上最強の米帝国主義軍隊との対決が基軸とされた六〇年から七〇年代にあってそうした傾向は更に促進された。それは当初、ベトナム南部の解放闘争遂行の必要上からするベトナム解放民族戦線のヘゲモニーの下にラオス・カンボジアを経由する幾すじかの補給ルートに及び後方兵站基地の建設としてあらわれていた。

ベトナム・ラオス・カンボジアの三戦線の結合は、パト・ラオが確固とした支配地域を形成しているラオスでは、最初から目的意識的な共同行動として追求されていたが、カンボジアにおいては更に錯綜した様相を呈していた。

ポナバルティスト・シアヌークは、赤色クメールに仮借のない弾圧を加えつつ、解放戦線の自国内における報道は黙認する政策をとってきた。そもそも幾つかの例外を除いてはラテン・アメリカ、アジア、アフリカ諸国のブルジョアジー権力は弱体であり、常備軍もせいぜい数万規模であるところが大半である。カンボジアもその例にもれずシアヌークは解放戦線の圧力が自らに直接及ぶことを回避

するためにその行動を容認し、同時に対中、対ソ接近をはかって赤色クメールを分断、孤立化させ、封じ込めていく政策を展開してきた。

ベトナム・カンボジア国境の釣り針地帯とオウムの嘴―地帯から直接に首都サイゴンを脅かされる米帝及びカイライ政権にとって、カンボジアに直接侵略したいという誘惑は抑えがたい衝動であった。ニクソンは、七〇年三月、ロン・ノルを使ってシアヌーク追放のクーデターを起し、つづいて五月、カンボジア侵略作戦の決行に踏み切った。この作戦は、ものの見事に空振りに終わった。そればかりではなく、カンブチア民族統一戦線の形成とベトナム、ラオス、カンボジアの三つの革命勢力の公然たる結合を促し、解放勢力の制圧区域をカンボジア全土に押し広げさせるという結果を招いてしまったのである。

4. ラオス侵略

カンボジア作戦が裏目に出してしまい、焦りを感じたニクソンは、その侵略拡大の矛先を今度はラオスに向けた。七一年三月ベトナムカイライ軍の「精鋭」四万を、空と陸から投入して、フライパンの柄と呼ばれる地帯を縦横するホーチミン・ルートに九号公路の南地で分断する新作戦を挑んだ。カンボジアにおける解放戦線の戦略的後退を自ら強化されたせいだと錯覚した南「精鋭」部隊は、解放戦線の待ちかまえていた地帯に易々とさそい込まれ、壊滅的な敗北を喫したのである。

カンボジア・ラオスと続く二度の侵略作戦の破産の教訓は何か。それは、これら両国のブルジョア権力機構の弱体ぶり、南カイライ軍の限界からして、解放闘争の戦線を拡大することは、敵にとって

いて送り、交通路の遮断を計ろうとした。このときザップはディエンビエンフーに若干の牽制的攻撃をおこなった。仏軍は、またまた対応主義的に部隊の増援とディエンビエンフーの要塞化につとめたデルタの兵力は既に二二個大隊に半減していたのである。

ディエンビエンフー陣地の補強を進行するにまかせてベトミンは他の方向に対する攻勢をくり返してみせた。それをみた仏軍はベトミンは要塞化によってディエンビエンフーの攻略をあきらめたと判断した。ところがその間、ベトミンは着々と要塞の周辺に道路を建設し、砲台を築き、塹壕を掘り進めていたのである。敵に自軍の攻撃意図を読ませないための陽動作戦は、ザップの最も得意とするところであった。

そして五四年三月末、ディエンビエンフーに向けて六九日間に及ぶ連続攻撃の火ぶたが切っておとされたのである。

6. 七〇年の大攻勢

今回の大攻勢の前日の三月二十九日カンボジアの首都プノンペンには異常な緊張状態につつまれていた。市の周辺に万余の解放軍が集結しており、それは首都占領を目的としたものに他ならないと思われるからである。

ところが、解放戦線は翌三〇日一斉攻撃の第一番目の戦場を非武装地帯南部―南ベトナム北部に設定し、カイライ軍基地に対する猛砲撃を開始したのである。同日、中部高原にも大攻勢がかけられ、翌四月一日には西部戦線のラクロン基地も集中砲火と地上攻撃の洗礼を受けることになった。解放戦線の戦法は極めて巧妙であり、三つの戦法は有機的な連係を保ち、米軍軍事顧問をして「オーケストラの指揮者にも似た指揮ぶりである」といわしめた。

の不利となること、積極的な表現に言い換えれば、ベトナム解放闘争のインドシナ解放革命戦争への発展を更に強力に推進すべきであること、これである。その為には、カンブチア民族統一戦線及びラオス愛国戦線の再編、強化とこれにベトナム解放戦線を加えた三者の統一戦線の強化及び統一指令部の形成が必要であるだろう。

5. ディエンビエンフーの教訓

「戦局は南ベトナムの至る処、今將にディエンビエンフーの段階にある」

三月三〇日から始まった解放戦線の一大攻勢について、ポー・グエン・ザップはこう言い切った。解放戦線捕りヨの証言、捕獲文書からしても今度の攻勢が最後の決戦を意図して決行されたことは疑問の余地がないだろう。

ザップの言葉からうかがえるように、今回の一斉攻撃は、ディエンビエンフーの教訓に基き、さらにそれにテト攻勢の総括が踏まえられて計画されたものである。

ディエンビエンフー陥落の数ヶ月以前、仏帝国主義軍隊は、四四個大隊という大軍をデルタ地帯に結集させていった。というのは、さらにそれ以前、限定された兵力をもって解放区のベトナム全土への拡大に対抗しようとした仏軍は、少数部隊の分散・孤立化に陥って、ベトミンの自由な選択のもとでの各拠点に対する集中攻撃を許す結果を招いてしまい、各個撃破の危険にさらされたからである。

ところがそれは、ベトナムの大半の地域をベトミンに明け渡す事を意味したのである。泡を食った仏軍は、対応主義的に兵力を再度分散させ始めた。同じ危険をくり返している事に気付き焦った仏軍は、ラオスや中国との交通の要衝―ディエンビエンフーに部隊をさ

まず最初に北部に重圧をかけカイライ政権が増援のために虎の子の海兵隊を送って防衛戦の強化に努めると、今度は西部戦線のアンクロに攻撃を集中した。その結果、サイゴンの大統領官殿の空挺部隊までがアンクロ防衛にかりだされ、予備兵力は底をつき、首都はカラッポに等しい状態になってしまったのである。解放戦線は、複数の戦線の形成によって自らの攻撃意図を秘匿するとともに、敵の手薄な防衛線に攻撃をしかけては予備兵力を洗いざらい引き出して敵の分散と釘付けを徹底化させ全戦線における攻撃のヘゲモニーを確保することに成功した。

米帝及びカイライ軍は、その場しのぎのやりくりに奔走され気付いてみたら北部のクアンチが陥落し、防衛にあたっていた第三師団は総崩れになっていたのである。その後も二度クアンチ奪還と称した部隊を送りこんだが、如何せん二個連隊程の兵力では戦況の打開はおぼつかなく、そうそうに引き揚げていく。

7. 米中接近

怒り狂ったニクソンは、ジョンソンすら躊躇して実行しなかったベトナム北部の全港湾に対する機雷封鎖とベトナム全土での焦土戦術にあえて踏みきった。ジョンソン大統領在任当時、ペンタゴンが立案したこれらの作戦が採用されなかった理由の一つに中国参戦に対する恐怖があったとされている。訪中によって「他国」の解放闘争よりも何よりも自国の外交的利益を優先させる中国の腹の中を見抜いたニクソンは、気がねなしの大量殺戮をほしきままにしている米中会談直後「周恩来はハノイに飛んで、総攻勢にうって出ようとする北ベトナムの首脳部を必死にだめて説得した。周恩来がいうのに、南ベトナムではまだ人民層にまで革命思想と革命組織が浸透

していない。未熟の状態で、いま総決起の兵を起すことは危険でもあり、真の意味の「人民革命」ではない、と説得したらしい」というワシントン情報は、ありうべからざることはない。中国の世界政策（敢えて世界革命戦略とはいわない）の本質的欠陥、反動的性格を極めて卒直に表現しているからである。

(二) ベンガル解放闘争

1. インド亜大陸の階級関係

インド亜大陸は、厳格なカースト制を中心とするヒンズー的秩序を保ってきた長い歴史を有している。

かつての支配者イギリスは、インドを分断支配するためにこのヒンズー的秩序を利用し、それを助長する政策をとった。その結果、大地主、金融資本家、高級官僚など支配者の地位は、ほとんどヒンズーの上流層に独占され、そこからはみ出た回教徒は、つねに二流の少数者の悲哀をなめてきた。パキスタンのインドからの分離独立しかも千六百キロも離れた東西両パキスタンを一つ一つの国家が構成されるという不自然な過程は、ここに原因があった。

建国以来、西パキスタンのパンジヤブ人支配層は、東パキスタンに対する基本政策を収奪においてきた。世界総生産の八〇%を占める東パキスタンのジュートは、パキスタン全体の外貨収入の六〇%に達するものでありながら、その大半は国防費につきこまれ、そこからふとったのは西の「軍・官・産複合体」だけだった。しかも西の工業製品は、東を「植民地」として毎年三億ドルもの利益をあげ

てきた。パキスタンの年間輸出総額は七及至八億という点からみて

も西の東への寄生ぶりは、極端なものがあつた。一九四七年の分離独立に際し、宗教的迫害を恐れてインド・ビハール州から東パキスタンに流入してきたビハリといわれる三百万の回教徒難民の存在は、さらに事態を複雑にした。西と同じウルドゥ語を話す等風俗習慣を異にし、貧困であるが故に東の住民からも差別される。最下層の彼らを、西の政府・資本家は、ベンガル支配の手先として徹底的に利用したのだ。西の財閥が経営するジュート工場の従業員がビハリで固められていることは、その一例にすぎない。七一年三月から開始された東での大虐殺では、ビハリの多くが「ラザカール」という民兵組織に参加し、文字通り西の尖兵の役割を努めたのである。

東パキスタン独立運動に対するインドの介入が、女傑ガンジーの人道主義的粉飾をこらした美辞麗句とはすべて正反対の思惑によってなされたという事実は、誰しも認めるところである。国内の経済的行詰りとベンガル地方に根をはる「ナクサライト」の勢力の伸長という二つの困難を同時に解決すべくインドは大規模な戦闘をいどんだのである。インド支配層が今回のような早期・短期「解放」戦争をゴリ押しした動機の一つが民族アワミ党の革命派（パジャニ派）等の中心的勢力がまだ弱体のうちに事を起すことであつたこと、インドの忠実なる僕「ラーマン」がドウ喝をもつて人民の武装解除を要求したこと、「ナクサライト」は見つけ次第ぶち殺してやる」と見得を切ったこと等は、印パ戦争の革命予防的性格を如実に示している。そしてパキスタン降服の直後、既にインドの大財閥「ビルラ」は、ベンガラ・デシユの安い労働力とジュート原料の確保をめざし進出を画策し始めていたのである。その結果、ベンガル国内のジュート工場は、深刻な原料不足に陥っている。米もインドに運びださ

れて物価の急上昇がおこっている。

2. 醜態を極めた中国

バンガラ・デシユ独立運動に関わる中・ソの態度は、後進国人民を解放するための支援を第一の目的とするのではなく、例によって自国の外交的利害に対する配慮を最優先させるものであつた。そうしたブルジョア外交の次元からすれば、事態はソ連の一方的ペースのもとに進行した。ソ連は、ムクチ・バヒニ内部の急進派を押しえながら自らのイニシアティブのもとでインド亜大陸を安定させ、インド洋から東南アジアへの進出ルートを確保し、中国を封じ込める包囲網の重要な一翼を固めることに成功したのである。

領土問題をめぐって、ソ連及びインドとトラブルを続けてきた中国にとって西パキスタンへの支援は、印・ソ両国との対抗上の理由のみをもってなされた。中国の失敗は、バンガラ・デシユ問題をインド亜大陸における階級闘争としてとらえることができず、「印・パ」の国家間対立であると観念し、そこにソ連との対抗関係を軸とする自国の外交的利害を結びつけようとしたところに起因する。確かに回教徒国家を併呑しようとするヒンズーの「大インド主義」の存在を知るならば、インドの武力干渉を肯定するわけにはいかないだろう。けれども、西パキスタンの東パキスタンに対する支配・収奪関係及びそれへの東の人民の反抗に加えられた西の残虐な弾圧は西パを一方的に擁護することも許さないのである。従って、バグラ・デシユ問題をめぐる中国の対応は歯切れが悪く、しかもギクシャクしたものならざるをえなかつた。七一年三月から開始された西の武力弾圧についてはアイマイな沈黙を守り続け、同年一月、インド軍が本格的な介入に踏み切るや、インドとソ連の侵略主義に対

する猛烈な非難の声明を乱発したが、西に対する「支援」は口先だけの空約束に終ってしまった。ヤヒア政権の血の弾圧に対して中国が初めて言及したのは、十ヶ月以上も経過した七二年一月三十一日のことであつた。それも「パキスタンの指導者はかつて、パキスタン政府は以前東パキスタン処理の問題で誤り、しかも重大な誤りをおかしたと述べている」（人民日報）というだけのものであつた。

「パキスタンの指導者」とは、大地主にして「人民」党の党主、混乱に乗じてパキスタン大統領の座を手に入れたブット前外相である。そもそも「誤まりを犯した」ヤヒア政権の外相を任ぬ、しかもその対東対決政策の最右翼であり、弾圧の立役者であつたブットの、敗北が決定した翌日の「変身」——責任転嫁を持ちあげて、一切を正当化しようとする態度が問題なのである。民族アワミ党のマウラナ・パジャニ党主はいつている。「ブットはいつも大衆向けのすることや言い続けているが、今度のバンガラデシユ弾圧も実は彼のしわざだったのだ」と。

3. ベンガル解放闘争の展望

血塗られた反革命政権であるうとも、中国に外交的微笑を送っている限り、それとの「友好的関係」維持を第一とするという中国の立場は、後進国人民解放闘争を断固支持するという原則とはあい入れないものであつた。こうした中国の対外政策は、後進国各々の階級情勢を具体的に分析し、そこから解放闘争の方針を導き出し、それを提示するという最も革命的な支援の努力をネグレクトさせる結果をもたらす。中国は、五割から七割という高額の小額な小作料にあえぐ東パの貧農、西パの大資本に搾取されている労働者との提携及び、彼らを支持基盤とする民族アワミ党の共産党との国際的統一戦線の

形成に最初から全力を注ぐべきであった。そうした路線が推進されていたならば、ムクチ・パヒニの左派は、東の自治権拡大要求に対するヤヒア政権のドウ喝を前にラーマンが方針を失い右往左往した事実をすばやく把えて、彼の日和見主義を徹底的に暴露することができたであろうし、ラーマンの周章狼狽振りを通して足元をみた西バの軍事弾圧に早く対応し、解放闘争の主導権を獲得することも可能だったであろう。大体、千六百キロ離れた西から遠征軍をもって数千万の民衆を弾圧しきるといふことは至難のわざである。七一年六月にはミナシン解放区の成立をみたように、農村における根拠地の構築と遠征軍を引きこんでたたくという人民戦争の展開にとって最上の条件が存在していたのである。革命勢力の立遅れば、東ベンガルの主人を西バから印に直き換えるという形での收拾を許してしまつた。にも拘らず、解放闘争の発展の可能性は、かえって高まつたともいえるのである。インド資本の進出に原因する食料不足、インフレ、失業問題等は、民衆の生活を極度に圧迫し、農地解放の不徹底は、貧農層の不満を激成させており、ラーマン政権からの人民の離反を促進させている。左派の勢力は着実な伸びをみせており、「インド植民地主義反対」というスローガンも急速に支持を得つつある。ラーマンの武器供出をもとめるドウ喝にも拘らず、ムクチ・パヒニ内部には推定十萬丁の銃が残されているのだ。(七二年四月現在)東ベンガルの解放闘争と西ベンガルのナクサライトの闘争を結合し、全インド大陸のヒンズー的支配秩序に終止符を打ち、人民を解放するための闘争の強力な推進が問われているのである。

たソ連の孤立化政策を一步前進せしめたかにみえたがただちにソ連の痛みいしつべ返しを受けた。バングラ・デシュ問題がそれである①バングラ・デシュの闘争をインドの策略だと決めつけ、ヤヒア・カーンの暴力的抑圧を黙認することによって解放闘争に対する姿勢の混乱を暴露し②その上、あれだけ支援を約束しておきながら、結局パキスタンに何一つ手をかすことができず、パキスタンからも不信をもたれ③米国とあまりにも呼吸を合わせすぎたことで「米帝國主義との妥協なき闘い」という看板をぼかしてしまつたのである

2. ニクソン訪中

この一大失点を中国は、ニクソン訪中受入れというさらなる対米接近によって挽回しようとした。確かに開き直つて③を徹底化すれば①②の失敗をうやむやにしてしまふことはできる。事実、中国の約変に面食つた外務省やマスコミは完全にその術中に陥つた。

しかしながら、こうした中国の「マヌーバー」は全世界の革命的左翼及び人民の前には通用しなかつた。北ベトナムの執ような批判、全面北爆再開と機雷封鎖の最中に行なわれた訪米卓球団とニクソンとの「親睦会」に同行を拒否した米人通訳団などはその一例にすぎない。周恩来は何度か北ベトナムに対して「頭越し取引きはしない」という主張を納得させようと試みたが事実そりであることを違つと理解させるのは北の精神が正常である限り不可能であろう。

ともかくにも米中接近の投じた一石は、米ソ接近を引き出し、中・ソの右へ右への果てしない競い合いを招いている。反米を基調とする中国の存在がソ連の対米取り引きの一定の歯止めになつていたのだからそれがなくなつた今、ソ連が喜々として、いやむしろ中国に遅れをとるまいと雪どけ外交のイニシアティブ確保に懸命にな

(三) 中国の世界政策の問題点

1. 五原則外交

五〇年代の中国の対外政策は、反米と平和五原則を掲げての「善隣外交」であった。「非同盟国」の独裁者たちとのボス交によって各国内部の友好勢力を育成し、反米包圍網を形成するという構想は後進国経済の破綻及び国内階級矛盾の激化から独裁者が次々と失脚する過程で手詰りに陥つていった。金と力がものをいう「外交」の場で米・ソと同じ方法ではりあおうとしたのがそもそも間違ひだったのである。文化大革命の過程でもその点が問題にされ、五原則外交破綻の最大象徴としてインドネシア政策遂行の責任が追求され始めた。それが劉少奇追い落しに役立っている間はよかつたが陳毅外相の批判にまで及ぶに至つて、毛・周はこそつて陳毅の防戦に努めることとなつた。なぜなら、五原則外交は、毛沢東の指示に基づいており、周が陳毅を右腕にして立役者として推進したものであつたからである。

左派の切りすてによる陳毅の防衛の成功はボス取引き外交の自己批判的総括の回避とその容認を意味していた。「全ての被抑圧人民の闘争を断固支援する」という林彪の第九回党大会政治報告が放棄され、「中小国の権利を擁護する」というブルジョアのスローガンにとつて代わられる下地は、この時既に準備されていたのである。

ソフト中国ムーアのバーゲンセーによって国連登場の切符を手中にした中国は「反米」を押ししりをつけて第一の敵の座に据えられ

3. 方針なきが故の中国のジグザグ

中国の善隣外交への逆もどりは、これまで確認してきたように中国指導部が「中間地帯論」や「自力更生論」に安住し、各国の特殊性を踏まえた後進国解放闘争の具体的方針を提起しえなかつたことの必然的帰結である。外交的影響力の外的行使によって帝國主義を包圍しようとしたところに最大の誤謬があつたのだ。中華人民共和國成立以来の外交的ジグザグは、外からの圧力をハードにするか、ソフトにするかの想定でしかなかつた。世界革命の展望と路線を欠いた指導部のジグザグが右側の直線に収斂するのは遅かれ早かれ時間の問題なのである。北ベトナムが、中国をのり越えて、国際階級闘争の潮流の最左派の位置を獲得するに至つたのも、彼らが中国すら対決を回避した米帝の軍事力を粉砕する戦略を確定し、ベトナムを解放する闘争を断固として推進しているからである。アジア革命の勝利に問われているものは全アジアの革命勢力を糾合した統一戦線の形成でありそれは具体的にはベトナム解放闘争の全インドシナ革命解放闘争の発展とその西進、すなわちタイ・ビルマを経てインド大陸の解放革命闘争と結合することである。それは又、中近東革命に具体的展望を与えるものとなるであろう。そのことは又、われわれに工場占拠ゼネスト―二重権力―武装蜂起・プロレタリア独裁樹立の革命的権力闘争の推進とその実践を踏まえてアジア、さらには世界革命の方針提起と国際統一戦線の形成の主體的取り組みを要求している。

(四) ゲバラ路線の破産

日中友好議員団が訪中したとき、その一人が周恩来に向かつて、「日本の新左翼をどう思うか」と訪ねた。周は「ゲバラを読んで感激しているようでは仕方ない」と答えた。「なぜゲバラに心酔することが新左翼の限界なのか」と重ねて問うと、「ゲバラの日記は、獵人日記みたいなものだ。きのうはウサギ何匹、きょうは鹿を何匹取ったということしか書いてない」という回答が返ってきた。中国指導部の「ゲバラ」に対する評価は何を意味するか。それを明らかにするために、毛沢東の戦争論とゲバラのそれとを比較することが必要となる。

毛沢東は「中国の赤色政権はなぜ存在することができるか」（一九二八年）において、「地方的な農業経済（統一された資本主義経済ではない）及び勢力範囲を分割する帝国主義の分裂と搾取の政策」を「赤色政権の発生と存在の原因」の第一にあげている。すなわち、「半封建、半植民地」という規定は、単に二段階革命論を演えきするためではなく中国革命における権力問題を明らかにし、革命戦略を明らかにするための重要な意味をもっていたのであった。

発達した資本主義国家に個有な中央集権的権力機構の不在と統一経済の未成熟から根拠地革命を理論づけたのである。続いて毛沢東は「中国革命戦争の戦略問題」（一九三六年）、「何百万千万の大衆を好日民族統一戦線へ参加させるために闘おう」（一九三七年）、「抗日遊撃戦争の戦略問題」（一九三八年）、「持久戦論」（一九三八年）、「連合政府について」（一九四五年）、等を通じて「人

民戦争論」を完成させていった。「人民戦争論」と画期的な意義は真に階級的な不敗の戦争論、すなわち日本軍や米軍が性懲りもなく真似ようとしても遂に真似ることのできなかつたプロレタリア階級被抑圧人民固有の戦争論を階級闘争の歴史に初めて登場させたことである。

中国革命は又、「階級のない軍隊」、「軍事・政治・生産を組織する工作者としての軍隊」を創出した。上官の命令には絶対的服従を強制され、無理やり戦闘に参加させられるブルジョアの軍隊が、人民戦争戦略を任う主体として教育され、自覚的に立ちあがる人民解放軍にたちうちできないのは当然であった。

こうしてみると、ゲバラや赤軍派などのその亜流の「革命理論」の貧困ぶりがいやでも見立たざるをえない。

ゲバラには権力論がない。レーニンが「革命の根本は権力の問題である」といった。ゲバラには革命の根本が欠けているのである。

ゲバラの戦争論は、ブルジョア軍事論と大差ない「技術論」にすぎない。戦車を落っこす穴の掘り方をくどくど書いてたりしているだけである。

ゲバラ・ファンクラブ代表の赤軍派は「職業的兵士」だそうである。ブルジョアの軍制への根本的批判を欠いた彼らに革命ができるわけがないのだ。

ボリビアの権力機構や諸政治勢力、諸階級の分析を通して戦略を確定することをせず、根拠地革命を中国やベトナムの特殊性に解消してプロレタリアート人民の権力をどこに依拠して形成するかを考慮することもしなかつたゲバラが山中にたれ死する前に捕えられ殺されたのは、彼が特別不運だったせいではない。人民との結合を口にするならば、彼は、大農場の農業労働者、鉱山労働者、都市

のスラムの住民、工業労働者、焼畑農業のインディオのどの部分を階級闘争の本隊として組織し、それを通して他の部分をどのようになすかに取入れていくかをまず決定しなければならなかつたのだ。彼の死が住民の通報によって早められたことは、まさに一切を暗示する象徴的な出来事である。

パレスチナ・ゲリラも、政治的無能さにおいてはゲバラにひけをとらない。彼らも戦略をもたない軍事主義者である。テルアビブ乱射事件の岡本某の八〇日間の軍事訓練中まともな政治教育が一度もなかつたというのもふざけた話ではないか。逮捕された後で、彼がパレスチナ問題に対する無知をさらけだし、左翼の名を国際的に恥ずかしめたこともわれわれの記憶に新しい。彼らの無定見を革命的ロマンティズムや革命的情熱という言葉をもっては正当化しえな

い段階にきていることを肝に命じておく必要があるだろう。

(七二年六月)

近接する学園を出撃拠点と化し

軍事輸送阻止の街頭制圧戦を!!

人民の階級闘争への対応を避けて通ることのできない日帝は、「安保体制の堅持」を掲げざるをえない。日本の支配階級がインドシナ革命に対する米帝の反革命介入への支援をそ易々と断念する筈はなかった。彼らは反撃のチャンスがうかがっていたのである。

人民の関心と支持の高揚にもかかわらず、現地闘争が数千の群衆と若干のセクト動員及び自治体による合法的圧力の行使の域を越えていないことを見極めた国家権力は、自治体の切り崩しを行う一方五千名の機動隊を投入して補給蔽前に六九年新宿駅西口型の戒厳体制を布くことにより輸送の再開を強行したのだ。

労働者、学生、市民諸君!!

こうした事態が明らかにしたものはなにか。

それは、数万の労働者・学生の組織的動員を背景に大衆的基地包圍制圧戦、地区人民戦争を貫徹することを抜きにして輸送強行の決

1. 戦車輸送の再開は何を意味したか

全ての先進的労働者・学生諸君!! 闘う人民諸君!!

インドシナ人民の英雄的闘いはアメリカ帝国主義の反革命軍事体制の一角を突き崩す決定的な役割を果たした。このことは、同時に日米安保体制を支柱として展開されてきた日本帝国主義の対外政策の基礎そのものの動揺を意味するものにほかならなかった。

今回の相模原における軍事輸送阻止闘争は、まさにこうした日米安保体制の動揺と日帝の外交路線の未確立という敵階級の「虚」をついた闘いであった。以上の事実は「前衛」七一号で確認した通りである。

とはいえ、「アジアに位置する唯一の帝国主義国」としてアジア

意を固めた国家権力が配備した機動隊を粉砕しつつ、闘争を勝利に導くことはできないこと、これである。

2. 新旧左翼のアリバイ闘争を糾弾せよ!!

相模原闘争は、社会党、共産党及び新左翼諸党派の日和見主義と無気力さをあますところなく暴露した。

我々は、彼らが機動隊の隊列に突込まなかったとか、火炎びんが飛ばなかったとかいう点でそれを問題にしているのではない。そんなことで輸送が阻止できる筈はないからだ。

彼らの犯罪性は、軍事輸送を現実に阻止し、動揺する安保体制に鉄槌を下す唯一の展望としての相模原地区人民戦争を可能にする前提条件たる労働者・学生の組織的大衆動員を彼らが徹底してネグリーあるいは放棄し続けたことにあるのだ。

3. セクト的利害を闘争に優先させた

社会党、共産党

「ブルジョア法規」を逆手に取った革新自治体の異議申立てと社会党員による座り込みから装甲車、戦車の補給蔽内封じ込めと闘争の社会的焦点化の糸口をつかんだ今回の闘いは、飛鳥田横浜市長自らが再々語ったように「自治体による抵抗には限度がある」ことを最初から明らかにしていた。彼は「国政レベルでの解決」に期待することによって社会党の対政府交渉にゲタを預けようとした。

勿論、「もう少し引延ばせば社会党はダウンする」と、政府、自民党に、手の内を読まれていた社会党に軍事輸送をあくまで阻止しようなどという意志も力もある筈がなかった。現地闘争本部から「闘争は現地まかせ。党本部はベトナム戦争反対」などと一片

の文書で政府に申込れるだけ」(九月九日「朝日」)という反発をうけ、「党本部の積極的乗出し」を要求する声が起るありさまであった。

もし仮に「自治体の抵抗の限界」を突破する闘いを社会党に期待するとしたらそれはどのようなものでなければならぬか。

それは、落目とはいえ今なお総評を通じて労働者階級に最大の影響力を保持している社会党が、総力を挙げて労働者大衆を相模原に結集させ、機動隊を数万の大衆で包圍し、その海の中に吞込んでしまいうことでなければならなかった。そして、これこそ我々の追求する地域人民戦争の布陣の完了を意味するものにほかならなかったのである。

にもかかわらず、社会党、総評は、労働者の現地動員をサボリ続けた。

なぜならば、人民の圧倒的支持の中で「闘争の焦点」に労働者を大衆的に動員するということは、労働者大衆が社会党、総評の統制をはなれ、帝国主義者に対する怒りを直接に表現する行動にふみだすという危険をおかすことになるからである。

結局のところは社会党は、「火薬庫」に近づきすぎないように注意しながら收拾の機会をうかがう対応に終始したのであった。

八月五日のノースピアにおける社会党員の座込みを「挑発」として非難するなど、闘争の出発点から日和見主義者としての本性を満天下にさらけ出し、赤恥をかき通しだった日共にとって、事情は一層深刻である。

社会党に對抗する彼らの唯一の手段は、その大衆動員力にある。ところが、機動隊に追われた群衆をスクラムで押戻すなどの犯罪的行為を重ね、市民の間においてすら「闘わぬ日共」という定評を

確立してしまつた共産党にとって、自派の労働者、学生を現地に総動員することは、「唯一の前衛党という神話を暴露する教室」に生徒を引卒していくことを意味したのである。

彼らは、一握りの人身御供を補給蔽前に陳列し、市民が浴びせかける罵倒にひたすら耐えさせることによって、その場しのぎを続けるほかなかつた。

4. 重ねて新左翼諸派の没落を確認せよ!!

闘争の過程で示した無気力振りについては、新左翼諸セクトにおいても既成指導部に劣らないものがあつた。

新左翼最大の党派、革共同革マル、中核さえ、その動員は、最高時で七、八百名に止まつた。それも学園からの大衆動員を全く放棄して活動家をひっかき集めたあげくにすぎず、彼らが一時期ともにコンスタントに二千名の結集を維持していたことからみると彼らの没落振りには見るも無惨であつた。その他のセクトはおして知るべしである。

先進的労働者、学生、市民諸君!!

動揺する安保体制を追撃する絶好の機会の到来にもかかわらず、何故にこうまで彼らは無気力なのか。

それは、第一に、彼らがインドシナ人民の闘いの前進による日米安保体制の転換という情勢を正しくとらえることができないことに起因している。

彼ら新左翼は、十年一日の如く、そしてまた口裏を合わせたように一六九年日米共同声明以来の日米共同反革命の延長上に軍事輸送問題を位置づける一というアジテーションを繰返すのみであつた。度重なる「敗北」に腑抜けとなり、思考停止に陥っている。

彼らに「追撃戦」を敢行するバトスを期待するのは無理というものである。

第二の理由としては、六七年羽田闘争に触発された階級闘争の自然発生的高揚に彼らがあまりにも無自覚かつ没主体的にかかわってきたことをあげなければならぬ。

彼らは、キャンパスでアジッていればどこからとなく学友が現われ、結集してくるといふ事態に馴れすぎしまったために、クラス・サークルに介入し、徹底した討論を通じて大衆を煽起す作業を怠るか、あるいは忘れてしまったのだ。

抜けガラ同然の新左翼諸君!!

一度でいいからクラスに入ってみたまえ。米帝のインドシナ反革命戦争を是とする学友など一人もいないし、素朴な表現であってもベトナム人民への共鳴と連帯を口にしない学友もいないことがわかるだろう。

これだけ広範な闘争を支持する潜在的大衆が存在するにもかかわらずそれを基地包囲、制圧の大衆戦に結合しえない理由は、ほかでもない、左翼の怠慢にあるのだ!!

われわれは、神奈川大学をはじめとして、クラス・サークル末端からの学生大衆の組織化を推進しており、その成果を獲得しつつある。

5. 「群集」を戦闘の中で鍛え抜くと同時に 内部に底辺委運動の核を形成せよ!!

敗け犬左翼諸君は、不定型な群集として闘いに参加した労働者、学生、市民に対する指導と組織化の情熱をも失っている。

群集と一口に言ってもその構成主体は、工場労働者や全共闘くず

れの学生であり、彼らを戦闘で訓練し、その先進的部分を組織化することは、人民戦争の陣型を強化すると同時に、「社共」にとって代わる新しい潮流の形成に実体を与える運動となるだろう。

にもかかわらず、九月一八日の深夜から翌朝にかけて補給蔽前をうめつくした大衆的座込みを「群衆」に提起したのはノンセクトの学友や、「ただの市民が戦車を止める会」の人々であつた。その時セクトの連中は何をしていたのか。彼らは各々が所有するテントの前にポツンと座り込んでいたにすぎなかつた。座込み戦術が革命的かいなかを云々するのは別の話だ。どうせ座込みなら、なぜ、大衆を巻込んで座込みもしなかつたのか、この辺にも彼らの政治党派としての破産が如実に明らかにされている。

6. 周辺の学園を出撃拠点化し、輸送阻止の 大衆的街頭制圧闘争を貫徹せよ!!

全ての先進的労働者、学生、市民諸君!!

革新自治体のマッチによって点火され、社会党のポンプによって水をかけられた相模原闘争ではあるが、社会党が屈服路線に陥り、自治体がその限界を露呈した今こそ、われわれが闘争を真に革命的な闘いに再組織すべきことなのだ。

それにはまず、学園からの大衆動員を行い、学外にあふれさすことからはじめなければならぬ。そして、相模原からノースピアに至る搬送ルートに接近する諸大学に結集し、そこを出撃拠点としつつ戦闘車輛輸送阻止の大衆的制圧戦をくり広げるのだ。

先進的学友諸君!!

とりわけ神奈川大学は、当局の支配体制が恒常的にマとしておりしかもノースピアから徒歩でわずか三〇分たらずの距離にある。こ

こは全ての闘う人民にとって最良の出撃拠点となりうるだろう。

全ての労働者、学友、市民諸君!!

安保体制に致命的な一撃を与えるためには学生の力だけでは決定的に不十分である。

そればかりではない。

軍事輸送阻止、基地機能マヒ闘争を工場占拠ゼネスト―二重権力プロレタリア独裁樹立の革命的権力闘争として発展させるためには、是が非でも工場労働者の内部に革命的中核隊を組織しなければならぬのである。このことは同時にまた、社共の階級闘争におけるヘゲモニーを奪取し、新左翼諸派からの擬制の革命的左翼の仮面をはぎとる過程でもあるのだ。

とりわけ、社共が基地闘争への大衆動員を回避している状況の下では、学園での大衆の組織化をかちとると同時に、基地労働者や周辺の工場労働者との結合が全ての先進的学友の任務として主体的に引受けられなければならない。労学底辺委員会運動の推進が問われているのだ!!

労、学、市民の巨大な渦で機動隊を包囲、分断し、孤立した部隊を連続的にせん滅せよ!! こうした闘いこそ、ベトナムにむけた軍事輸送を阻止し、インドシナ人民の闘いと革命的連帯を実現する第一歩を切拓く闘いとなるだろう。(七二年九月)

神大を拠点にし相模原闘争を貫徹せよ

先進的労働者、学生諸君!!

八月四日深夜、ベトナム人民の血しずくを振り払うかのように、国道を突走していた戦車は止まった。自然発生的な外被をまといながらも、戦車輸送阻止の闘いは、労働者、人民の圧倒的な支援の中で、相模の台地を焼きつくした。

九月一日早朝、機動隊五千による強権的な闘争破壊—テント村破壊、装甲車輸送強行にいたるまでの、一ヶ月半にわたる期間、相模原補給前線は、大小のテントが林立し、新旧左翼、群衆が入り乱れ、修羅の空間が現出した。基地↓ノースピアにいたるルートは、完全にマヒし、圧殺を試みる権力との攻防が、群衆の波の中でくり返され、英雄的インドシナ人民との連帯、基地機能マヒの大衆的反乱状況が作り出されていた。

しかし、この状況下での、群衆の生き生きしたエネルギーの爆発

労働者が、生産点での不満を解消できずに、石を投げ、機動隊との攻防を展開するという状況が各所でみられたのである。

確かに、自然発生的、分散的であり、わずかの機動隊が突込んできても逃げるといったような情勢であった。しかし、一度、これを指導し、反乱状況を作り出すことは容易であった。それをやりきる十分な、質と数を持った部隊がいれば。

ともあれ、このことは、一つの未来を予想させ、展望を与える。このような状況での方針とは、群衆と結合したすぐれた部隊による群衆戦の展開によって基地包囲の大衆的な反乱の爆発を波及することである。群衆のヘゲモニーをとったものが、運動のヘゲモニー全体を獲得できるのだ。

一八〇九日の経過は、それを証明している。そのヘゲモニーを握った「戦車を止める会」が全体のヘゲモニーを握ったのだ（もちろん市民主義的運動に 約させてしまう結果になったのではあるが）われわれは、この間、昨年のロックアウトとそれへの追撃の闘いのエネルギーを背景に、スペイン諸学科を中心に、教授追及、授業介入団交といった連続的な闘いを組み教授の馬鹿さかげんを暴露し教授を追いつめてきた。

と同時に、われわれは、学生闘争の個別的限界、実体的な労学結合を貫徹しない限り、展望をもてないという事実に取り組み、底辺委運動を追及してきた。つまり京浜地区行動委連合に関わる中で工場職場拠点の実質化を計り、京浜地区の一大潮流としての飛躍を打ちとってきたのだ。そして又、更に運動を他職場に波及させる使命をもって、ピラミッド活動等を行いつつ、学生、高校生の結合と底辺委運動主体の確立を急いできた。

そして、その過程での活動範囲の限界性、全体化するための限界

に比らべ、新旧左翼の退潮は目をおおうものであった。

もちろん日共は、始めからいなくても同じであるが、「国内法を守れ」と合法主義で登場し、一見ヘゲモニーをとっているかのようだが社会党も、まともな労組動員もできず、又、九月一日には早々と逃亡を決めこみ、革新自治の勝利だと総括しようとしている矢先、一九日の政府の居直り発言のパンチを受け、「オロオロ」するといふみじめさであった。

一方、新左翼もいつものながらの実力阻止、粉砕のかけ声も勇ましく悪戦苦闘したが、退潮はいかんともしがたく、党派動員でお茶をにごし、大衆動員はかけられないでいる仕末だ。群衆に、「もっとやれ、突っこめ」と逆にあおられ、これ又、只「オロオロ」するだけであった。

だが、その反面、群衆の活躍はめざましく、特に、不満を持った

をふまえ職場、工場、学園拠点の運動を前提に全国的潮流化の更なる追及の必要性から反戦闘争への取り組みを決定した。

特に、神奈川大学は、その位置から、京浜地区の工場、職場闘争の要としてあり、京浜地区反乱の要所としてある。と同時に、基地に取りまかれた神奈川における、基地闘争の拠点として、今後の反戦闘争のキスウを決する点にあり潮流化の要にもなっている。われわれは、このことをふまえ闘いを展開しようとしている。

われわれは、その第一歩として、闘争委を中心に、九月の授業再開後ただちに、それまでの成果と、限界をふまえ、大衆動員を打ちとるべく情宣活動を開始した。闘争委を中心とした部隊は、授業へクラスへの大胆な介入を背景に、現闘体制を組み、現地闘争を断固として闘った。現地闘争でわれわれは授業再開直後、十数名の結集をかちとり、高校生、他大学と結合して捕給 前で、他を圧し、驚かせるほどの大胆不敵なデモンストレーションを貫徹し、敵が攻撃を開始するや、何もしない新旧左翼を尻目に、強固な意志一致の下で分散し、機動隊との攻防を群衆と結合し、せん動し、先頭に立って、機動隊が逃げれば追撃しぬくという文字通りの群衆戦を負傷者を出しながらも闘い抜くという変幻自在な活躍を示した。

われわれはまだ、徴力ではあるが、拠点闘争の積み重ね、底辺委運動の展開を通し、反戦闘争を取り組み、絶えず、学内に還元していく底辺委運動の潮流を創出していくといった闘争を大胆に展開しようとしている。新たな潮流をめざしわれわれは、その過程でたとえ闇夜であっても恐れず立ち向かっていこうとしている。

先進的労働者、学生諸君!!

新たな全国潮流をめざし、更に更に前進せよ!!

共産主義武装行動委員会神奈川大学班

インドシナ革命の現段階

インドシナ人民の

切り拓いた地平と今後の課題

1. 「和平合意」の核心は何か

去る一〇月二六日のハノイ放送は、「ベトナム民主共和国と米國は、ベトナムに平和を回復するような戦争の解決について合意したが、米國はこの合意を尊重しなかった」という暴露を行うとともに「最終的に合意した日程による三一日の調印」を強く迫った。

九項目からなる合意については米当局自身も確認しているにもかかわらず、「調印」が遅れているのは何故か。それは合意を携えて一八日サイゴンを再訪問したキンジャヤー米大統領補佐官がチュウ政権の「抵抗」に遭遇したためであるといわれている。

「合意」に対するチュウのクレームは、基本的には次の三点に要約される。即ち、①三派混合の「民族和解一致全国評議会」に行政機構的性格を持たせないこと、②南ベトナムからの北ベトナム軍撤

退、③インドシナの一括停戦である。延命を画策し続けるチュウにとってこれら三つの要求のそれぞれには、まさしく死活がかけられており、どれ一つをとっても譲ることのできない重要性をもっている。しかしながら、インドシナ革命全体の帰趨を左右すると同時に、階級闘争史上に占めるベトナム人民の闘いの基本的性格を決定する最大の鍵は、③のインドシナ一括停戦を聞いて続けてきた人民及びその指導部が許容するか否かにかかっているのである。

何故か。その回答は、ニクソン政権のベトナム革命戦争に対する基本戦略を明らかにすることによって与えられるだろう。

2. ニクソン戦略の基調は

「局地戦封じこめ」にある

周知の如く、ニクソン政権がこの四年間に立案し、実行した主要

な外交政策の悉くは、「ベトナム戦争の名譽ある解決」を終局目標とする外交戦略の体系の有機的一環をなすものとして組立てられてきた。

ニクソン・キンジャヤーのベトナム革命戦争「処理」戦略は、「軍事的勝利をねらった米國の基本戦略は、六八年のテト攻勢によって誤りであることがはっきりした」（「ベトナム交渉」フオーリン・アフエアーズ誌六九年一月号キンジャヤー）という認識を前提に出発した。それは、①対中・対ソ接近政策、ヨーロッパをも含めたグローバルな「緊張緩和」外交の展開を通してベトナム革命戦争を「局地戦争」の枠内に封じ込めること、②チュウ政権へのテコ入れ、強化によってベトナムでの決定的な軍事的敗北を回避すること（ベトナム化政策）を二本の柱としていた。キンジャヤーの表現によれば、「多極化の世界で新たな力の均衡をつくり出す全面外交」（「米國の課題」と題する報告集の中の論文）であり、「解放戦線が力で目的を達成できないよう、サイゴン政権の軍事力を強化」（「ベトナム交渉」）することであった。

「中国、ソ連の抱き込み工作」は、完璧に近い成果をあげた。中ソ対立を巧妙に利用しつつ、ベトナム人民の闘いを孤立させることに成功したのである。一〇月二六日付のニューヨーク・タイムスは和平交渉の「行き詰まり」を打開できた最大の理由として「ニクソン大統領の機雷封鎖、北爆強化を中・ソがガマンして（？）見過ごしたこと」をあげている。これはまさに、「ベトナム問題を大國間の問題とせず、局地的な問題として処理する」という米國の戦略を中・ソが受入れたことを意味するものであった。

従って、ニクソン訪中の前後に北ベトナム指導部が執拗にくりかえした「大國の取り引き批判」のさげびに対する周恩来の「ベトナム

ム問題は米中会談の議題としない」という再三の弁明そのものが、取り引きの事実を肯定し、その政治的性格を自ら暴露する行為に他ならなかったのである。ベトナム問題を棚上げにしたまま米中関係が「改善」され、北爆強化の最中に訪米中国卓球団が殺人鬼ニクソンと欲談することこそ、ニクソン外交の「勝利」と彼の再選に対する最大の援護射撃だった。

ソ連は当然、中国に右へならえをしてニクソン訪ソを受け入れた。ボー・グエン・ザップ北ベトナム国防相が解放闘争の勝利の条件の一つにあげた「国際的支援の高揚」は、六八年のようにはよりあがらなかった。ジョンソン大統領すら中国の直接介入を恐れて採用しなかつた機雷封鎖や全面北爆にニクソンが踏みきった後でも、国際反戦闘争は不発といっているほどの停迷を脱することができないでいる。ニクソンの「封じ込め」戦略は、貫徹してしまっただろうか？

断じていなのである。そして、米帝の「ベトナム包囲網」を突破する突破口は、ニクソン自身がつくりだしたのだ。

3. 「ベトナム包囲網」の一角を突き崩した

カンボジア・ラオスでの闘い

ディエンビエンフーがベトナム独立同盟戦線（ベトミン）とラオス愛国戦線（パテト・ラオ）との緊密な連係の下に攻略された事実が物語るように、ベトナム革命は、全インドシナ解放闘争とは最初から密接不可分の関係にあった。とりわけ、史上最強の米帝國主義軍隊との対決が基軸とされた六〇年〜七〇年代にあってそうした傾向は更に促進された。それは当初、ベトナム南部の解放闘争遂行の

必要上からするラオス・カンボジアを経由する補給ルート及び後方平站基地の建設としてあらわれていた。

シアヌークは、赤色クメールに仮借のない弾圧を加えつつ、解放戦線のカンボジア内における行動は黙認する政策をとってきた。そもそも、いくつかの例外を除いて後進諸国のブルジョア権力は弱体であり、常備軍もせいぜい数万人規模のところが多い。カンボジアもその例にもれず、シアヌークは、解放戦線の圧力が自らに直接及ぶことを回避する為その行動を容認し、同時に対中・対ソ接近を計って赤色クメールを分断孤立化させ、封じこめていく政策を展開していたのである。

ベトナム・カンボジア国境の釣り針地帯とオウムのくちばし地帯から直接にサイゴンをおびやかされる米帝及びチュウ政権にとってカンボジアに直接侵略したいという誘惑は押さえがたい衝動であった。ニクソンは、七〇年三月、ロン・ノルを使ってシアヌーク追放のクーデターをおこし、続いて五月カンボジア侵略作戦の決行に踏みきった。

これは、カンボジアに反共政権を築き、解放戦線の後方平站基地をたたきつぶすことによって「ベトナム包囲網」をせばめることをねらったものであった。同時に、あわよくば「孤立」した解放戦線をベトナム南部からも駆逐しうるかもしれないという甘い願望があったことも事実のようである。

しかし、この作戦はもの見事に空振りに終わった。そればかりではなく、カンブチア民族統一戦線の形成とベトナム・ラオス・カンボジアの三つの革命勢力の公然たる結合（インドシナ統一戦線の結成を促し、解放勢力の制圧地域をカンボジア全土におし広げるという結果を招いてしまったのである。

とを認め、相互に相手を「勢力」として承認しあった上で停戦にもち込み、政治的な解体を追求するという方向に転換したことを示している。これは明らかに妥協であり後退である。

これに対し、骨の随から政治的痴ほう症患者（革マルは、北ベトナム指導部が「和戦両用の二面政策」をとったところに「和平提案をレベルダウンさせねばならない根拠がある」（解放二四八号）として政治交渉を戦術に採用したこと自体が誤りだったとわめきちらしている。

革マル派の諸君よ！！

和平交渉を否定し、最後の勝利に向けた「徹底抗戦」をベトナム人民に呼びかけることも結構だ。それでは、ベトナム人民はどのように関ったら政治交渉抜きに勝利に到達出来ると言うのか？！そこを明らかにしないでゴチャゴチャ言うのは空論主義というものではないか。ベトナム人民が直面している困難を解決するための回答を提起せずに、革命的人民及びその指導部を誹謗する思い上がった行為はやめたまえ！！

とはいえわれわれは、「停戦交渉は……自らがこうむっている巨大な損傷から一日も早く戦闘力を修復し、未だ解放されていない南ベトナム人民を政治的にかりとるために必要な新しい形態の闘争への飛躍なのである」として「二六日付のハノイ放送による提起をわれわれは断固として支持する」（世界革命二八八号）という四トロの安直極まりない評価をも否定する。

確かに、ベトナム人民は、「合意」の条件のもとでも最終的勝利を獲得し、ベトナム南部を解放するだろう。しかしながら、それだけでは、「ベトナム革命戦争をベトナム一国の内戦に封じ込める」「その後で一定期間を置いた後、どのような政権がサイゴンに生ま

カンボジア侵略は、ベトナム革命戦争の「封じ込め」を基本としたニクソンの戦略にとって最大のいさみ足であり、彼はベトナム包囲網の突破に自ら手をかしてしまった。

カンボジア作戦が裏目にてたことにあせりを感じたニクソンは、次にその予先をラオスに向けた。七一年三月、南カイルイ軍の「精鋭」四万を空と陸から投入してフライパンの柄と呼ばれる地帯を縦断するホーチミン・ルート（九号公道）を南北で分断する新作戦を挑んだのである。カンボジアにおける解放戦線の戦略的後退を自ら強化されたせいだと錯覚した南「精鋭」軍は、解放戦線の待ちかまえている地帯に誘いこまれ、その餌じきにされてしまった。

4. ベトナム人民が単独で闘いつづける

かぎり「妥協」は不可避である

ニクソン（キッシンジャー）戦略のもう一方の支柱（ベトナム化政策の一環として米帝は、南ベトナムカイルイ軍に米軍式装備をほどこし、彼らを訓練して再組織した。チュウの軍隊が解放戦線に対抗しつつラオス・カンボジアまでカバーしきれる質でないことは、先の両国に対する侵略作戦の破産が証明した。しかし、本年三月からの大攻勢の過程は、米空軍の強力な支援の下では、南カイルイ軍もそれなりの防衛線維持能力を発揮しうることを示した。即ち、「解放戦線が力での達成できない」程度にはサイゴン政権の軍事力の強化に米帝は成功した、といえるような情況が生まれたのである。「ベトナム和平に関する合意」の中で北ベトナムが「チュウ政権の解体」という従来の要求をとり下げているのも、ベトナム人民の闘いだけでは、南カイルイ軍を軍事的に粉砕しつづす展望がないこ

れようと米国の関知するところではない」というニクソン基本戦略がその初期の目的を達成した、という事実を一步も越えることがないではないか。要するに四トロは、米帝の戦略が達成した結果を事後的に追認してベトナム人民を「断固」支持したつもりになっているにすぎないのだ。

如何に口先きで国際主義を標榜しようが、革マルもまた、究極のところ一國主義的にベトナム革命を把握している点では四トロと同列である。問題は、「和平提案のレベルダウン」政権問題に対する北の譲歩にあるのではない。一番最初に確認したように、「インドシナの一括停戦」を受け入れるか否か、即ち「封じ込め」政策をどのように突破しうるかが核心問題なのである。この問いに対する実践的回答をなし切った時、ベトナム人民及びその指導部は、ベトナムばかりでなくインドシナ全域の革命の勝利を確保し、同時に世界革命戦争の内的一環としてのアジア革命の戦線構築を領導する歴史的地位に自らが飛躍させることになるだろう。

5. インドシナ統一戦線の

革命的再編をかちとれ

単独での闘いを強いられているベトナム人民にとって情況を突破する死活の展望は、インドシナ全域への戦線の拡大にかけられていることをわれわれが既に以前から明らかにしていた（前衛七一号参照）

インドシナ革命勝利の条件は存在している。カンボジアでは全土の八割以上の地域をカンブチア民族統一戦線が完全に掌握しておりわずかの点に封じ込められてロン・ノル政権は、いつでもたたきつぶせる状態にある。いかに米空軍が大規模な支援作戦を行おうとも

ロン・ノル軍が現在のように弱体である限り、何度か試みられた包圍突破作戦は、成功のしようがない。「合意」の中にインドシナ一括停戦が含まれていないことは、ロン・ノル政権に交渉当事者能力がないことを認めただけならなかった。

今回の大攻勢の前日の三月二十九日、カンボジアの首都プノンペンには、異常な緊張状態に包まれていた。市の周辺に解放軍の大部隊が集結しており、それは首都占領を目的としたものにほかならないと思われたからである。しかしそれは、解放戦線の真の攻略目標がベトナム南部であることを秘匿するための陽動作戦であった。実際、翌日からの一斉攻撃は、米軍及び南カライ軍の意表をつき、作戦の電撃的進行は大いに助けられた。

けれども、プノンペン包圍が牽制にすぎなかったことは、ベトナム解放戦線が単独で米軍の圧倒的空中軍力と六〇万の南正規軍を相手にしなければならぬという現在に至る戦局の基本的構造を決定してしまつたのである。

順序はむしろ逆にすべきであつた。まず、プノンペン攻撃を含む正面戦をカンボジアで挑み、そこに米空軍力及び南カライ軍を引付け、投入されてくる南の「精鋭」を順次せん滅しつつチュウ政権に揺さ振りをかけ、頃合を見はからせてベトナム南部での攻勢に打って出る必要があつたのである。南正規軍に壊滅的打撃を与えない限り、チュウ政権の武力打倒は不可能であり、しかも戦場がベトナム南部であるとそれは難しいのであるから、カンボジアに引出してたたくという戦術以外に軍事的決着をつけることは困難な筈であつた。

敵の戦略が封じ込めにあるのなら、それを打ち破る最良の方針は封じ込めを許さないこと、即ち戦線の拡大である。今回の「合意」

は、ベトナム人民の単独の闘いを前提とする限りでは最大の成果をあげたといえるだろう。しかし、インドシナ人民の闘いが示した巨大な可能性からすれば、い分損を取り引きに應じたものだと言わざるを得ない。

しかし、こうした作戦を可能にするためには、インドシナ統一戦線の再編、強化が不可欠な前提となる。この点からすれば、インドシナ統一戦線は、強力な形で統一されているとは言いがたい。以前からの民族的対立、更には赤色クメールにとっては敵であつたシアヌークの処遇をめぐる解放勢力内部のカンボジア人とベトナム人の反目は克服しきれたとはいえず、カンボジア民族統一戦線の右派分子が反ベトナム、反シアヌークを掲げてロン・ノル政府と接触を開始しているとの情報すら存在するのである。

ラオス愛国戦線にも問題がある。ディエンビエンフー攻略をベトナムと共に闘つた歴戦の強者である筈の彼らは、その長い戦歴の割には政治的な成長を見せず、一握りのプーマ政権軍に手こずり、ベトナム和平の動きに合わせてまたもや中途半端な手打ちを行おうとしている。しかも彼らの政治的能力を飛躍的に成長せしめない限りは停戦後にプーマ一派を政治的に解体することもあまり期待しえず、恐らく六二年段階の旧状に復す位が関の山であろう。

6. ベトナム革命の現段階は各国の

共産主義者に何をきつけているか

ベトナム更にはインドシナの革命の勝利を促進し、確実なものとするためには、インドシナ統一戦線の再編、強化が不可欠である。もっとも、米帝がインドシナ三国の反共政権に見切りをつけている

こともあり、インドシナ革命それ自身の勝利は、早晚時間の問題であらう。けれども、タイまで後退した米帝の包圍網を突破し、アジア各国に散在する革命勢力を糾合してアジア革命の巨大な戦線を構築するためには、何よりもまず、インドシナ統一戦線の団結の強化が要求されているのだ。

そしてまた、この闘いは自国に外交的的微笑を送っている限り、どのような反動的政権とも手を握ろうとする中国との国際的党派闘争の過程とならざるをえないだろう。バングラデシュ問題が示したように、中国は、少数の革命勢力（たとえそれが中国派を自称しようとも）よりも国家権力を握っている「友好」的政府を選ぶからである。

新左翼諸派はこぞって、ベトナム人民に対する連帯の方針を日本における反安保闘争やいわゆる「侵略阻止闘争」に求めたがっている。けれども今となっては、たとえ彼らが本気でそれを考えていようとも「ケンカすぎての棒干切れ」である。

われわれは、ベトナム人民に連帯する反戦、反帝闘争の日本における不充分性を痛切に自覚するが故にこそ、口先だけの国際主義者共を駆逐し、工場占拠↓二重権力↓プロレタリア独裁樹立の権力闘争に全労働者階級、人民を糾合する前衛としての地位に到達するため、そして反戦反帝闘争を工場占拠闘争と結合し、ふたたび真に活性化させ、工場占拠、ゼネストの引き金とするために、現在これらの反戦反帝闘争を闘う。われわれの真に有効な方針をインドシナの人民に提起し、それを阻害する党派は、ソ連共産党はむしろのこと、たとえそれが中国共産党であろうとも、断固とした党派闘争を展開する真の日本の労働者階級を代表する指導部に一刻も早く自らを成長させること、これこそベトナム人民の血の闘いに対

する連帯を不十分にした日本の左翼としてのわれわれの果すべき責任であると考える。(七二年一月)

第三部

あらたな労学結合を創り出し

底辺委運動の一大前進を！

朝日新聞臨時労働者、首切り合理化粉碎

自動機械導入阻止に立ち上る

明学大・立正大工場労研

1. 臨労。支援共闘統一集會に結集

全都、全国の労働者学生諸君!!

さる十月七日、明治学院大において、全臨労反合闘争勝利総決起集會がかちとられた。集會は、朝日新聞での労働者の闘いが、反合闘争として非和解の様相をおび、権力の介入まで（令状逮捕）予想されていること、そしてこれに対する明確な闘争戦線の確立とそれを保障する大衆的基盤と支援共闘組織との有機的結合が問われていることが明らかにされた。

それを踏まえ集會は、十・八・十・十に予想される自動梱包機導入、機械の据え付け工事に対し、一〇・一〇の夜からの稼働を突力をもって阻止する方針を決定した。しかも、このような攻撃が朝日

新聞、ひいては新聞産業総体がかかえている第三次合理化の実体であり、その為に全臨労を中軸とする朝日新聞社内の階級関係の清算を成しきることによってしか貫徹しえない合理化であることを確認し、それ故、マル秘文書（経営協設会の記録）で当局が明らかにした「全臨労セン滅」こそ、彼らの目的の一つであること、この策動との対決が必至であり、全面的に受けて起つことが確認された。

集會は、まず初めに朝日新聞芝浦印刷総局において闘いを押し進めて来た四分會一印刷一発送一東洋管財一食堂を結集した芝浦闘争委員會からの闘争経過と闘争方針の提起を受け、つづいて、有楽町本社で闘い続けている有楽町臨時労働組合、そして嘱託労を中心とし、工場労研を含めた臨労支援共闘會議そして最後に全臨労中央執行委員會からの決意表明を受けた。

この集會で次のことが明らかにされた。

八月二五日、朝日新聞当局は大合理化計画を発表した。自動梱包機の導入、臨時、下請臨時の解雇（直接には下請会社との契約解除であり、そのスケジュールとして、九月末での朝日臨時、食堂全員下請東管の希望退職切り一〇月一〇日をもっての解雇、がその内容である。そして、もっとも肝心なことは、有無を言わずこの解雇スケジュールに合わせた前段的基礎工事自動機械導入、旧機械の更新等が九月一〇日を出発点とし新聞刊日を利用して行なうことが明らかにされた。

それに対する芝浦闘争委員会を中心とする有楽町臨労、輸送支部販売各分會、明和労組、そしてわれわれは、朝日との団交、機械導入、据え付け工事阻止の闘いを組んできた。具体的には九・一〇工事實力阻止九・一七実力阻止、本社前抗議集會、九・二九支援共闘會議結成、一〇・一職制との激突を通じた職場内外の座り込み、ピケをちかちかしてきた。と同時に芝浦だけの闘いに留まることなく、有楽町本社での編集、発送の各版帯ストを貫徹した。すでにこの時点でも、権力の不当逮捕が行なわれた。露骨な朝日一国家権力の策動であった。

集會は、このような闘いの経過と当局一権力との緊張関係を踏まえ、この前段階的「全臨労セン滅」に対し、編集一印刷一発送一輸送一販売を含めた反撃の体制の構築と、臨労一本工の実体的結合の達成をめざし、それを支援共闘を含めてやり切ることを方針として明らかにしたのだ。

以上の点を確認し、一〇・八・一〇・一〇の闘いを断固やり切ることを最終的に宣言して、一〇・七集會は終わった。

2. 全臨労つぶしの政治的攻撃

今回の合理化が大きな政治的背景をもってやられようとしていることはすでに明らかだ。すなわち、第一に臨時労組、全臨時労組と少しでも関係ある所（例えば、食堂一直接には合理化と無関係であるのに）は一つとして残さず、下請の契約を解除し、労働者を解雇して行く、さわめて露骨な朝日資本の労働者弾圧であるのだ。

これに対し、闘い得る臨時労働者の戦線はきわめて、政治的質、内容が問われ、獲得されなければならないものとしてある。

すなわち、現在の攻撃の意図するところの重要性を確認し、それに対し闘いを組んでいる全臨労、芝浦闘争委員会の階級的内実の鮮明化が要求され、朝日資本総体に対する闘いへの波及、また新聞産業全体における労働者の闘いを未来的に決定付けるような闘いの質が要求されているのだ。

全臨労を、芝浦における反合闘争を軸に展開して、その実践過程をふまえ、有楽町、平河町（輸送）の闘いに結合し、再編しなければならぬ。

そして、こうした闘いを通してのみ、敵の攻撃に対し、そのつど適切に反撃しながら、自らの力量を蓄積し、かつ、更なる攻撃的運動を展開する質を獲得し、合理化そのものを粉碎することができるだろう。

3. 朝日闘争の現段階と工場労研

現在までの闘いは、大きな成果を獲得しつつも今後に残された課題は多い。第一は、労災一腰痛闘争の内実、自主健康管理闘争によってまき起した業務マヒ一職場闘争の意義、とりわけ資本へ打撃を与える運動をもっての労働者の革命的解放感の獲得と、その自覚の

問題としてとらえられるだろう。

第二に、八・二八以降の反合闘争は、全臨労総体を結集させ、それに有機的に支援共闘を組織化し、結合をかちとり、一〇・一〇・一〇のダイナミックな運動を展開しぬき、何よりも資本に対する労働者の不屈の力をさし示した。そして本工に対する動揺と影響力をつくり出した。だが同時に、そのことは、臨時工本工の結合が具体的な実践作業の焦眉の課題であることを意味している。だがその場合、本工労組は社民の右翼の一元支配の下にあり、この本工労組の鎖をどのように解体していくのかということを確認しなければならぬ。

第三に、一〇・八・一〇・一〇のダイナミックな闘いを契機とした闘う隊列内部の分解と再結集の視点の確定と、それを主要な課題とする運動構造の設定、具体化、実践方向を導きだすことである。第四として、東洋管財の鋭い闘いと、朝日、食堂、支援共闘の独自運動、結合の実体化である。

明学大、立正大工場労研は、支援共闘に結集し、もともと戦闘的な部分として自らを位置付け、学園管理支配に対する恒常的マヒ、解体作業を貫徹しつつ、労働者の大衆的闘いと結合を創り出し、学園闘争の展望を一つ一つの実践をもって引出して行く過程にあることを報告しておきます。

そしてそのような闘いは、南部における反合闘争と学園闘争を、反合闘争と反合闘争を結合する運動体が、具体的に共闘支援の関係を強力に押し進め、普遍化していく作業を通して、工場占拠一地区制圧一ソビエト蜂起の陣型、内実をつけていくだろう。このような闘いを軸にして、反戦反基地闘争等を闘っていかなければならぬ。そして、臨時労働者の闘いは臨労戦線という独自の運動方向では

なく、むしろ、臨労↓、本土という内実をもった外への突き出しを主軸としたものにしなければならぬ。

全ての闘う労働者、学生諸君!!
全臨労、そしてわれわれの結集する支援共闘は、まだ朝日の大合理化という野望の突き崩しを開始したばかりである。合理化政策は単に、機械導入にのみあるのではない。

それを見ぬき、一つ一つ破産させなければならぬ、労働者の力をまず第一に職場、生産点に安定させなければならぬ。

その一步として、支援共闘は、朝日新聞の全面的暴露を組織しなければならぬ。報道管制をもって全臨闘争を報道しないマスコミ産業総体を相手とし、突破しなければならぬ。だが、これはすでに、一二名の同志の不当逮捕を行なって来ている国家警察との死闘でもある。

全都、全国の労働者、臨労、学生諸君。

朝日新聞の民主的、進歩的仮面を全社会的に暴露せよ!!

マスコミの報道管制を許すな!!

朝日反合闘争に支援し、結集しよう!!

反合闘争の質を継承し、反合闘争に起て!!

(七二年一月)

職業病闘争支援を通じて真の労学結合をめざす

南部宣伝行動隊

1. 労学共闘の実体化をかちとる!

労学結合の問題は古く、かつ新しいものとしていまなお我々の前に存在している。

口先の労学結合を叫ぶ部分が実質的には相変わらず学園闘争の見地でしかそれを語れないというのは珍らしい事ではないし、また労働運動一般に埋没することによって、あたかも学園闘争の限界を乗り越えたかのように錯覚するのまた珍らしいことではない。

実際、様々な階級戦線を見渡してみても実体的に当初より労学共闘を目的意識的に推進しそれを真面目に育てようとしている部隊は皆無であるといっても良いのではないだろうか。

そのような状況の下明学大・立正大を中心として結成された南部宣伝行動隊は自らの学園における闘いの一環に労学共闘を有機的に組み入れ地区運動に闘ってきた。

とりわけ革命的工場闘争を担っている同志への外からの支援闘争は内部の闘争の進展に多大な功績をあげ、共に革命的権力闘争を構築することを身をもって確認しあったのである。

特に南部地区に所在する〇電機の今夏を頂点とする職業病闘争へのピラ入れ、門前集会、職制追及を通じた支援闘争は労学結合の運動実体として我々に多くの教訓を残してくれた。

2. 反合・反職制・御用組合解体闘争の開始

〇電機は千五百名の従業員を擁した電話機製造の専門メーカーであり、組合は総評全金と全金同盟に加入しているが東京工場においては全金同盟の専制支配下である。

工場内部においてはラインに一名リーダーを置き、それを中心とする密な職制体制が確立して一日千台近くの電話機がラインに乗ってくる。しかも最大限細分化された単純反復作業が半年、一

年と続けられている。その過程で当然にも3名のけい肩腕症候群と呼ばれる職業病患者が発生したのであった。その時からなれ合い的労使関係をつき破り、〇資本―御用組合に対する労働者の非和解的闘いは始まった。

患者は裁判闘争と同時に職業病発生の原因であるラインのスピードアップ―労働強化・合理化攻撃に対する職場闘争に断乎たちあがったのである。その過程で患者を含め積極的にその問題を追及する決意を固めた労働者が「職業病と闘う会」という大衆闘争組織を工場内に創出し、工場の仲間へ宣伝行動を開始した。

それに対し会社は職業病を一切個人の問題へ還元せんと御用組合を利用し、労働者へデマゴギーを流したり、また主要活動家を分散させるべく配転攻撃をかけた。また同時に当時の職業病の発生したラインを早く撤去するなどの弾圧攻撃に出た。御用二組（全金同盟）はいやがる組合員の尻をたたき連日門前ピラ入れを行い「職業病に闘う会」は一切関係ない」「あれは日共のまわし者だ」などの本質問題を故意にそらした寝言を叫び、社内においても「職業病と闘う会」の会員と一般労働者とを分断させるべく奔走していた。そのような困難な状況の下、なお闘いを継続している。〇電機の労働者から南部宣伝行動隊は報告を受けた。南部宣伝行動隊はその場において革命的労働運動―大衆運動の発展のため、断乎、〇資本―御用組合に対する闘いに共に立ちあがることを決意したのである。

3. 職制―組合幹部に対する恐怖の追及

〇電機内における闘いもそうであるが、「生産性向上運動」を会社側と一体となって唱える同盟の専制支配下における闘いは、その労務管理体制の確立とあいまって非常に困難であり、その活動範囲

は狭められざるを得ない。

とりわけ〇電機の職業病闘争の方向性が「職業病の出ない職場を労働者の手で」というスローガンに現われているように単なる認定闘争から反合同争との結合を示さしている場合は顕著にしめつけが強化されざるをえない。また労働者に対する組合の圧倒的な物量作戦は、いまだ半公然の立場で活動を行っている同志にとって決定的に不利であり、どうしても内と外との連関の下、機動的な闘いが必要とされている。

そのような状況の下、南部宣伝行動隊は手始めに全金同盟のデマゴギーに対抗し、真実の声を工場内部の労働者に伝えるべく、早朝門前ピラ入れと集会を週二日のペースで粘り強く継続した。

多くの労働者に職業病の内実が伝わるにしたがい会社と組合幹部は次第にあせりの色を濃くし、〇〇サークルや患者に対する直接ドウ喝などの露骨な組織破壊攻撃を行ってきた。この時点において宣伝行動隊は組合幹部、職制の反労働者の立場を全労働者の前に明らかにすべく組合幹部、職制追及闘争へと歩を進めた。

宣伝行動隊は出社して行く職制、組合幹部どもを門前でとり囲み職業病問題の対応やそれに関した弾圧攻撃の内実を暴露し鋭い追及を開始したのである。追及は連日くり展げられ、労働者はだんだん興味をもち日一日と追及の輪は拡がっていった。職制、組合幹部は追及が進展するにつれ、労働者がみている手前、「その問題は自分には知らない、もっと上の人に聞け」という論理が通用しなくなり、最後はわれわれの阻止線を突破するため、グループで出社したり、裏門からこっそり出社するあり様であった。

宣伝行動隊はまさに早朝の門前を職制・組合幹部にとって恐怖の場と化したのであった。

この闘いを通じ明らかにされた職制、組合幹部の反労働者の立場は除々に一般組合員の中にも浸透し、会社・組合に対する不信感が増大するとともに職業病に対する理解が深まったのである。

以後、「職業病と闘う会」と宣伝行動隊は集会の開催や更なる反合同争の前進のため、固い意志統一のもと現在も闘いを続けている。

そしてそのエネルギーは地区へ拡大し、他の職場闘争との連結をかちとり始めている。

南部宣伝行動隊は労働者に学び、共に工場闘争の革命性と独自性を最大限尊重し、発展させるべく任務に大胆に着手したのである。

第四部

各戦線における闘い

君は人民戦争を見たか!!

一武藤・和田独裁に

再び鉄槌下る!

(七二年明治学院大学)

全都、全国の闘り同志兄弟達!!

前衛六三号以降、一月休み明けわれわれは学費値上げに対する攻勢を開始した。

全行連工作隊と七一戦線による連日に渡る教授追及授業粉砕は、改良セクトをも領導し、一月十七、十九日の全学封鎖と全学的教授追及の反乱行動によって繰り上げ期末試験粉砕闘争として頂点に達した。

最早、明治学院大学においては学費闘争は、反乱一敵支配秩序に對する麻ヒーによって対決する以外に方法を持ち得ないのであった。

こうした全学的反乱の拡大に恐怖した当局一武藤||和田独裁執行権力は、試験↓春休み(事実上のロックアウト↓授業料値上げ)の野望のため自己の力を発動した。

一月二〇日のガードマン導入、ロックアウト。二四日、ガードマ

ン検門試験の強行がそれに他ならない。

全国の同志諸君!!

本日、一月二四日、我々は人民戦争によってそれを打ち砕いた。一〇時四五分正門前で学友によるガードマンに対する追及によって火ぶたは切られた。押しかけた学友ののしりや、ヤジによってガードマンは狼狽し、浮き足立ち、正門を閉め、四〇人、五〇人と集結しはじめた。

火に油を注ぐ、とはこのことに他ならない。正面を占めたが故に学生は見る見るうちにふくれあがり、十数名の意識的ロゲバは闘いの炎をかりたてた。まさに鉄槌は大きく揺れ、検問は解除され、ガードマンは後退し、ガードマンとわれわれを含む学生大衆の対峙関係は打ち破られようとしていたのだ。更に数名の竹竿武装した赤ヘルが三〇数名(党派動員を含む)登場し、この戦列に加わった。

ガードマンは張り子のトラである。(ツバも交えず一目散で逃げだしたのである。闘り武隊は、ガードマンを追撃し、検問を突破し、キャンパスに登上了たのである。ガードマンは、ヘボン館、教務課等校舎の中へとかくれ去り、随所でわれわれを含む怒りの学生の手によって各個撃破された。戦闘は開始された。ガードマン追撃戦を組織せよ!!機動隊出動を粉砕せよ!!

だが、カンパニア武装登場した叛旗・青解の諸君は、展開され始めた地平を理解しきれないが故に、集会を始めたのである。何たる秩序派か!!彼らにとってはこの事態を学費値上げ阻止のための試験粉砕、全学集会のためのガードマン検問突破という意味しか理解できない。だが反乱行動は出発が大衆的要求のさげびから出発してもそれは、同時にそのさげびをのり越え反乱から革命的権力闘争の地平へ進まなければ、自己貫徹できない行動として一人歩きを始める

右翼機会主義者の戦線逃亡を許さず

更なる前進にむけた

革命的統一戦線を構築せよ!

(七二年大正大学)

全都・全国の同志兄弟諸君!!

昨年一一・九の武装一事務室突入闘争は、大正大学における右翼職員・一部体育系学生の暴力支配体制をマヒさせ、大衆的学園反乱闘争の爆発的高揚の突破口を切り開いた。革マル・民青等の自治会主義左翼がこうした大衆的流動を見逃すはずはなかった。闘争の成果のサン奪をねらった彼らは、旧態然たる波状ストの繰返しと大衆団交による集約を唯一の方針として党派の困いこみ策動を勢力的に開始したのである。

たしかに彼らは、一時期ストライキ実行委員会のヘゲモニーを握ることに成功し、便乗主義的野望の達成に一步近づいたかに思われた。しかしながら同志諸君!!一一・九闘争に開かれた地平は、彼らの姑息な陰謀をくり広げる舞台としてはあまりにも広大でありすぎた。五波に及ぶストライキの後、方針を失った彼らは先を争って戦

のだ。明らかに彼らの集會集約は闘争半ばにしての夢であり反動的引き戻しであり闘いの炎に対する水の役割なのだ!!

しかも、集会の右手の本館の裏にガードマンが二十数名いるにもかかわらず。

全行連、七一戦線の学友は、ヘボン館、教務課のガードマンを撃破し、最後の決着一本館裏二十数名のガードマンセンメツへ総結集した。

黒ヘル、赤ヘルとかくしていたセンメツの武器に身を固めたわれわれは校舎からの学友の援護の投石を受け、数度突撃を繰り返した。それは、武装した部隊によって大衆を、投石突撃部隊へと組織していく過程であった。もはや、AIEFはわれわれに組織された分散の大衆であり背水の陣を引くガードマンの必至の抵抗を前にカンパニア武装は、そのメッキをはがされていった。

まさに一・二四闘争の環は大衆を宣伝、煽動し、敵の弱点に攻撃をかけその弱点を拡大し、一切のガードマンを学内から学生大衆の手によって学園を解放することになった。このことをなした中核部隊こそ、共武行を中心とする全行連、七一戦線の勇敢な戦士たちなのだ。

全都・全国の同志諸君!!

共産武装行動委員会明学大連は、昨年三・一七ロック検問↓試験粉砕闘争の成果を発展させ再び明学大の学友と共に、武藤・和田の野望を大胆に粉砕したことを踏まえ、更に恒常的の反乱の火の手を全都・全国の兄弟におくるであろう!!

線からの逃亡をはじめたのである。ある革マル主義者は、「闘争は自然に消滅した」という前代未聞、空前絶後の総括をぬけぬけと被露した。自然にだって！なるほど、一一・九闘争以降の高揚に外的に没主体的のっかろうとした彼らにとって闘争への参加そのものが自然発生的であつたこと、これは事実であろうし、戦線から召還した彼らからすれば、闘争が消滅したようにみえたとしても無理からぬ話というものである。

同志兄弟諸君！！とはいってもわれわれは彼らの総括を、そのあまりのばかばかしさをもつて一笑にふすわけにはいかないのだ。なぜならば第一に、彼らには闘争指導のずさんさや戦線逃亡に対する自責の念が全く欠如しているからであり、それにともなつて第二に、彼らはハレンチにも自治会執行部への返り咲きを目論んでワイ少な結果政策を再開しつつあるからである。日和見主義者・逃亡主義者を一掃し、大正大闘争の更なる発展をめざす強固な統一戦線の再構築をはかるために一一・九闘争に続く闘いの意味を今一度はっきりと確認しておく必要があるだろう。正しい総括は、正しい方針をも提起するからである。

一一・九事務室突入闘争の意義

大正大においてはわれわれの闘いが質・量ともに拡大していくに従つて当局の学園支配の内容・構造も急速に変化していった。当初支配者どもは、告示、処分というドウ喝によつて秩序を維持するべくつとめたが、それは、全学行動委連合の連日に渡る教室突入、授業秩序粉砕闘争によつて無力化され、全行連の闘争にひきづられる形で自治会主義者の行動のエスカレートをもたらしした。ドラ喝手

段による闘争の圧殺が不可能と知るや、大学当局は、職員、右翼学生をもつて秩序維持のゲバルト部隊を編成し、新左翼・自治会主義のはみだした行動への直接暴力を行使しだしたのである。これは、左翼戦線の弱小部分をテロることによつて最強、最精鋭部隊たるわれわれを孤立させると同時に、一般学生をドウ喝し、われわれとの分断を深めようとすることを政治的な意図とするものであつた。この段階に至るや、自治会主義者はなすすべを失い、右翼の攻撃の前に無抵抗な屈服を続け、当局の暴力装置強化の訓練材料―サンド・バック自らの身体を提供することに甘じていた。

ロッキアウトと大衆の流動化

一一・九闘争は当局の政治的意図そのものを文字通り粉砕しぬくことによつて分断せしめられていた学生大衆との結合―組織化を可能にした。ここに事務室突入闘争の偉大な意義があつたのである。一一・九闘争は、当局の学生管理支配機構を完全にマヒさせた。自前のゲバルトによる秩序維持の困難を悟つた支配者どもは、警察力を導入しロッキアウトによる闘争の収拾をはかろうとした。けれども当局の目論見は完全に裏目と出た。なぜならば、それまで直接的には、活動家集団にもつぱら向けられてきた大学の暴力的支配が、学生大衆全体をも直接の対象とするに至つたからであり、大衆をも力づくで学園から排除することにより、当局と学生の関係の非和解的、対立的性格を鮮明にしたからである。かつての分断策動は破綻し、われわれ闘うものの側に学生大衆を追いやることによつて組織化への格好な材料を提供してくれることになつた。

ストライキ戦術の破産

一月二五日、第二回臨時学生大会をもつてスト権が確立され、各クラスでストライキ実行委の代表が選出された。そして各クラスごとに連日討論が展開され、三項目要求―処分白紙撤回、機動隊導入自己批判、学費値上げ阻止―及び大衆団交要求がまとめられていった。ストライキは計五波によつてなされたが、団交を拒否されるまま学生の分散をまねき、形骸化していった。われわれはストライキ方針そのものに本質的限界があるとして戦術の展開を提起した。それはこうであつた。ストライキの惰性的継続は大衆をストライキに追いやり、その分散化を自ら推進するものに他ならないこと、従つてわれわれの採るべき戦術はストの形骸化の結果、既に部分的に再開されつゝあつた授業の粉砕であり、教授・反動的職員の大衆的再開を座視し、集会の前を平然とした顔をして通りすぎる反動教授を放置したまま、いたづらに当局による団交拒否の口先だけの弾劾を繰返しているだけだつた。団交でつるし上げるべき当の御本人が目の中にいるのだ。その場でとつつかまえて人民裁判―大衆団交を展開するというふうにはどうして頭を働かせることができないのだらう。授業再開のいくつかの強行と、われわれの方針の強制は、彼らをして授業粉砕闘争にとりくまざるをえなくした。彼らは、しぶしぶと、不安に満ちた表情でわれわれの後についてきたのである。われわれの徹底した授業介入―教授追及は、再び支配秩序を大きく揺がしたばかりでなく、スト実内部をも動揺せしめ、右派と左派の分解を促進させた。

スト実の形がい化の原因は何か

大正大大学におけるスト実とは他に類をみない組織であつた。自治会主義に骨の随まで犯されている新左翼、民青は、本来すべての闘う学友を結集すべき大衆闘争機関としてのスト実を右翼も中間派も含めたクラス全員の参加による投票―選出された代表による代議制―をもつて組織しようとしたのである。これでは右翼的色彩の強いクラスに所属する先進的学友は、闘争から排除されることになる。一方、活動家を多く抱えるクラスからもスト実に参加できるメンバーは、ごく一部に限られてしまうことになる。ここにも大衆の分散を促進する致命的な欠陥があつた。闘う学友はすべて参加できる大衆闘争機関、これこそ、統一戦線の革命的再建を可能にする第一の方針である。

敵権力・支配者に更なる追撃を！

我が共産主義武装行動委員会大正大班は、以上の総括を踏まえて闘争と大衆闘争組織の再建に着手した。まず最初にやらなければならなかつたことは、スト実を再結集し、総括論争を組織することによつてその再編と強化を計ることであつた。民青や革マルは、何ら総括を提出しえず、総括論争からも逃亡しようとするあり様だつた。革マルはわれわれの面前から姿をくらし、民青は地区民の挺子入れのもとにわれわれの目をかすめては学内登場を散発的に試みるだけであつた。スト実及び新入生の先進的分子は大正大闘争を保証してきたわれわれとの新たな統一戦線を形成すべく結集しつつある。

全都・全国の兄弟諸君!! われわれは大正大闘争の更なる飛躍をかちとるべく闘いを展開中である。しかし、われわれはすべてにおいて完全だったわけではない。総括論争の不充分さは、いったんは授業介入―教授追及の基本路線の正当性を認めておきながら、そうした闘争への取り組みを回避し、代議制的スト実の手離しの評価の延長に自治会主義への回帰を夢想する革マルの亜流乃至は残党の暗躍を許すという状況をもたらした。

三歩歩くと一切を忘れるにわとりにも等しいこうした輩には、再度の鉄槌を下して自らの無節操の非を骨身にしみて理解させてやる必要があるのだ。

われわれは、不拔の革命的統一戦線のもと、日和見主義者に対する断固とした内部階級闘争と当局、権力に対する追撃戦を展開するであろう。

右翼暴力職員の壁を

恒常的に突き崩し

立正大を南部労学底辺委運動

の拠点とせよ!

(七十二年立正大学)

立正大を根底から揺るがした七〇年立正大闘争は、六八年、六九年の全国学園闘争がロックアウト・シュビツ体制の前に敗北し、六九年安保敗北以降の後退局面にあって、支配階級が追撃戦として実質化した反戦派労働者への処分弾圧(レッドパージ)と学園における一学一斉学費値上げ攻撃をうけとめ、バリケードなきバリケード闘争として展開せしめたわれわれは、七〇年闘争が立正大右翼支配体制そのものを突き崩し、常に革命派の力によって資本主義的教育秩序そのものをマヒさせていくものとし、そしてその闘いが自らの攻撃的でダイナミックな展開を通して、われわれの側から地区に突出していき、附近の学園・工場・職場に闘いを波及することも追及した。だが、最高五〇名のゲバルト部隊を有したダイナミックな運動はその力の蓄積を一気に右翼セン滅として爆発する局面を二度まで持ちえたにもかかわらず、権力・当局の介入、暴力的圧殺の前に後退を余儀なくされた。

われわれは最も先頭に闘ってきた者として、①七〇年闘争の中で明確に組織された右翼職員―学内機動隊と、国家権力の臨戦体制、直接介入に象徴される学園ロックアウト・シュビツ体制のものを突破する権力闘争を展開すること。またそれを組織する中核的組織を構築しなければならぬ。②右翼職員・ガードマン粉砕、資本主義的教育秩序解体闘争を構築し貫徹するためには、学生の利害を統一的に象徴する現実的課題を軸に、個々の矛盾に対し闘いを追及する諸闘争の広汎な結集と、全体としてまたそれぞれが資本主義的教育秩序―授業・試験(単位・卒業)に対し、教官と学生という対立関係を踏まえ、計画的に様々な段階、戦術を駆使し闘い抜く中に初めて全学的流動化をかちとれること、その上にたって強固な武装部隊とそれを支える広汎な大衆のもとに、有利に右翼、職員、ガ

ドマン、国家権力に対する攻撃を恒常的に貫徹出来ること、③同時にその闘いを、工場職場反乱を追求する労働者本隊と結合させる運動として準備、計画化し、当初から実体的に、学生の独自任務、労働者との統一行動、労学の統一集団組織を作っていくなければならぬこと、以上の三点を七〇年立正大闘争、日大、東大共闘運動の教訓として、まさにわれわれの原点として七一年以降の闘いを展開して来た。

学館ロックアウトをめぐる

文団連運動の成果

七一年一月「暴力学生の温床云々」によって学生会館がロックアウトされ、それに続き七二年二月当局主催の「学館懇談会」をもつての御用運営委のデッチ上げ―学館開館策動に対し闘いを開始した。闘いは七〇年当時の旧活動家を中心とした文団連準備会による「懇談会」―御用運営委のデッチ上げ粉砕、体育会、民青の当局とのボス交粉砕闘争として克ち取っていった。と同時に、われわれは四月以降学館ロックアウトを全学的に暴露し、情宣し、当局と一定程度対峙していくものとして、文団連の結成を準備した。それは文団連運動の一定の展開の中に、当局の学生監視弾圧体制に対し、鋭く全存在をかけ非和解的に闘いぬく闘争体を準備し、文団連、クラスサークル等に根をもち、それらに支えられた運動実体を構築するものとして準備していった。

四月以降の闘いは、四・二四文団連結成、五・四から文団連議長の無期限学館泊り込みの開始、学生部追及、五・三一文団連集会(三〇〇名)、一年生の授業への介入の計画的貫徹、六・一六泊り込み拡大強化(一五名)、六・二二告示通告に対する反撃、六・二四

抗議集会(二〇〇名)、学生部、学長に対する追及を展開した。

この間の文団連結集軸を、①学館ロックアウト粉砕、②学館自主管理自主運営、③当局に対するサークルの届け出制粉砕、④右翼民青のボス交粉砕、⑤学館に関する団交要求、の五点とし文団連事務局と活動家という関係上に運動を展開してきた。われわれは文団連運動の成果をはっきり確認しなければならぬ。①泊り込み、泊り込み拡大強化、学生部追及等の徹底した闘争によって、当局の泊り込み妨害、「告示」「通告」体制をひきだした点、②それに対し、当初文団連運動として、サークル員、一般学生を結集させ、そして六・二四にあっては、二年学館解放行動委(準)その他サークル員以外の結集を克ち取ったこと。また一、二年を中心とした新しい部分を中心であること。③運動上において、学館ロックアウト、文団連に対する「告示」「通告」攻撃をめぐって、全学的問題として流動をつくりだした点。以上が確認できるだろう。だが限界として総括しなればならないことは、文団連運動として闘いを表出させ、その有効なつめが決定的に遅れ、焦点がづれ、運動上における全学的流動化をもつての学館問題をめぐる文団連運動の横への拡大、クラスゼミ等の主体的結集を定着化しえない点にあり、すなわち運動構造の一般の問題以上に、運動全体の質的転換をもつた拡大として克ちとれていない点にあることを主体的に総括しなければならぬ。

全学的規模での闘いを計画化せよ

われわれのロック・アウト・シュビツ体制打倒の闘いはようやく出発した段階にある。学内支配体制が、執行部への権力の集中、学生監視弾圧組織としての学生部の転換、その実力部隊―暴力職員の組

織化として定着し、個定化している。そして当局は、今だ四〇億円に及ぶ負債をかかえた慢性的火の車であることを平然と宣言している。それを学生に転化させることは七〇年学費値上げをみても自明の理である。

われわれは、前期文団連運動の上に立って、次なる主体的準備をしなければならぬ。前期の闘いが主体的意図とは別に自然成長的に流され、当局との対決の時期にそれを保証しうる明確な部隊が、未成熟であり、運動全体に流れるダイナミズムの未熟を克服しなければならぬ。その第一は全体会議の召請、はじめから形骸化した全学闘争組織でもない、明確な結集軸と運動実体と組織内容をもつこと。右翼暴力職員を包囲する運動を前期文団連運動の上に、クラスゼミに定着させるための準備を開始すること。第二にその闘いそのものが当局と闘う部分と、闘いを支える学生大衆との力関係をみきわめつつ進むこと。それは当然にも武装部隊としての質をもつことであり、強固な組織をつくることである。一つ一つの当局との対決のうちに武装を可能とする組織をつくっていかなければならぬ。それは当局に対して攻撃的性格を確認しえる部隊であること、またそれは闘争の発展に則した計画に武装対決を準備していくものになる。第三に九月以降は全学的につめの中に公然とした一切の運動を保証し統括する部隊の建設を克ち取らねばならぬ。

立正大闘争を労学底辺委員会

運動として定着させよ

全都・全国の労働者学生諸君!!

武藤・和田追放をめざし

クラス、サークルに

大衆闘争委員会を組織せよ!

(七三年明治学院大学)

全都・全国の同志兄弟たち!!

わが共産主義武装行動委員会の一貫した指導と闘いによって、二年有余に亘る明学大の闘争は、武藤・和田(院長・学長)追放を直接日程にのぼせた。七二年度前期闘争を叛旗・反帝学評の明学大闘争からの逃亡を尻目に単独で切り開いてきたわれわれは、六・二二職員スパイ活動の摘発を契機に攻勢の段階に突入し、九月前期試験粉砕をふまえて総力戦を準備している。

武藤・和田追放の総力戦は、かつてない程に大規模な闘争組織を全学的に創出するばかりではなく、当然教職員内部に良心的部分を反乱させ統一糾合する闘いになるだろう。

われわれはこの闘いを潮流化運動に合流する学園闘争の、掘り起こし、として、自らを統一戦線を工作する主体として打ち固めていく決意である。これはその報告とアピールである。

われわれは七〇年闘争の教訓にたち、学園での闘いを労学底辺委員会運動として展開してきた。それは、明学大の革命的学友諸君と共に、全通各局に対するピラ入りを一年以上に亘って推し進めてきたまさにその成果としてわれわれの存在を職制との攻防の中に、労働者の中に一定程度定着させ、労働者が学生に対しても偏見を突破し信頼を克ち取ってきた。まさにその運動はそれにとどまるものではない。

そして立正大二部においても、勤労学生内部にその位置を鮮明にし、労働問題研究会運動を提起してきた。

われわれは立正大が京浜工業地帯に位置していることを自覚し、労学底辺委員会運動―行動委員会運動の歴史的任務を担っていくことをも先進的労働者学生に宣言する。

一学費追撃戦とスパイ活動の摘発

全都・全国の兄弟!!

一・二四学園人民戦争以降、明学大当局―武藤・和田独裁は、高輪警察力の導入やガードマンの導入による弾圧が不可能であることを思い知らされるやいなや、四月武藤学院長の書簡を各学生団体の執行部へ配布した。それは院長がいわけの謝罪することによって離反した学生を懐柔しようとする学生分断攻撃であった。実質的にも、当局の学生無視による諸政策を巧みに正当化する内容であった。従って、闘う学友にとっては、武藤書簡粉砕の値上げの責任追及が追撃戦の合言葉にならなければならなかった。しかし、新学期の行事は、なし崩しの授業再開に拍車をかけ、闘う部分は、文連会を先頭に脱落していった。当然にも叛旗や反帝学評等カンパニア左翼も、自派の集会への動員というセクト主義的一本づりの対応に終始し前期闘争―追撃戦をネグリだした。二年有余にわたって唯一闘争を切り開く政治力と実践力をつちかかってきたわが共武行は、当局の目論見をはっきり実践の中で確定し、ともに闘う行動戦線を組織し、武藤書簡の犯罪性をクラス介入、教授追及を通して明確にしていた。それは同時に学外放逐を余儀なくされた和田が、学内復帰をねらって一部反動職員をスパイ活動―過激派狩りに組織しようとする策動に対する闘いへ発展する過程であった。

われわれが唯一闘った六月闘争(しかもこの闘い抜きには当局のなし崩しの居直りを許し、従って九月前期試験粉砕から現在へと打ち続く闘争の継続性は保証しえなかったであろう。)まさに闘争の展望を切り開く可能性は闘争を継続することの中にあることの証拠

でもあった。六月からの連続的全学集会は、無責任教授の学外逃亡を生みだしながら、かって高輪警察と密通のうわさや和田派とみられる反動職員を追及、自己批判要求へと発展していった。六・八、六・一三、一四、六・二二と教職員の連行↓追及というわれわれの人民裁判(全学集会)は、その正当性故に学友の結集を広げていった。そしてついに六月二三日、職員逮捕・連行のために庶務課、総務課に突入したわれわれは、そこで庶務課長の机からスパイ活動を裏付ける証拠物を発見したのである。一つは処分者の写真入り手配書であり、二つは単位未修得者のリストアップであり、三つ目は写真であった。当日学生に包囲されるようにしてグリーンホール前で追及された庶務課長宿崎は顔色を失い総務課黒田はにが虫をつぶした顔で沈黙した。結集した学生はこのスパイ活動に従事し、和田学外逃亡を支える尖兵二人に対し幾重にも取り囲み、証拠物品を手にし口々に「ひどいやつらだ」とさげび、罵倒しカバンでなぐったりしたのである。勿論、追及は連続化し、こうした和田一派の学生弾圧策動の攻撃は和田一派当局をして六月二六日全学休校↓七月一日早夏休み突入↓冷却期間による闘争の圧殺へと追いかけていった。

この教職員追及、スパイ事件の露呈の六月闘争の過程は反帝学評や叛旗反帝戦線をも闘争せざるをえない局面に追いこんだのである。武藤・和田体制打倒を掲げ、その仕方を知らない反帝学評にいたっては、文連とともに「一方的休校処置反対」と六月闘争との関連を欠落させ、アリバイ的に登場し、われわれの追及の前に限界を露呈したのである。

又、叛旗にいだっては、六・二三の高揚を目のあたりにしてあわてて乗っかろうとしたところを、われわれのメンバーからこの間の一つは警察力の導入であり、二つはガードマン等を雇う事であり、三つは学生による自主規制でありいずれの方法も失敗した事を述べられわれのメンバーに「銀ヘルは取締ることができない」「君らの事は分かった、もうそうした事はしないからいいじゃないか」と小声で言ったのである。

全都・全国の同志諸君!!

四年間に亘る明学大闘争の力強い前進は、誰の目にもかくしきれない全共闘運動の敗北をわが共武行が明学大のこの地でくい止め、責任ある指導と実践の成果が如実に示されている。

和田一派は一年前三・一七闘争直前に白金通信で銀ヘルをたたき壊すと豪語した時とうって変わり半ば闘い破れた敗軍の将さながらなのである。

全都・全国の同志兄弟!!

敵の弾圧力のマヒは、味方に限りない闘いへの自信と、学友の決起を促す。新入生をして「全共闘運動がまだあるなんて」と言わせるほど、明学大は反乱し続けている。六月〜九月攻勢の事態は武藤・和田独裁の動揺にわれわれが最後の位撃を加えるかいなかにあるのだ。

攻勢とその決着はわが手にあり、総力戦とは、われわれが六月〜九月攻勢によってつくりだした(どこの学園にこんな事があるろうか!!)地平に最後の仕上げをすることであり、和田一派追放に向けて学内諸戦線を統一し糾合することには他ならない。わが明学班の兄弟は精気ハッラツとこの光栄ある地平を担いきるであろう。そしてわれわれは、この反乱の地平を波及させる決意を固めている。全国の学友と会う日も近い。

逃亡を一喝され引きあげざるをえなかった。その後、自己批判によりかろうじて戦線復帰を許されるあり様であった。

二九月闘争から武藤・和田追放

の総力戦へ

全都・全国の同志たち!!

九月明け、連日におたる行動戦線・社闘委・叛旗によって教職員が追及され、前期試験(九月一六日から)は各所で粉砕されていた。休み中、白金通信に掲載された当局の非暴力宣言(教授会決議)は、火に油を注ぐ結果となった。

試験中、九月一八日試験粉砕と平行して職員二〇数名のグリーンホール前追及が開始された。学内秩序は崩れ、われわれの職員追及は学内事務・業務までマヒさせたのである。この日、和田は自らの最後のよりどころである職員に対する追及の連続化に恐怖し、グリーンホール前に自主的に現われたのである。更に追及は激しくなり数百の学生が結集しはじめた。

広汎な学生を前に和田もわれわれに對抗し、学生の説得に必死になった。学生の追及の前に職員が自ら離反していくことに対して「追及するなら私にしてくれ」と反動職員をかばい、同時に自分にピンチなことを言わせないようにとりつくろおうとしたのである。

和田は、鉄面皮にも話合いを強調し、自分が学園の事をどれほど考えているかを強調した。学生から、それらの強調点に対する反論が具体的事実をもとになされ、武藤・和田独裁が学生を無視し、弾圧を繰り返した事が強調され、今も学生ばかりではなく当局内部でも孤立している事が明らかにされた。和田自身も学生を前に「銀ヘルに泣きを入れるかのように、学生弾圧には三つの方法がある」

第五部

特別寄稿

首都圏行動戦線連合結成

基調報告

結成準備会 七三年六月

首都圏行動戦線連合

結集された全ての同志諸君!!

首都圏行動戦線連合準備会より、固い連帯をこめて、行動戦線連合の闘いの方向と基調を提起したいと思う。

昨年、われわれは「工場占拠ソビエト蜂起」へ向けた政治集会を貫徹し、六八〜七〇年の階級闘争の高揚の教訓と、その敗北を総括し「工場占拠ゼネストソビエト蜂起へ向けた陣型の拡大、労働者階級との結合をより強固に押しすすめよ!!」という方向性を提起した。事態はまさにわれわれの提起した内容の正しさを遺憾なく示している。まさに、現在の階級情勢が明確に示しているように

① 合理化、インフレ収奪攻撃が支配階級の攻撃の軸として進行しており、

② それに対する闘いが、公企体（国鉄、全通）における、組織破壊に対する攻防戦として焦点になっていること。

③ 一方、五〇年代において既に労働者の戦闘力を粉砕し（これが以降の経済闘争の停滞のみならず全社会的高揚を妨げる基本的原因であった）、同盟企業一体となった支配を確立した民間基幹産業においての、合理化に対する攻防戦が再開されつつあり

④ 公企体における反合闘争もそうした民間大工場の反乱闘争との結合を追求しない限り、ダイナミックな展開もありえない。

⑤ 又、七〇年以降その限界を示し続けてきた新左翼諸派は、その街頭カンパニア結集の先細りと共に、ますます自らの位置を後退させてきている。

⑥ 権力・支配階級に対する人民の不満・抵抗はその中で社・共に議会的に集約され（総選挙での社共の進出）ている。

⑦ しかし、それは、日帝の攻撃の深化↓ 自民党の結集力の低下を、闘争へ向けてとりわけ、職場における合理化・労働強化に対する闘争に向けて組織したのではなく、この問題―非妥協的な合理化攻撃―をさけて―屈服して、その外側で吸収したものにすぎない。

⑧ その意味で現在の「執行権力と社共人民戦線」の対決は「擬制の対決」である。

⑨ 執行権力は、そうした労働者階級人民の不満と抵抗をより強力に押さえこむために、自らの独裁を強化せんとしている。

⑩ それは、戦後の「民主主義体制」の手直しによって、階級闘争の激化を押しさえこんできた執行権力が、本格的な再編（法的なものも含めて）をなさんとしていることを意味する。

小選挙区制攻撃はその意味で、彼らなりの危機感を背景に突破口を形成しようとしたものである。

それを粉砕しぬくのは、まさに民間大企業（基幹）を中心とし

た、労働者階級の闘争を掘りおこし、権力闘争として発展させていくことしかない。

階級闘争を権力闘争として前進させる潮流の登場が一刻も早く問われている。

(我々の闘いの前進)

われわれはこの一年間の闘いにおいて、真に階級闘争を前進させるのはわれわれしかありえないことを、組織的にも運動的にも明らかにしてきた。

われわれはまず民間大工場において、世界最強の労務管理体制に対決し、社共・新左翼が蜂起した労働者階級の主力軍に民間大工場労働者の組織化を追求してきただろう。

まさにわれわれは、革命闘争を語る諸党派が、同盟支配の強力さゆえに日和ってきた民間大工業における闘争こそが七〇年闘争の限界を突破し、革命的権力闘争の中心環であることをしっかり踏まえ工場工作者の配置に占拠ゼネストの陣型の構築・反職制の職場闘争の掘りおこし、その展開を工場占拠ゼネストに労働者総武装(二重権力)に武装蜂起へ向けて闘い抜いてきたのである。

立川スプリングの闘争はまさに、そうした意味で新たな火花を階級闘争に打ちこんだ。会社一組合一体となった合理化攻撃を職場大衆を組織して粉碎し、なおかつ、春闘においても自動車労連の弾圧にもかかわらず、満額回答をかちとるまで日に日に労働者の戦闘力を掘りおこしている。更に組合一会社の「害虫」行動委を粉碎しよう!!を合言葉とした、スパイの送りこみ、下宿への無断侵入、職制のいやがらせ、ピラミッドの妨害等の攻撃と対決し、地区的結合を強化させつつ闘いを堅持し発展させている。

それでは学生戦線における現状はどうか。

われわれは、七〇年以降、新左翼諸派が街頭カンパニアに逃亡していくなかであって、唯一全共闘運動を学園反乱闘争として継承し発展させてきた。その闘争はロックアウト・アウシュビッツ体制粉碎闘争は地区底辺委運動、工場工作者創出等と結合して、学園反乱闘争の後退をくい止め、全共闘の学園主義を克服した新たな質の学園闘争を構築してきたであろう。

我々の学園闘争は、学園一般ではなく、労働者階級の闘いを中心にした闘いとして闘い抜いてきた。だからこそ、我々は機動隊↓ロックアウト↓検門・「正常化」に屈服せずそれを打ち破ってきた。学園流動制圧戦に学園人民戦争がそれである。一方、新左翼はそうした闘争を一切放棄し、旧来の、「街頭カンパニア」その「ブル」としての学園」という運動構造に立脚し、アリバイ的に「反帝闘争」を展開することによりますます先細りとなっている。それは権力の分析を欠落させた組織温存主義か、又は根拠地・主力軍の設定ぬきのマンガの蜂起として表現されているだろう。彼らのいう反帝闘争は戦略ぬきのアリバイカンパニアであり、戦後階級闘争の過程における反帝闘争の推移と合理化との関係を欠落させた学生運動のみに依拠したものでしかない。反帝闘争が元来権力マヒとその波及として権力闘争の中に位置付けられるならば現在の情勢において波及させるべき労働者階級の戦闘力の復活との連関で考えなければならぬことは明らかである。

われわれは、その視点を踏まえて反帝闘争を位置付け活性化させていかなければならないだろう。学園においていうならば、学生大衆の徹底した掘りおこしとその闘争への動員に学園管理体制との対決→その恒常化、地区的拡大として展開されなければならない、全国

このような闘いはまさに社・共・新左翼の階級闘争の主戦場からの逃亡に対するわれわれの回答に他ならない。

又、公企体戦線におけるわれわれの闘いも、われわれの路線の正しさを示しているだろう。公企体戦線における反合理化闘争が国鉄・全通を中心に闘われ、社会的焦点を形成した今春闘において、長期にわたる反合・反マル生闘争の蓄積のうえにたつ交通ゼネストは、その性格からして支配階級に打撃を与え、なおかつ他の労働者に対する強烈なつきつけとなったのである。われわれの闘いはまさにその中において川崎郵便局を先頭に長期にわたる反職制闘争の一環として徹底的に闘い抜いてきた。しかもそれだけではない。今春闘にみられた反合・反マル生闘争の展開、とりわけ国鉄にみられた限界である職能組合主義を突破し、民間↓電々↓郵便・国鉄という形で貫徹されてきている支配階級の合理化・職場戦闘力の圧殺攻撃に歯止めをかけるだけにとどまらず、それを郵便・国鉄↓電々↓民間という形で逆転させていく戦略的方向をもって、地区行動委連合の組織的力を背景に地区的結合の拡大をうみだしている。

こうした階級闘争の主力軍に労働者階級における闘いの前進は各地区行動委連合の首都圏的結合である首都圏行動委連合をうみだしている。

わが行動戦線連合は現在の階級闘争の発展はまさにこうした労働者階級の戦闘力の掘りおこしに全てがかかっていることを確認し、首行連への結集を強化し、全力を挙げて労働者階級との結合を推進しなければならぬ。

まさに革命の主力軍の大規模な掘りおこしに動員なくしては革命の勝利はないのである。

的に言うならば、革命的権力闘争の全国化に潮流化とそのもとの反帝闘争の復活に反帝闘争の全人民的展開であろう。

(闘いの実践をふまえ、)

統一戦線に切り込め)

全ての同志諸君!!

全都全国の闘う兄弟たち!!

われわれのこの間の闘いは学園反乱・地区底辺委運動に労働者階級との真の結合を追求する闘いとしてあった。新左翼諸潮流が学生運動主義とスケジュール、カンパニア闘争の中で沈滞していくのに対し、真に学園闘争勝利の道を権力闘争として労働者階級の闘いと固く結合して前進させてきただろう。われわれは本日その成果を首都圏行動戦線連合として結実させた。

われわれの任務は、学園闘争を権力闘争の一環として把え、労働者階級と結合して更に雄々しく前進させることである。

それはまず第一に、より一層学園反乱闘争の展開を大衆的に行い更により多くの兄弟を学園秩序に対決する運動に組織することである。これはわれわれのロック粉砕闘争の血の教訓をわがものとし、更に多様な形での大衆闘争組織をつくりあげてことをわれわれに要求する。

第二に、そうした学園闘争を地区の労働者の闘いと内的にしっかりと結びつけ、労働者階級の権力闘争との合流と発展をかちとるところである。

第三に、反帝闘争の真の全人民的展開に向けて運動を開始することである。

これはわれわれの運動の正当性と権力闘争としての前進(運動的

にも組織的にも)を背景に、強固な組織性をもって、新左翼の悪無限的な学生運動主義を解体し、反帝闘争を労働者階級の戦闘力の復活を現在の環として革命的権力闘争へ向けて再編することである。第四に、第三の任務と連関して革命的権力闘争の潮流の全国化、学園における行動戦線の全国化をかちとることである。

これはまさに一刻も早く真の革命的潮流を創出し、全国の多くの革命的兄弟をその下に結集し、日本帝国主義打倒の大道を切り開くことを意味し、日本階級闘争の死活がかかっている。

大胆な統一戦線の形成と党派闘争の貫徹によって、現在の「擬制の対決」を突破し、真の対決(工場占拠ゼネスト)へ向けた陣型を構築しなければならぬ。

全ての同志諸君!!

より強固に行動戦線に結集し、困難を恐れず、勝利に向かって前進しよう!!

蜂起戦争派批判

蜂起戦争派の破産と

日本革命の権力問題

岡崎 勝

(一) 赤軍路線を追求実践した連合赤軍

連合赤軍は、浅間山荘銃撃戦と兵士の大量処刑をもって潰滅した。それは、連合赤軍の革命路線―武装闘争による日本革命の達成という戦略の破産であり、「統の時代」を切り開く緒戦での敗北である。武装闘争によって日本階級闘争が勝利に到るとする蜂起戦争派は混乱の渦に投げ込まれた。我々は、この蜂起戦争派に最後の引導を渡さなければならぬ。

赤軍古参兵、蜂起戦争派の群小グループ、応援団から、「連合赤軍事件」を巡って、さまざまな見解、自己批判が提出されてきた。

その一つに、「政治に軍事を優先させた」との批判がある。だがこれは、問題の根本が赤軍派の路線そのものの破産にあることを承認し、蜂起戦争派の看板をおろさずには口にするのを許されない性格の批判と言わざるをえない。何故なら、赤軍の党派性こそ「前段階武装蜂起」を「党一軍への建設」をめざし実践化することであり、そのため新たな武器を手にすることにあつたからである。したがって、森ら連合赤軍の指導部は、当初からの赤軍の政治方針―前段階武装蜂起路線に忠実であつたと言わざるをえない。それは、山岳アジト建設―革命軍の訓練―都市への武装進攻・前段階武装蜂起情勢の形成・「左翼諸グループ及労働者階級人民の決起」を期待する方針に他ならなかつたろう。

だから、こうした連合赤軍の方針に対して「政治に軍事を優先させた」という「軍事主義」という批判は、蜂起戦争派の攻撃性・党派性を自ら否定する最大のものである。

「今回の問題について」(査証63)で赤軍議長であつた塩見は、「この根本問題は、思想・政治路線上の現実のプロレタリア人民の状況とは無関係なプロレタリア人民なき、即時社会主義実現路線や同様な反米愛国路線の主観主義、盲動主義的性格です。無政府的行き当りばつたりの盲動主義路線にあり、「統一戦線を否定し」「経済闘争等個別闘争の切り捨てや」(文引用)と連合赤軍の方針を批判している。それは、赤軍形成の最大責任者が、「森よ/銃撃戦による前段階武装蜂起などは主観主義だ。政治状況をしっかり見よ/我々は、プロレタリア人民からかけ離れていくだけだ。お前さん達は、いくらなんでも無謀だよ/」と言っていることを意味してい

る。

そればかりではない。更にそのすぐあとには、自らの赤軍の関りを総括的に述べ「我々は、真の革命、政治路線を確立し切れぬまま、安粉砕の個別闘争の政治路線の下、六九年前峰をもって革命戦争を開始せんとしたが、権力闘争―武装闘争に見合い、これを導く革命政治路線の不在、それ故に、敵階級に打ち破られ敗北していった。」と。

捕虜になった軍人は、八割がただめになるということにもれず、塩見も虫のよいことを言っている。塩見が言い切るように、赤軍は、「政治路線」がなかったのだらうか。否である。

赤軍の登場は、日本階級闘争が、東大占拠闘争の敵権力、支配階級の総力を挙げた封鎖解除攻撃、四・二八中央権力闘争の敗北という敗走的局面を目前にして、自然発生的要因・防衛的要素から決別し、攻撃型階級闘争を主張し、そのための建党・建軍路線を、ブント党内闘争―赤軍の形成の過程を通して培ってきたのであり、それは、否定しがたい事実である。勿論、それが多分に思いつきのな代物にしても。

全国全共闘に武装突入し、政治的影響力を行使した赤軍は、大菩薩峠軍事訓練―首相官邸占拠、前段階武装蜂起情勢の創出が、緊急な政治路線であるとしていたのである。

従って塩見の「総括」は、赤軍派の総路線（らしきもの）の全面的破産を自ら宣言することぬきには許されぬものとなる。塩見の犯罪性は、「前段階蜂起路線」の破産の確認をネグったまま、「人民民主主義革命路線」に乗り移ったことに求めなければならない。しかも、議長の変り身の早さについていけず、最初の路線を貫徹しようとして壊滅させられた「部下」をあれこれあげつらうとは言語

道断の「指導者」ではないか。

周知のように「福ちゃん荘」は、敵権力の早期襲撃によって全員が捕虜となり、雑軍であったこの蜂起部隊は、壊滅してしまつたのである。このことから明らかに、赤軍結成以来、組織活動に参加していた森にとって、蜂起部隊と軍事行動によって中央官庁街への進撃は、前段階武装蜂起路線への行動過程であった。勿論、赤軍は当初から、蜂起の具体的計画、実行準備を欠いていて、「公開論争」で公然と蜂起するか否かを争っていたという合法ボケを演じていた。しかも、この兵士の組織化もデタラメであり、逃亡したり敵権力に簡単に解体されてしまつたものであった。この組織基準のデタラメさ（秘密結集などは、こうした矛盾を陰へいするだけであつた。）を、連合赤軍は当然にも引きうけており、しかも必然的に生じる内部矛盾をどう喝だけでなく、本気に「動揺分子」の抹殺として実行した。

このことは、七〇年末連合赤軍結成と壊滅までの過程が、資金調達、武器の調達を主要な方針として、銃、火器を使用した武装闘争路線の延長線上にその政治的位置があることがわかる。それは、「赤軍」も「一八ページ（一）前段階武装蜂起へのジグザグと〇〇武装占拠の決断（A）大菩薩峠の敗北」の箇所をべつとついてもはっきりする。

即ち、「共産主義者・党派にとっては、一般的政治危機の自己目的的創出などあるのではなく、『権力問題』『武装』『蜂起貫徹』としてのみ展開、追及されていかねばならない。故に佐藤訪米阻止安粉砕戦の戦場は、『羽田』ではなく『霞ヶ関』であり、『〇〇武装占拠闘争』としてのみ追及されるのが当然である。」（本文引用）言々と。我々は、それを追及し、「大菩薩峠の全員逮捕をもって

敗北した。そして、その大菩薩峠の全員逮捕としてあらわれた敗北の根拠は、我々の組織の未成熟に求められねばならない。『蜂起は技術である。』以上、方針の設定から全員逮捕に至る全過程の技術問題を第一に点検しなければならぬ。……「それをなし切れなかったことは、その技術問題まで含めて貫徹しうる主体、組織に我々がなりきれしていなかったことを総括しなければならぬ。」（引用）と。

ここでは、前段階蜂起路線そのものの批判や修正等にあるのではなく、それを担う軍隊―中央軍の建設の仕方への不備についての総括であり、路線は正しく、その実践上技術上に限界があると指摘しているだけにすぎない。そしてその限界の克服は、実践と組織建設の過程を通ず以外にないと結論づけているのである。

森ら連合赤軍の指導部は、大菩薩峠の政治的意図に鋭く示されるように、国家権力と直接的に戦闘し、権力中枢霞ヶ関を武装占拠する政治方針を忠実に信じていたのである。

ところが、当の塩見は、赤軍議長を名のりながら、先に引用したように坊主ざんげの清算主義を決め込んでいる。塩見よ、「政治路線を確立し切れぬまま」終つたのは、まさに赤軍兵士一般の責任のみならず最大の責任はその指導部にあることは当然ではないか。「軍事、統一戦線、党建設の全くの曖昧性」も明らかである。それは、赤軍の発生そのものからして当然と言えれば当然のことである。そればかりではない。

塩見は、「労働者階級は、この攻撃と一定の限界性に対して、敵支配階級を孤立させ、他階級、他階層を統合すべく、今すぐ直接の社会主義の実現をめざすのではなく、全人民を統合する『反戦、反ファッショ、生活危機突破、人民民主主義革命』を提起しなければ

ならない。」（前掲箇所引用）と、又々思いつきとしか言ひようのない方針を提起している。

塩見の政治的意図は歴然としている。即ち「今すぐ社会主義の実現をめざす」「前段階武装蜂起」という赤軍の「党派性」を捨て、かつて赤軍派が「自然発生的」、「経済主義」と簡単に切り捨てた「反戦、反ファッショ、生活危機突破、人民民主主義革命」という人民の即時的要求・危機感に依拠するという転換をなすべく、行方不明である。そして、そうした「社会主義実現」と人民の要求する関連を「その核心点は、政治的軍事的闘いの対象を、プロ人民の反戦、反ファッショ、反生活破壊の要求に直結する米帝、自衛隊、警察と金融資本や大独占、悪質官僚に絞る。」となる。

これは、後述する「武装闘争の孤立」の限界として、連合赤軍の破産をとらえ、俗流大衆路線へとなくすに溶解する部分と同類になる。この俗流大衆路線は、武装闘争を棚上げにし、あるいは、それにかわる戦略を欠いた大衆―人民一般への埋没である。しかも、彼は、その明らかにした「人民の敵」に対していかに、どのようにして闘うかは、黙して語らない。彼が述べる「七一年ゲリラ型」の闘い方か（注）それは、せいぜい国家権力の集中攻撃を受けて壊滅する玉砕テロでしかないであらう。

彼（蜂起戦争派総体に共通して言える）にあっては、人民が常に人民であり、世界革命の出発地となる日本革命が、労働者階級を主力軍としており、したがって、「人民一般」ではなく、労働者階級の革命闘争の出発点である工場闘争の革命的展開と推進こそプロレタリア革命の鍵が秘められていることに気付かない。そうであれば、全共闘運動が、労働者階級本隊への反乱を不十分にした限界や、なによりも前衛党不在が、そうした反乱の全体性持続性を

保障する工場党建設として具体化しなければならなかったことへの反省に帰着することに気づかないのである。

※注 この七一年ゲリラ戦は、「七一年ゲリラ戦を闘い抜いた。」

(前掲引用)と厚かましく闘争の継承と総括を意味付ける塩見とは正反対に、赤軍当初の党派性と政治路線の貫徹を「武器のエスカレート」によって遂行するための一連の戦いであったことは明らかである。それは、現局面で、「反戦、反ファッショ、生活危機突破、人民民主主義革命」なる赤軍結成当初の党派性の裏返しを主張する部分とは無縁な実践である。

以上、塩見の連合赤軍への批判と見解によって、彼の政治的本質を見ることが出来る。それは、「前段階武装蜂起路線」―全共闘運動の眼前に立ちだかった国家権力、支配階級を即時に打倒しようとする方針―という主観主義的方针と、人民の即時的要求に根ざした「人民民主主義」路線と俗流大衆路線の両極端―主観主義の両極としてあること。

何もこれは、赤軍―連合赤軍に限ったことではない。それは、あまりにも六全協以前の日本共産党の過程に類似している。

戦後の労働者階級の生産管理闘争を含む工場占拠・ストライキの高揚を無為無策で敗北せしめ、したがってレッドパージ攻撃を許し、あわてふためいた五〇年当初の極左路線(中国革命の勝利と劉少奇テーゼの模倣)とその敗北を自ら招来させた。それは、その裏返しとしての、いわゆる俗流大衆路線に至り、六全協を通して「民主革命」路線としての今日の共産党の第一歩となった。

そればかりではない。

こうした左右の日和見を明らかにしている主体の見解が、塩見を始め、獄中、外の一部の諸君によって、あたかも政治的組織の実体

があるごとく粉飾されて提出されていることであり、明らかになつた蜂起戦争派崩壊の宣言をなしくずし的に取り繕い、転換させていくことに他ならない。

今一度繰り返して強調しておけば、赤軍派は、六八―六九年の日本階級闘争―全共闘運動の意義と限界から学ぶことや、日本人民の主力としての労働者階級の具体的闘争から学ぶことから出発することとは無縁であった。したがって、この間の彼らの理論的・実践的教訓の手直しでは、総括しきれないのであり、「蜂起―世界革命戦争」の思いつきの方針によってではなく、今一度根底から戦略理論を把えかえさなければならぬ。

それは、全共闘運動を主要な運動とする六八―六九年の安保階級闘争から学び取る―世界的には、フランス五月や六九年イタリアの底辺運動―という総括基準をまず明確にする必要があるだろう。

この作業に着手し、七〇年代をソビエト運動―権力闘争として開始した我々と共に前進する第一歩は、赤軍―連赤―蜂起戦争派の立脚点の観念性と、その政治路線の誤りという事実認識から出発しなければならぬ。

我々は、赤軍議長塩見の現在のな政治内容、主張点を引用し、赤軍と連合赤軍が一筋の政治路線として結びついていることを見た。しかも、この政治路線―蜂起戦争路線が、国家権力の集中弾圧下で兵士の粛清という内部からの解体を含みつつ壊滅したことをはっきり確認しなければならぬ。

それは、六七年以降の街頭実力闘争の延長線上に武装蜂起を夢想する路線、国家権力―暴力装置への直接攻撃を、ゲリラ戦、バルチザン戦として連続的に展開することによって革命戦争の勝利、革命軍の建設に至るといふ蜂起戦争派の夢の終焉である。

がこなせるようにするなら事態は救える。」としている。

そして、自分達は、赤軍形成の当初の形態として、「三種の軍隊〔中央軍、地方軍、民兵軍〕をめざすものとして」中央R4四人、東京、千葉、神奈川県地方に二十名たらず、これに、反戦全共闘の部隊という構造で三種となっていたと主張し、「大菩薩峠の総括と称して、ある同志が、「ゲリラの一元論」を主張した。」と。

上野は、こうした一元論的組織統合にまず共産主義的指導の欠如を指摘し、同志殺しの根拠を挙げているのである。しかも、内容的には、「一段下位の軍種に配置し、そこでの活動を通じて自発的にある基準がこなせるようにするなら」とあるように、当然にも「ある基準」がいかなる政治任務を意味するのか不明確になっており具体性を完全に欠落させている。

上野の連合赤軍批判の一つであるこのような指摘は、「武装闘争」を但う地下正規軍建設から生み出された総括点である。

だが彼らの正規軍は、「組織された暴力」から出発していることからわかるように、つまるところ、「自ら人民を組織する」という点を欠いた単なる戦闘員という「職業軍人」「雇われ兵」とさしてかわらない水準なのである。したがって政治の不充分性は連合赤軍とは限らず、赤軍からそうであった。蜂起戦争派の諸君が、単純に模倣せんとした中国、ヴェトナムの教訓を示しながら、革命の正規軍とブルジョア軍隊―職業軍人との相違を明らかにし、「ゴルゴ13」をも礼賛しかねない彼らの革命軍規定を刺さなければならぬ。

とりわけ上野氏のように、最初から三種の軍隊の萌芽が、地下、秘密的に存在し、(どこで政治活動をし、訓練するのか?)それが、「ある基準をこなすこと」によって、成長すると真面目に思い込ま

確かに、赤軍の登場と連合赤軍の実践は、街頭実力闘争の中核組織として形成された一日党派軍団とは区別されて、戦略次元での政治的地位を実現する軍事組織を実践上に登場させようと試みた。赤軍の前峰敗北の免括から導き出された「地下正規軍建設組織」という主張がそれに他ならぬ。

(二) 武装闘争―地下正規軍批判

確かに、赤軍の登場と連合赤軍の実践は、街頭実力闘争の中核組織として形成された一日党派軍団とは区別されて、戦略次元での政治的地位を実現する軍事組織を実践上に登場させようと試みた。赤軍の前峰敗北の免括から導き出された「地下正規軍建設組織」という主張がそれに他ならぬ。

上野勝輝は、連合赤軍の「同志殺しの根拠」の一つに「三種の軍隊建設」、それに基づく「共産主義的指導の意識性が欠如していた問題」を掲げている。「同志殺しの理由を森の自供というブル新で見ると、日常活動態度を革命的でないと判断し、自己批判を迫り、この批判を受け入れぬ者がリンチを受け、それによって死んだというものである。」

「これは、兵士の人格、資質に関する問題である。「一元論」の立場から見ると、もし服務規律の基準に合格しないものは、ムリヤリその基準におしとどめるか、又、切り捨てるしかない。これが誤りなのである。ゲリラ戦士が天から降ってくるわけがなく、徐々に成長するものである以上、成長の度合に応じて兵士を「三種の軍隊」に配置するならば事態は救われる。」(序章 8 公開論争、上野勝輝論文より抜粋引用)として、兵士の中で、訓練が充分でないもの、ついて行けない者は、「脱落者の烙印を押すのではなく、一段下位の軍種に配置し、そこでの活動を通じて自発的にある基準

れてはこまるからである。

そもそも正規軍なるものは、軍事・政治・生産を組織する暴力として労働者階級を中軸とした大衆工作の過程を通して始めて正規軍としての資質を獲得するものである。今日、ポー・グエン・ザップが主張し、ヴェトナム・インドシナで展開されている人民戦争を担っている三種の軍隊は、三〇年間にわたる解放闘争を通して建設され、今日の成長と実力を克ち得たことを見なければならぬ。

しかも、その出発は、ヴェトナム・インドシナの社会条件・敵軍力の配置をふまえて、一九四四年十二月二十二日、中国国境に近いタンチャオで武装宣伝隊として遊撃戦をやりやすい組織型態として誕生した。

この点に関してザップは、中国人民解放軍とくらべてヴェトナムの経験を説明する時、「中国が列強の半植民地であったのに対してヴェトナムがフランスの植民地であり（一八六二—一九四五年の八〇余年間にわたる）、とりわけ一九四〇—四五年までは、いわゆる「仏印平和進駐」に始まる日本ファシズムとフランス植民地主義の二重支配の時代であり、さらにそのうち、一九四五年三月九日の日本軍クーデター（三・九事件）以降は、フランスが「敵の敵」としてヴェトナムの側に立ち、ヴェトナム人民は、日本ファシズムの単独支配に抵抗して四五年の「八月革命」に勝利したこと。」を指摘している。（人民の戦争・人民の軍隊）

すなわち、人民解放軍—三種の軍隊建設の出発は、日本とフランスの二重支配下において、農民—人民に対する武装宣伝隊として開始された。しかも「宣伝工作隊」という名が示すように、「敵権力の部分に対し、人民を動員し、セン滅し、広汎な人民を解放勢力に組織する」遊撃戦を主要な戦闘方法としていたのである。こうした

「農民に結びつき、工作—組織し、敵の部分の戦場に有利に引きつけ、叩く。」ことを「兵士の活動基準」として身につけていたのである。

又、中国に於いても、「中国の赤色政権は何故存在することができるか」（毛沢東）で明らかのように、（イ）国土が広く半植民地であり、（ロ）軍閥が相争い、（ハ）国内に単一の支配権力が存在しないという客観的条件と、（ニ）広汎な不安定な農民の存在という組織的主体的条件によって、いくつかの赤色根拠地を背景に、赤軍は、各地の農民蜂起・都市攻略戦に取り組み、勢力を誇示した。だがそれは、帝国主義列強の援助を背景とする国民党の必死の追撃戦によって長征の時代に入り、その後、陝西省延安の中心に根拠地を作り、ここを抗日根拠地として抗日戦争を全国的に展開したのである。しかも、この抗日戦争は、兵士の政治教育を強化し、従来からの赤軍組織を党組織を含めて再編し、「宣伝工作隊」として、全国各地に配置し、多様な抗日根拠地を建設した。この「宣伝工作隊」こそ、日本帝国主義侵略軍の内戦・外戦にわたって遊撃戦を繰り広げ、農民・人民を組織し、その試練を通して「政治、生産、軍事を組織する工作者」としての人民解放軍の中核部隊として成長していったのである。

上野を含む「建軍武装闘争の堅持」を主張する部分は、中国やベトナムの解放闘争、それを担った組織を模倣しようとしつつ、その本質的意義を理解できずに、日本の社会的条件—支配構造、国家権力の分析、革命の主力軍の設定—を無視し、稚拙なあてはめを行っているのである。

例えば、毛沢東は、中国共産党内部のコミンテルン指導部に対抗しながら独自の革命理論を打ち立てた。「中国社会各階級の分析」

テーゼが、上野が今尚大事にしている「地下軍隊建設」である。

「序章」を始めとする上野の文章は、「地下正規軍」が、いかなる戦略的任務を負っているのか、あるいは、日常活動において何を果たすのか、「ある基準」とは、具体的にいかなる任務を指すのか全然判らないのである。

赤軍及京浜安保の獄中幹部から政治抜き軍事路線として批判された連合赤軍は、M作戦によって蓄積された資金と銃奪取によって手に入れた武器によって、内部対立を経て、「山岳根拠地形成—都市攻撃—」を計画し、部隊の集結と訓練を実現しようとしたのではなかったか。しかも、国家権力・公安警察の集中弾圧下で、革命戦線・支援組織と分断され、包囲され、その重圧の中で内部対立、疑心暗鬼に陥り、脱落者及批判グループへの肅清への道を巡ったのではなかったか。それでも彼は、現在でも、中央集権的、全国的に組織された日本帝国主義国家権力が「地下正規軍」の突発的ゲリラによって、一歩一歩崩され革命前夜と勝利の暁を手に入れると考えているのだろうか？帝国主義国家権力の弾圧力をことごとく打ち破る同時多発的且つ連続的都市ゲリラ戦が展開され、「人民一般」が勇んで大規模にゲリラ兵士に変身する条件が存在すると考えているのだろうか。

事実、その逆である。「武装闘争を押し進めれば押し進める程人民から浮きあがり、権力の集中弾圧を加え孤立化し、政治的には後退させられた。」（赤軍メンバーの手紙）のではなかったのか。

このことは、日本階級闘争の政治路線—日本革命の戦略が、武装闘争の道ではないこと、したがって武装闘争を開始すれば、「政治」が当然にも、欠落し、「軍事技術」が、経験主義的に問われるに

（一九二六・三）「湖南省農民運動の視察報告」（一九二七・三）「我々の経済政策」（一九三四）等。とりわけ「中国の赤色政権はなぜ存在することができるか」（一九二六）では、中国革命が、プロレタリアートに指導され、農民を主力軍としていること、（革命の主力軍の設定）革命の性格が「反帝、反封建、土地革命」であること。いくつかの小さな赤色政権地域が、周囲を白色政権にとりかこまれながら、長期にわたって存在していること。しかもその条件は、①経済的におくれた半植民地での帝国主義の間接支配に基づく白色政権間の争い。②全国の革命情勢の発展③相当の力を持つ正規の赤軍の存在、④共産党の組織が強力であることを示した。これら一連の中国の階級配置の分析、権力分析と革命の性格、主力軍の設定と解放闘争の解明こそ、毛沢東が長征途中、一九三五年一月「遵義会議」で、党の指導権を確立する直接的前提となっているのである。またこの一連の「中国社会の分析、革命の性格と方法」から、土地革命を通じた農村根拠地（解放区）と赤軍による革命戦争路線が実践されたのである。

かかる農村根拠地の拡大を軸とした革命戦争—武装闘争による社会革命の条件という中国と日本の革命の条件と性格の相違を、故意か無意識にか不明確にしているところに、蜂起戦争派の致命的限界が存在している。こうした点は、武装闘争—建軍だけではなく、蜂起戦争に組織する対象が革命の主力軍の解明とその組織化の展望を欠落させた「人民一般」におかれて点にもあらわれてくる。

毛沢東が「戦争と戦略問題」で明らかにしているように、発達した資本主義国—日本における階級闘争では、蜂起戦争—ゲリラ戦争から闘いを開始することは誤りなのである。しかも、中国のように赤色根拠地を背景に公然と赤軍が存在できないことから提出された

すぎなくなるのだ。

このことは、銃撃戦―武装闘争を旗じるしとして結集したメンバーが結局、実際やろうとしたら少数となったこと、連合赤軍兵士の浅間山荘の戦闘を見て、「彼らは、銃を本当につかった。」とショックを受けたりしていることにも示されよう。

武装闘争を担う地下の秘密的な結集は、当然にも運動・活動を通して鍛えられるという過程が欠落し、「決意性」が基準とならざるを得ない。しかもその決意性は、武闘をするか否かが分岐を成すのである。

これらの点への傾斜は、結局のところ中国やベトナムの教訓とは無縁な地点への落着である。繰り返し強調すれば、中国ではプロレタリアートをみちびき手として農民を主力軍とし、土地革命を軸として農村根拠地・解放区を建設することと結びついて政治工作と革命戦争が展開された。

だが、赤軍―連合赤軍が示したものは、日本革命の主力軍として当然にも設定しなければならぬ労働者階級の運動の外側で運動を展開しているにすぎない。この主力軍⇨労働者階級を革命に組織する（観念上でプロレタリアートを指定するのではなく）原則的であり、且つ緊急な課題である任務と結びつかない運動は、遅かれ早かれその政治的腐敗を招くものである。

最後に、武闘闘争の堅持を、人民の結合と武装闘争を担う主体の問題に還元し、政治性を解体している典型として上原論文を掲げなければならぬ。

「日共革命左派の諸君が、鉄砲の奪取にはじめて成功した闘争は全く偉大である」と評価し、「しかし、鉄砲を奪取することと、鉄砲を人民の武器として正しく使いこなすことは全く別のことであり

大きな距離がある。」そして、「鉄砲を人民の武器として正しく使

いこなす為には」「鉄砲を手に入れる」「そこで初めて次の段階へ移れる。」「次の段階とは第二に、鉄砲を正しく使いこなせる戦士を作り出すことである。」（序章上原「長征に出発せよ」）

「人民と正しく結合しえない鉄砲は、圧倒的な武器力の敵権力に包囲され孤立させられ敵の十字砲火で壊滅させられるであろう」とその効用を戒しめ、「日本革命戦争は、鉄砲を正しく使いこなせる戦士と、政治、軍事、思想路線と、党―軍―統一戦線こそが、登場しなければならぬ。」だが連合赤軍の敗北は、「それがいかなる系統をたどったにせよ「銃撃戦」にまでたどりついたものであり、この地平を死守しつつ、今一度革命戦争の原点にたちかえり、やり直すことである。」そして、最後に、「長征に出発せよ」と「血の教訓を正しく受けとめ、誤り(?)を克服し、正しい革命戦争路線を獲得し、人民と正しく結合する為、長征に出発せよ。」「人民の中へ」「人民の軍隊に」と呼びかけている。

だが、この主張も「人民一般」に溶解している。我々が指摘し批判した諸点を考慮しなければ、それは、人民の中で溺れるか、情勢の波間で同じ誤りを犯すことになるだろう。

(三)「人民一般」との結合

―俗流大衆路線のまやかし

先に見たように、武装闘争―銃撃戦を日本革命の総路線として評価する部分と対極をなすが、赤軍―連合赤軍が真に人民と結合し

た軍隊でないとして赤軍兵士たらしとする部分が人民の中へ結合を求めらることを主張する。

この「武装闘争」と「人民との結合」は、蜂起戦争派の残党の限界の最後の残りかすとなっている。事実、「この銃撃戦は敗北した。」「この敗北の決定的に明らかにする中で『人民の軍隊―人民』の武装闘争の陣型を創出していかなければならぬ。」（日本赤色救援会）とし、「共産主義の赤旗を守りぬき、労働者人民の真に進むべき道を明示しなければならぬ。」（レーニン研究会）ことを強調しながら大衆路線を導き出す。

蜂起戦争派の多くの諸君は、何はともあれこうした方向へ「戦略の確定を抜きに」移りつつある。「人民と正しく結合するために長征に出発せよ。」（上原）「革命的流派としての共産同赤軍派は、この事件によって腐息と共に死に絶えたのではなかったか／歴史的事実として死に絶えたのではないのか。」「息を引きとりつつあるこの流派を自らの手によって埋葬することによって。」（序章、八木論文）と自問自答する八木の「武装闘争と大衆闘争の武装的發展、党と階級諸組織の武装の一步一步の前進」（八木論文）、「過激派とルンプロの結束を」（大美万吉）等々が、それに他ならない。

こうした主張は、連合赤軍の敗北を「今回の事態をはっきりと、政治抜き軍事路線の破産」「人民内部の矛盾のあらわれ」とし、「反米愛国、人民遊撃戦争路線、毛沢東思想を高くかかげて」のシンボルマークで前進できるとする（京浜安保共闘獄中同志）とは違い、総括や政治路線の確定はともかく、あるがままの運動、手軽な運動に乗り移るといふ俗流大衆路線に他ならない。それは、極左戦術から右旋回の急変であり、日和見主義と階級闘争の新たな前進に対する待期主義に他ならない。実際、蜂起戦争派の中核は、「再起のた

めの自己批判」を通して、「真のプロレタリア党建設への苦しい闘いに踏みだしたいと思う。」（八木）「すでに鋭い闘争形態だけによって問題を提起する時期は終わりました。これ以上の前進は、真の革命の政治に基づく日本革命の全局を見とおし、百年の大計によって、革命政党をうちたてる以外にはありません。」（雪野健作）に、表現されているように、自己批判、総括論争を通してプロレタリア革命路線の模索の段階に入り、事実上階級闘争の前進からの召還となっているのである。しかも、「人民の中へ」という一見大衆路線として打ち出されたごとく見えるこの方針も、極左戦術の破産の後に往々に見られる政治的揺れ動きなのである。（五〇年―六全協に至る日共の流れを想起せよ）

我々は、こうした俗流大衆路線への傾斜とこの渦中で提示される問題提起が、不毛の燃焼であることを明確にし確認しなければならぬ。

そもそも大衆路線とは、前章の中国の教訓で指摘したように、革命の主力軍の設定、その組織化、日本革命の性格と戦略の確定抜きに語ることはできない。この前提と確信があつて、当面の方針―政策を不断に実現するものとして、党と大衆の結びつきと在り方が大衆路線として問われるのである。

蜂起戦争派の獄中グループは、連合赤軍兵士の逮捕とリンチ、同志殺しによって、その敗北的総括と、新たな路線を暗中模索している状況であり、それは、当面実践からの召還である。

又、連合赤軍に期待をかけた群小グループは、連赤ショックを受けながら、とにかくあたり前のことながら、自分達の位置を、人民―大衆の中に見いだしたのである。

代表的な主張を取り上げ批判しておこう。

赤軍コンプレックスを巧妙な左翼的言辭で粉飾しているレーニン研究会は、「連合赤軍の路線上の軍事観念論は、団結―批判―団結の原則で厳しく批判し」、「反面教師」として教訓化することを言っている。しかし、彼らが革マル・革労協にかみついで言う「単純な論評、自己の日和見主義的、合法主義的実践を全く棚に上げ」が、そっくり彼自身にふさわしい批判となる。

「肅清は絶望的誤り」としながら、「連合赤軍内部の対立は、労働者解放のために、生涯を捧げんとした革命家の対立」に求め、最終的に、「今回の事件は、軍事観念論が墮落した革命暴力を産み落とし、それが連赤内部の規律維持の方法の問題に投影したと言えなことはなす。」とする。

「軍事観念論」(?)が生み出した産物だとして、一体誰が銃を手にしたのか、七〇年早々、こけた赤軍を誰が再建しようとしたのか。レーニン研は、手を汚さず、おしゃべりを繰り返していただけではなかったのか。自分達こそ「軍事観念論反対派」ではないのか。

そして、「肅清事件を日本共産主義運動の再生の機としよう。」と再出発の心を新たにし、連合赤軍―蜂起戦争派の戦略的総括と脈らくを欠いた「マルクス主義で武装した我々の軍隊を工場、職場を基礎に全人民の中に配置し、労働者の党性を一層強め、不退転の階級闘争の組織化でもって画策されつつある日米反革命同盟の新たな段階の下での日米帝国主義のアジア侵略、反革命を粉砕せよ。」と、かならずや再登場することを宣言する。

だが、ありもしない「我々の軍隊」を工場に配置しても、「工場闘争の権力闘争として闘う戦略的展望」を明確にしきれない彼らにあっては、資本の日常性の中に没してしまふのが関の山であろう。しかも、「我々の未だ手の届かぬ日本中の到るところで働く人々、

それは、我々の潮流化運動の中で、工場闘争を主軸とした統一戦線によって、彼らの圧倒的部分を活性化させ、統合してゆかなければならないことである。

新左翼のまったくの無方針と先細り、蜂起戦争派の破産と、政治カンプニアへの逃亡こそ、我々が、真の政治闘争を担う、実体的力量を持つて切り込む最大の条件である。

結語

我々は、この間一貫して、フロントが反政府闘争の実力闘争としての展開を、「街頭武装闘争」―「中央権力闘争」として「戦略化した」誤りを批判してきた。又この中央権力闘争―街頭武装闘争(六九年四・二八闘争)の敗北から登場した赤軍派の戦略路線をその破産から生み出された「焦燥する小ブル集団」の絶望的な国家権力とのゲリラ闘争路線として批判してきた。

その後、赤軍の大菩薩峠の早々の敗北にもかかわらず、それは、「建軍―武装闘争」を旗印に、登場しては霧散する一発ゲリラが、赤軍の残党、群小グループ、連合赤軍によって、七〇―七一年に於てニュースバリーを克ち得ていた。

これら蜂起戦争派の中核行動部隊は、言うまでもなく、連合赤軍であった。

そして、連合赤軍―蜂起戦争派の限界の一つは、日本革命の主力軍―労働者階級本隊の組織化の展望と着手を抜きにしていることであり、したがって労働者階級の組織化は、武装闘争をもって革命を開始するという彼らの戦略路線を否定するからである。

実際、彼らの構成部分は、労働者階級の組織化に絶望した部分、崩れゆく全共闘運動を喰い止める展望を持ちえなかった学生生活動家、職場から排除された元反戦派労働者から成っていった。彼らは、八

労働者農民、漁民、知識人、学生達が「日常的に、たくましい腕を振り上げ、戦闘宣言を布告し苦闘しているではないか。」と、連赤ショックで依拠する方向を失って、「革命の主力軍の設定を抜きに」、結びつく部分を羅列し、見てきたような全国各地の闘いらしきものに胸をなでおろし、ホッと安心してあるのである。そして、雲上の王国の「現代革命論をこの地上に押しつける前にまず、この資本主義が不可避に生み出す客観的現実としての階級闘争の全ての現われに注目し、それと結びつき、依拠し、その細流を大河へと組織化すること。」と大衆路線を設定する。

レーニン研は、自分達の現代革命論が赤軍―連合赤軍に依拠しており、それが、肅清を伴う連赤の敗北によって破滅したことを確認しなければならぬ。実際は、「資本主義が不可避に生み出す客観的階級闘争」の教訓を、普遍化し、現代革命論として形成することにある。

そのためには、「全ての現われに注目」することに良いが、その全てがプロレタリア革命に自然と合流するのではないこと。それは当然にも、社会革命の主力軍の戦略的展望の上に諸闘争を位置づけ、党指導の全国化と組織網によって始めて、「その細流を大河へと組織化することが」できる。これこそ、「マルクス主義の最も根本的な姿勢」ではなからうか。

今やレーニン研を始めとする蜂起戦争派の群小グループが、手軽で手訓れた大衆路線に乗り出している。自らの党派性―武装闘争を棚上げにし、旧然としたカンパニア結集を軸にしながら。新左翼運動の限界を口にしながら、それを乗り込める前提をつかみきれない。彼らが、俗流大衆運動とし腐敗するか、あるいは再生の転岐となるかは、すぐれて我々自身の肩にかかっている。

派全共闘―カンパニア連合に対する不満分子、焦燥分子を引きつけ、連合赤軍敗北まで蜂起戦争派の潮流として存在していた。

周知のように、我々は、学園占拠―都市反乱に象徴される六八―六九年の日本階級闘争の局面を、労働者本隊の工場占拠ゼネストに転化させるべき全力を尽した。

だが、七〇年、八派政治の多数派セクトは、安保実質化攻撃―職場工場からの反戦派、不逞分子のページ、学園支配の強化、活動家ページから街頭カンパニアスケジュール闘争へ逃亡した。

又、一方、赤軍派に代表される国家権力との直接対決を、旧来の街頭武装闘争の限界を指摘、小教精鋭のバルチザン集団によって、攻撃的に展開しようとする潮流を生み出した。

我々は、こうした二つの潮流とも、たもとをわちち、真の権力闘争の大道、工場占拠―二重権力、武装蜂起を独力で歩んできた。

学園において、先の二つの潮流が回避した、全共闘運動の壁―ロッキアウシビッツ粉砕闘争、学園人民戦争を、後退戦として闘い抜いた。(武装六号参照)又、工場闘争を権力闘争として闘い抜く実践的着手として工場労働者を送り込んだ。

現在まで二年有余の工場闘争―行動委運動の進展は、工場の内部と外部の真剣で苦しい闘いの中で培われた。とりわけ、学生戦線の革命的分子を、労働者階級組織化の確かな手ごたえを感じるに到り、行動委連合に当初から組織し、工場・地域の宣伝行動隊という新しい任務を与えていった。

こうして、我々は、本年三月、首都圏行動委連合を結成するに到り、工場闘争と労働者階級組織化の確かな手ごたえを感じるに到った。(工場労働者、機関紙参照)

政治スケジュールカンパニア闘争を唯一の売り物にする潮流の混

迷と停滞、連合赤軍の潰滅と蜂起戦争派の分解、文字通り、我々が、この間の実践的成果―権力闘争の総路線（世界革命五号、前衛六九号、党大会報告参照）と組織的実体を引っさげて登場し、工場闘争の潮流に吸収していかなければならない。

すでに、行動委連合に結集する労働者達は、「潮流化運動」として八月の全国労働組合活動者会議に参加し、連帯と交流を拡大しているし、学生戦線も政治闘争の取り組みと統一戦線の形成に一步踏みだし始めた。

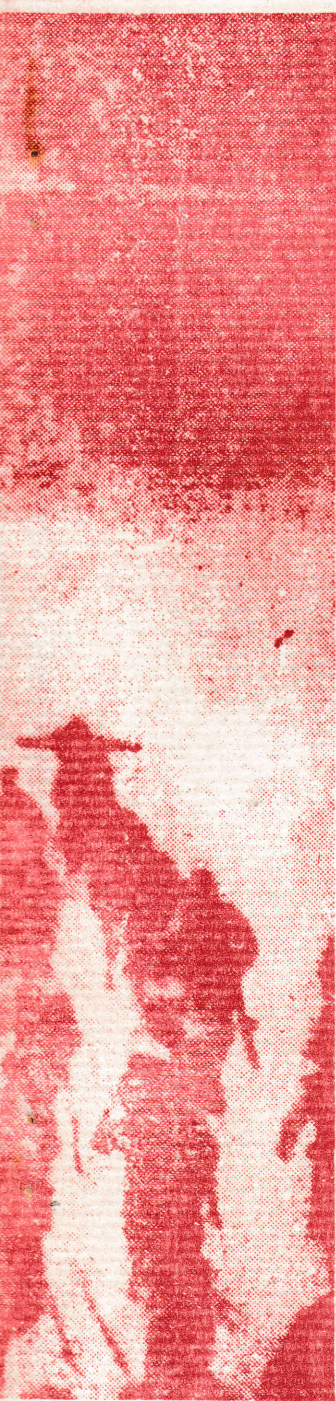
この蜂起戦争派グループの批判も、我々が政治闘争を大衆闘争として取り組むための一作業である。何故なら、大衆闘争の広さと深さを保証するものこそ統一戦線戦術の正しさであり、何よりもその根幹をなす、日本革命勝利の戦略路線の正しさだからである。政治闘争を担う諸君の限界は、この戦略を不確定にしながら、戦術を経験主義的、場当りの、スケジュールのこなしているにすぎないのだ。あるいは、こうした戦術のエスカレートを戦略次元に無理矢理押しこんでいるのだ。プントがグバ棒闘争を、中央権力闘争―街頭武装闘争 による 国家権力の打倒 としたり、中核の「内乱―蜂起」のおっかぶせがそれに他ならない。

これらはレーニンも認める 労働者階級の革命的な大衆闘争機関―武装蜂起の機関―生産とその配分の全国的機関としての「ソビエト」の構築を抜きにブルジョア国家権力を打倒しようとする空論にすぎない。

政治革命と社会革命を一元的止揚するソビエト権力―労働者権力によるブルジョア権力の打倒という戦略の根を視点を、欠落させていることに他ならない。

我々は、正しい権力闘争の戦略路線と当面する任務（党大会テ

ゼ）を創造的に適用し、柔軟に統一戦線戦術を駆使し、戦略なき戦術左翼諸君を我々の側に統合しなければならぬ。



武装第7号

発行 共産主義武装行動委員会
発行日 1973年11月20日
連絡先 千代田区飯田橋3-1-6
飯田町ビル内 前衛社
(264)5079

定価450円